

Title	日本マンガと自己形成 : 読者の自己恋愛物語をめぐるって
Author(s)	陳, 欣
Citation	
Issue Date	2011-03-24
URL	http://hdl.handle.net/10129/4558
Rights	
Text version	author



<http://repository.ul.hirosaki-u.ac.jp/dspace/>

2012年

修 士 論 文

(専攻分野 文化コミュニケーション)

(指導教員 羽渕 一代 准教授)

論文題名

日本マンガと自己形成
—読者の自己恋愛物語をめぐって—

弘前大学大学院

人文社会科学研究科修士課程

陳 欣

目次

序章	1
第一節 問題関心	1
第二節 恋愛と自己形成	6
第一章 メディア受容とマンガ読者	9
第一節 メディア・オーディエンス研究	9
第二節 「マンガ - 読者」論	12
第二章 分散的自己の物語的形成	18
第一節 自己物語論	19
1. 自己は自分自身について物語ることを通して産み出される	20
2. 「語り得なさ」と自己変化	21
第二節 文化心理学的自己論	23
第三節 フバート J.M.ハーマンズの「対話的自己論」	25
1. 自己空間 (Self Space)	26
2. 誤解の生起	30
3. 「集団の声」と「個人的声」	31
4. 自己定義と対話の排除	32
5. 不確実性 (Uncertainty) の生起	33
第四節 分散的自己の物語的形成——理論枠組みの構成へ	35
1. 新しい視点構成の可能性と必要性	35
2. 対話による自己物語の編成	39
3. 「個人の自己形成における連続性と変化」に関する仮説	41
第三章 マンガと恋愛に関わるライフストーリーに関する質的調査	44
第一節 調査概要	44
第二節 マンガと自己恋愛物語の編成	48
1. 恋愛意識・恋愛行動に影響を及ぼす要因	48
2. マンガが自己恋愛物語の編成に与える影響とその影響に関連する諸要素	55
3. 自己変化に関する事例分析 (自己変化に関する仮説の検証)	68
第三節 本章のまとめ	81
第四章 結論	84
1. 「分散的自己の物語的形成」という視点の再構成	85
2. 対話的自己物語論における問題点	86
3. 今後の課題	87
参考文献・参考 URL	91

序章

第一節 問題関心

「マンガ¹」といえ、多くの国家と地域に影響を及ぼした、日本マンガ文化に思い至る人が少なくないだろう。

現代日本において、マンガは巨大な市場を形成している。2008年、1年間に出版された雑誌・単行本の約4割、4483億円がマンガで占められている（『出版指標年報2009』）。学齢前の子どもから高齢層の人たちにわたって、多種のマンガが読まれている。おそらく、マンガを一冊も読んでこなかった日本人は、ごく少数だろう。風刺・風俗マンガ、少年・少女マンガ、青年マンガ、生活マンガ、ユーモアマンガ、ギャグマンガ、そして学習マンガ、それらのマンガが多様な形で、人々の生活に関わっている。

また、日本マンガは、ほかのメディアとも緊密につながり、巨大な産業を形成し、他国のマンガ制作・鑑賞にも大きな影響を及ぼしている。アジアや欧米など世界中の人々に愛され、海外の街角にも日本のマンガ書店が並び、「MANGA」はそのまま世界で通じる言葉になった（伊藤，2008）。

戦後日本マンガの巨大な発展を受けて、2003年1月17日、文化庁の「国際文化交流懇談会」が、日本映画やマンガ、アニメーション、コンピューターグラフィックスなどを重要な日本文化芸術として位置づけ、積極的に海外に発信することなどを提言し、日本文化の国際交流の方策について発表した（「国際文化交流懇談会・中間報告」²，文化庁，2003）。同年12月25日、総務省の情報通信ソフト懇談会では、アニメーションやゲーム、マンガなどのポップアート、ポップカルチャーを国の政策として伸ばすことが日本の経済競争力強化につながるとする報告書がまとめられた。マンガが世界中で高い評価を得ているながらも日本国内では低い評価を招いているという状況および関係者の劣悪な就業環境などの現状が見直され、その改善が提唱されている（「情報通信ソフト懇談会・最終報告書」³，総務省，2003）。

ここでは、ひとつの矛盾が見られる。すなわち、マンガ産業の発展と海外への進出を見

¹ 本文において、「マンガ」という言葉は、主に戦後日本の「ストーリーマンガ」のことを指している。

² 「国際文化交流懇談会・中間報告」参考URL：

http://www.bunka.go.jp/1kokusai/kokusai_kouryuuhokoku1.html

³ 「情報通信ソフト懇談会・最終報告書」参考URL：

http://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/235321/www.soumu.go.jp/s-news/2003/031225_8a.html

れば、戦後日本マンガの発展は極めて眩しく、かなり成功しているものである。しかし、もしこのような認識(すなわち、マンガ文化あるいはマンガ産業の発展の素晴らしさ)が、マンガの発展の各時期において、十分に認められてきたならば、上述の懇談会の報告書は、存在する意義がなくなり、マンガを重視すべきものとする意見も提出されるわけがない。こういった矛盾を一言でいうと、それは、マンガが海外に及ぼした大きな影響や、関係産業や技術の巨大な発展と、国内でのマンガに対する低い評価や関係者の劣悪な就業環境との差である。マンガへの評価は、マンガそのものの発展とは、異なる次元にある。

戦後日本マンガに対する非難は、1950年代の「悪書追放運動」に遡ることができる。評論家の竹内オサムは、「悪書追放運動」の起こった要因として、二点を挙げている。第一に、子ども雑誌に掲載されていたマンガには、「低俗」な描写が含まれているということである。当時、「低俗」な描写として非難を受けたのは、主に暴力や性的表現および乱暴な言葉の使用である。第二に、当時、マンガ作品の需要増加にしたがって、新人たちの作品が起用された。それによって、作品レベルが低下し、それがマンガへの糾弾にも直接に影響していた。要因が複数あると考えられるが、「悪書追放」の旗を振るマスコミの記述から判断するならば、「追放」の理由は、「低俗」な描写が主たるものであった。

「低俗」な描写に対して、最初に非難したのは、「日本子どもを守る会」、「母の会連合会」および各地のPTAなどの団体であった。同時に、『日本読書新聞』などの図書の専門紙が、この問題を取り上げた。したがって、運動は日々進展していった。『日本読書新聞』は、1955年3月から5月まで4回にわたって「児童雑誌の実態」という連続特集を組んだ。このような報道に、『読売新聞』や『朝日新聞』などの大新聞が注目することによって、児童雑誌問題は全国的問題となっていた。1955年1月20日付の『朝日新聞』には、青少年問題協議会に関する記事が掲載されており、当年度の青少年保護育成上の基本計画の樹立に関して、「不良文化財排除」という方針が報道されている。2月11日付の『朝日新聞』には、滑川道夫は「青少年読物を健やかに」という文章を発表し、そのなかで、「影響力のはげしい娯楽雑誌にとってみよう。マンガ絵物語が平均42%も占めている」と述べ、さらに、それを青少年の心身の健康と結び付けて、「青少年たちが、おちついた判断をとれずに粗雑サツバツな行動をとり、思慮深さをうしないつつある要因のひとつは、この俗悪娯楽読物にある」と主張している。4月に入ると、『朝日新聞』には、「エログロ出版は致しません：出版団体連合会業界浄化に乗出す」と「ひど過ぎる児童雑誌」という記事が見られ、4月27日付の夕刊では、「悪書追放」というタイトルを用い、出版界の自粛

への動きを報道した。その後、不良出版物や青少年健康問題が何度も主張された。結局、編集者と作者が問題解決に向かって対応を示したことにしたがって、マスコミや評論界の反応も緩和されていった。

50年代の「追放運動」は、その後の論争に比して、少なくとも、2つの特徴がある。第一に、それは戦後民主主義という新しい時代の希望と不安のなかで、新しい文化であるストーリーマンガが、それ自体奇異な存在に映ったということである（竹内、1995）。第二に、追放の対象になったのは、マンガだけではなく、当時の青少年読物、特に児童雑誌に掲載されたもの全てであったことである。しかし、マンガに描かれたものが青少年に悪影響を及ぼすという論点は、後の評論とは一致している。

マンガの有害性が再びマスコミに大きく取り上げられたのは、1990年代初頭であった。当時の背景として、「オタク問題」を確認しておく必要がある。1988年から1989年にかけて宮崎勤という27歳の男性は、幼女4人を誘拐殺害した。逮捕されたとき、彼の部屋からは、大量のビデオ（ロリコン・ポルノ・アニメを含む）と同人誌（実際、宮崎は同人活動に参加していたこともわかった）が発見された。このことはマスコミに取り上げられ、「オタク」が殺人事件を犯したということは多くの眼差しと議論を集めた。「オタク」という言葉は、ポルノマンガやアニメと関連して、危険性を持つ若者というイメージを持つようになった。マンガへの視線が一層厳しくなった。

この事件を背景にして、和歌山県の主婦数人が、マンガ規制運動をはじめ、マンガにおける性的描写が子どもたちの目に触れさせるべきものではないと唱えた。その後、運動は全国に広がり、マスコミやPTA、フェミニスト、政治家まで巻き込み、出版関係者の逮捕や各地の青少年保護条例の改定に至った。

その後、マンガが有害であるという論調は、1995年の地下鉄サリン事件によって再び注目された。事件の犯人の「オウム真理教」を率いる麻原彰晃が、幼い頃から、マンガやアニメの大ファンであり⁵、オウム真理教の布教の手段として、アニメやマンガの製作出

⁴ 「オタク」という言葉の定義が曖昧化している今日、一口に「オタク」といっても、多様な意味が含まれている。『同人用語辞典』（窪田、2004）によれば、それは「アニメ、マンガ、ゲーム、特撮などの熱心なファン、及び二次元ロリ（ロリコン）ファンで、やや対人関係に難がある人々を指したことばである。また、1989年の宮崎事件の当時では、オタクという言葉は多くの場合、中森明夫の『『おたく』の研究①』（『漫画ブリッコ』、1983年6月号）における論説に基づいて用いられている。浅羽通明は、中森の説をまとめて、「オタク」を、「それまで、マニアとか熱狂的なファンとかネクラ族とか呼ばれていたマンガやアニメ、SF、コンピュータ、アイドル、鉄道などに没頭する若者の一群」を指している言葉として説明している（浅羽、1991）。

⁵ 「麻原教祖の虚像と実像——オウム真理教を開いた男、サリンとオウム」（井原圭子ほか、『AERA』1995年4月10日号）。

版が利用され、またアニメやマンガから、恐るべき計画が編み出されたい⁶といったことに関する雑誌記事が出た。

こういった一連の出来事とマスコミの拍車をかける報道によって、マンガや、アニメ、および「オタク」と呼ばれるマンガ・アニメ・ゲームの愛好者がますます問題化され、マンガやアニメを好む人たちが精神的に、その作品から悪影響を受けているという評価が一層きつくなった。

上述の流れは、産業およびサブカルチャーとしての日本マンガの巨大な発展と、それに対する評価との間のギャップを象徴するものである。それはそういったギャップの表現でもあり、蓄積された矛盾が噴出した結果ともいえるだろう。しかし、こういったギャップの存在が、今後、産業およびサブカルチャーとしての日本マンガの発展にどのような影響を及ぼすのか、この問題はこれまでの研究において究明されていない。多くの評価が主張しているようにマンガは有害なのかという疑問が明らかになっていない段階では、一口に「マンガが有害だ」ということは、賢明ではないだろう。これまで、多くの学者、評論家はマンガ有害論を批判してきた（福島章、1992；フレデリック・L. ショット、1998；宮原浩二郎・荻野昌弘、2001等）。

戦後マンガ有害論の歴史的流れから考えるならば、論争の中心になるのは、マンガが本当に読者、とりわけ青少年たちに、強い影響、とりわけ悪影響を与えるのかということである。その「影響」は、少なくとも、二層の意味を含んでいる。第一に、読者は、マンガを読むことによって、そこにおける悪質な情報を吸収し、精神的に異常状態になったり社会規範から逸れる行為（暴力や極端な性行為など）をしたりするという意味がある。第二に、マンガおよび幻想に基づくストーリーの再生産は、一種の架空の世界（二次元世界）を作り上げ、そこに陥る人たちは、実世界から疎外されるという意味である。たとえば、中島梓のオタク論によれば、オタクたちは、『『自分の場所』を現実の物質世界に見出せなかった疎外されそうな個体が形而上世界のなかに自分のテリトリーを作り上げる事で現実世界の適応のなかにとどまった」人間類型である（中島、1991）。近年、「二次元」に関する出来事として、二次元キャラクターとの恋愛・結婚（場合によって、二次元コンプ

⁶ 「共通語はSFアニメだ——オウム真理教式発想のカギ」（井原圭子、『AERA』1995年4月24日号）。

レックスと呼ばれることもある)がある⁷。このようなこともまた話題となり、様々な議論を喚起している。それはマンガ有害論が収まる現在では、論争の焦点になっていないが、論争の焦点の延長線にあるのではないだろうか。

前頁ですでに述べている「社会問題化されたマンガ」の歴史を検討するならば、「性」や「暴力」、「恋愛」、「現実世界の適応」といったキーワードが浮上してくる。とくに、「性」と「暴力」に関する表現は、読者の犯罪行為とつなげられ、問題の中心に位置づけられている。この問題について、精神医学者の福島章（1992）と作家のフレデリック.L.ショット（1996=1998）は、統計調査のデータを用いてこの二つの連関を否定している。福島は出版科学研究所と犯罪白書のデータを分析し、「その国民がアクセスできる性的情報の量と、その国の性犯罪の数とは反比例する」という結論を出している。「マンガ有害論」に対し、福島は、日本の青少年について性的情報に多くアクセスできるといえるが、一般的な思い込みとは反して、セックスの面では他国の青少年より抑圧され、発達が遅いと指摘している。性的情報は氾濫しているが、性的犯罪や性行動の増加は見当たらないという。

また、「暴力」に関しては、ショットは日本とアメリカのコミックス・マンガの売り上げおよび両国の犯罪に関するデータを活用して、アメリカの犯罪発生率とマンガ売り上げに比して、日本におけるマンガの売り上げが高い一方、殺人およびレイプの発生率がずっと低いということを指摘している。さらに、アメリカ一国の数字を見れば、殺人犯罪の発生率とコミックの販売部数との間には、なんら相関関係が見られないと、ショットが説明している。日本の状況もそれと同じであり、「マンガやアニメが爆発的に人気を得た時期に、これらの犯罪件数は、日本においては、増えるどころか、むしろ逆に減っているのだ」という。

たしかに、これらの考察は、当時説かれていた「“有害” コミック亡国論」に有効な打撃を与えている。しかし、彼らは、「マンガ有害論」に対して、反論をしているが、それが国民全体の状態についての分析になっており、個人の状況を不明のままにさせていることによって、万全な論拠になっていないのではないだろうか。

上述のような量的分析は、マンガが社会にどのように影響を及ぼしているのかという問題をある程度究明することができるかもしれないが、その場合、調査の対象がある社会集

⁷ 二次元コンプレックスとは、とくにアニメのキャラクターやマンガの登場人物が、実際の女の子より好きな人を指している（窪田，2004）。事例として、2008年、『署名TV』（www.shomei.tv）では、日本政府に対し「二次元キャラとの結婚を法的に認めて下さい」という署名活動が行われた。また、インターネット上の「2次元キャラクター結婚認定協会」（2.D.C.M.A）があり、実際にマニアがキャラクターと結婚式を挙げたということを報道する記事もある。

団に所属する人々になり、「読者」というカテゴリーを見逃すことになる。さらに、マンガを受容している主体は読者個々人である。マンガの影響は個々人の人生におけるほかの出来事とつながり、時間的系列において個人の意識や行動に影響を与えると考えられる。こういったミクロの視座を失えば、マンガが個人に与える影響のプロセスやそのプロセスに関与する他要素を把握することができない。影響のプロセスを不明のままにさせる場合、マンガが有害であるということを論じる足場がぐらつくことになる。

では、個人という視点から考えるならば、マンガが読者に強い影響を与えるのか、またはどの影響を与えているのだろうか。これが本論の中心的な問いとなる。

ここでは、こういった問題を二重のものとして理解している。ひとつはメディアが受け手（場合によって送り手でもある）に対して、どのような影響を果たしているのかということであり、もうひとつは、マンガという文化が、読者の「自己」と、どのように関係しているのかということである。なぜなら、マンガはメディアであるが、その一方で、マンガというサブカルチャーが広範囲で認識されている現在、それを文化としても見なされている。今日、マンガに関する事情を考察する際、その二つのカテゴリーの特性を同時に対象としていると言えるだろう。したがって、ここでは、マンガの特性の重層性を意識しながら、またそれを一つの全体として把握しようとする。

第二節 恋愛と自己形成

おそらく、歴史的にいえば、日本マンガ文化には、ひとつの問題の解決が要求されている。すなわち、マンガは読者の人生に影響しているのか、または影響があるとすれば、それがどのような影響であるかという問題である。

本研究は、「恋愛」というテーマで個々の読者のライフストーリーに接近したい。以下では、「恋愛」というテーマの妥当性について説明する。

「マンガが読者の自己形成においてどのように影響しているのか」という疑問を解く鍵は、マンガ文化成熟のプロセスにある。とくに、マンガが社会問題化されることに焦点を当てたい。

第一節において概観してきたように、マンガが社会問題化される過程において、いくつかのテーマが論争の中心になっている。つまり、「性」や「暴力」、「恋愛」、「現実世界の適応」という四つのテーマである。たとえば、オタク問題に関する論争がピークに至った

80年代末に出版した『おたくの本』に収録された評論の多くは、この四つのテーマをめぐって展開されている。

また、マンガ文化そのものの成熟のみならず、読者はマンガから何を受け取るのかということも重要であろう。家島（2006a=2008）は、「マンガを介した青年の自己形成支援プログラム作成」の重要性について説明するとき、マンガの教育効果、すなわち、人々がマンガから学ぶものの存在を指摘している。彼が収集したデータは、「マンガが青年の自己形成を支援し得ること」を示唆している。彼は、「大切なことはマンガから教わった」というウェブ上のコミュニティにおける書き込みの分析を行い、人がマンガから受けた影響について検討している。その結果、人々がマンガから学んだテーマ（原注：マンガからの影響内容）は、「恋愛」、「友情」、「努力」、「人生」、「知識」という五つの主要なテーマに集約されることが分かった。さらに、家島は先行研究・評論の語りをまとめて、「マンガの効果（原注：人々がマンガから無意識のうちにさまざまなものを学んでいるという事実＝マンガが人々にさまざまなナラティブの枠組みを提供しているという現象）が如実に現れている」と述べている。すなわち、マンガ読者自身のナラティブによれば、彼・彼女たちはマンガから無意識のうちに何かを学んできた。その学びの内容を並べると、上位の五つが「恋愛」、「友情」、「努力」、「人生」、「知識」といったテーマである。

マンガ文化成熟のプロセスおよび読者がマンガから学ぶものという二つの側面を合わせて考えるならば、「恋愛」というテーマは、マンガの影響を分析する際、もっとも適合的だと考えられる。「恋愛」というテーマから着手すれば、社会問題化されるマンガという現象と、マンガが読者の自己形成に与える影響といった二つの問題に接近できるだろう。

このテーマを選ぶもうひとつの理由は、「個人への接近」という研究の方向性にある。個人のライフストーリー（ナラティブ）を中心にして分析しようとするため、個人の人生そのものに接近しやすいテーマが要求されている。つまり、あるテーマを用いて、質的調査の場所と時間において、できるだけ対象者に不快な思い出を残さないように、対象者たちの「本音」（ナラティブとしての本音）を収集することが求められている。その場合、より気楽に語れるテーマが必要である。第一節に提起されている問題に関わる四つのテーマにおいて、「恋愛」というテーマは他と比較して、具体的な経験として語るのがたやすいといえるだろう。

本研究では、マンガが社会問題化された歴史、および先行研究の成果とそこに残されている疑問を踏まえ、マンガ読者のライフストーリーに注目し、そこから、マンガが読

者の恋愛に関わる自己形成に与える影響を究明する。

本研究は主に文献調査と聞き取り調査を用いる。

まず、文献調査を行い、先行のメディア・オーディエンス研究とマンガ読者研究を概観し、それらの研究の成果と残されている問題を整理して、「マンガが自己形成に与える影響」を考察するための研究の方向性を検討する。その方向性に基づいて、適用できる理論を導入し、理論枠組みを構築する。

また、マンガ読者のライフストーリーに接近するため、ライフストーリー調査を行う。35人の対象者に対して、聞き取り調査を行い、調査で収集されたデータを整理し、本論の理論枠組みにおいて分析し考察する。

本文は五章によって構成されている。序章において、問題の提起とテーマの設定をふまえて、研究目的を提示した。

次に、先行のメディア・オーディエンス研究とマンガ読者研究を整理し、研究の妥当性を検討する（第一章）。第二章では、理論枠組みの検討を行い、五つの理論的仮説を提示する。第三章では、理論枠組みを用いて、実際にマンガ読者の状況を考察し、仮説を質的調査のデータから検討する。この結果をふまえて、「マンガが恋愛に関わる自己形成に与える影響」について考察する。

第四章では、論文の結論を述べ、考察の結果をふまえて、第二章に構成された理論枠組みを書き直す。最後に、今後の課題と展望を提示する。

第一章 メディア受容とマンガ読者

本章では、これまでの多くの研究の成果を、研究対象および研究上の歴史的流れによって、メディア研究とマンガ - 読者論とに整理する。もちろん、すべての研究と論説を整理することはできないが、その代表的ないくつかの観点をまとめる。そこで、先行研究の知見（成果と残された問題）を参考に、本研究の理論構築にとって必要な視点を検討する。

第一節 メディア・オーディエンス研究

アメリカで 1930 年代から始まったマスメディアの効果研究では、マスメディアは受け手の態度をいかに変えうるかという問題が大きな焦点となった（竹内郁郎，1998）。研究の初期に登場したのは、メディアが受け手に直接、強力な効果を及ぼすと考える弾丸理論（＝皮下注射効果モデル）である。1950 年代以降、弾丸理論が批判されつつ、マスコミ研究の主流は限定効果モデルに移っていた。限定効果理論によれば、メディアの影響は、それほど大きいものではなく、間接的なものにとどまり、さらに、メディアの主たる効果は、受け手の既存の態度の補強である。1960 年代後半になると、限定効果理論に対する批判が登場しつつ、メディアの影響を再評価しようとする路線で、利用と満足研究の流れや議題設定効果⁸や培養効果論⁹、沈黙のらせん理論¹⁰など、メディアの効果を限定的に捉えるモデルが次々に登場した（吉見俊哉，2001）。

吉見によれば、メディア効果研究が前提にしたパラダイムには、いくつかの問題が存在している。第一に、明示的な意味の背後にあるイデオロギーの問題は、ほとんど思考の枠外に置かれた。研究の焦点になったのは、メッセージの効果であり、メディアが媒介していく社会的なイデオロギーを論外にした。第二に、マスメディアの効果研究にとっては、メディアは中立的な媒体、すなわち送り手から受け手に一定のメッセージを伝える伝送路にすぎない。第三に、それらの研究が用いる送り手/受け手図式は、両者の関係を直線的

⁸ 議題設定効果：マスメディアが日々の報道を通して、人々の注目を特定のトピックや争点へと焦点化する作用である（竹内郁郎，1998）。

⁹ 培養効果：テレビを長時間見ている人ほど、テレビの現実描写を反映するようなやり方で、現実認識を形成するようになるという仮説である（竹内郁郎，1998）。

¹⁰ 沈黙のらせん理論：ノエル=ノイマンによれば、人はある公共的争点について、自分の意見が社会で優勢であると知覚すれば、自信をもって公の場でそれを発信しようとする。自分の意見が劣勢の側に属すると判断すれば、公の場での表明を控えるようになる。この意見の表明と沈黙の過程はらせん的に進行し、初めに優勢と見られた意見はますます勢力を得、劣勢と見なされた意見はますます孤立化する（竹内郁郎，1998）。

に捉え、媒介的な諸次元に働く力の複雑な絡まりあいを隠蔽している。

1970年代、カルチュラル・スタディーズ（CS）のスチュアート・ホール（1980）はメディア研究の新しい視点、つまりエンコーディング/デコーディングモデルを提案した。コミュニケーション過程の一方は、エンコーディングであり、それは単なる送り手ではなく、一種の言説的なメカニズムである（吉見，2001）。そこでは、テキスト生産のため、重層の諸要素（たとえば、社会的な諸装置や資源）が複合的に作用している。一方、このコミュニケーションの他方は、テキスト消費の主体であり、デコーディングであり、それはエンコーディングから、相対的な自律性を持っている過程である。デコーディングに関しては、オーディエンスの社会的位置は、解読する際に用いるコードと関係している。それによって、デコーディングにおいて、オーディエンスの立場は多様であり、同一視することができない。

その後、ホールの研究の延長線に立つデイヴィッド・モーレー（1980）は、番組の視聴者を対象とした研究を通じて、デコーディングのプロセスをさらに明らかにした。すなわち、デコーディングは、オーディエンスの階級やジェンダー、エスニシティ、世代、視聴の空間的、状況的なコンテキストによって枠付けられ、日常生活の中に織り上げられているという。ここでは、階級のみならず、日常生活におけるダイナミックな諸要素は、メディア消費と関連している。

こういったCSのメディア研究には、それまでのマスコミ研究と区別される、二つの革新点がある。まず、CSは、コミュニケーションのコード形成における対立や葛藤、イデオロギー、政治性、個人/集団の社会的属性（たとえば、階級、ジェンダー、世代など）といった視聴のコンテキストを重視してきた。また、メディアが、社会的現実を伝えるルートではなく、言説的实践を通じて「現実」を生産（構成）する装置であると、CSは主張している。

上述のメディア研究の流れを見ると、確かに、メッセージの伝送やテキストの解読のプロセスはある程度明らかにされたが、まだ問題が残っている。

第一に、吉見が指摘しているように、マスメディアの効果研究の始まりはきわめてイデオロギー的で政治的なものであり、戦時や冷戦時期のメディア利用と関連して、宣伝や世論形成と緊密に関わっている。CSの研究もまたコミュニケーションにおける政治性を重視し、オーディエンスをさまざまな差別の文化政治学が葛藤と矛盾を含みながら作動していく抗争的な場と看做している（吉見，2001）。しかし、文化政治学的属性に注目し過ぎる

と、あるジェンダー、ある世代、ある階級、あるいはある国、ある時期、ある文化に所属していると思われる人々、すなわち、集団というもの、および集団間の差異に注目することになる。また、視聴という行動にこだわり過ぎると、ある特殊性を持つ空間・時期・状況についての分析に陥るかもしれない。オーディエンスの視聴状況や、その背景にあるものをより精細に捉えるため、個々人の人生とその特性を見逃すことができない。なぜなら、個人としてのオーディエンスは、必ず何らかの形である集団やネットワークに所属し、必ずある空間に、ある時間で視聴しているが、その集団やネットワーク、および空間、時間を統合的に理解するため、個人という視点で考えることも必要である。そもそも、視聴行為を行っているのは、個人そのものである。こういった個人は、ある時点、ある場所、ある集団に限って存在するものではない。個人は生まれてから絶え間ない自己形成を通して、現在の自己に至っており、そして絶えず変化していく存在である。したがって、オーディエンスを理解するため、個人のライフストーリーを考察しなければならない。個人の人生に接近してはじめて、視聴行為を人生の一連の出来事において、または時間的系列において把握することができる。個人の人生においてこそ、視聴行為に関わる多様な要素と要素間の相互関係、およびそれらの変動がもたらす視聴行為・受容様式の変化を捉えることができる。

ここで主張したいのは、モレーたちの論理を批判することではなく、むしろその考えに基づいて、個人の日常生活に注目しようとし、読解という過程を、個人という視点から理解しようとすることである。その際、日常世界におけるダイナミックな諸要素が、どのようにオーディエンスの意識や行動に影響してきたのか、読解という過程をどのようにオーディエンスの日常生活に位置づけるのか、これらの事柄に接近しようとする、個々のオーディエンスの視聴状況のみならず、人生そのものに近づかなければならない。

第二に、オーディエンスがある番組やニュースをどう読み解けるかということを解明できるとしても、メディアがいったいオーディエンスに対してどのように影響（それが一方的なものとは限らない）しているのかが分かっているとは言えない。

まず、上述のメディア研究の重要な対象は伝送と読解の様式である。しかし、個人あるいは集団に対するメディアの影響を考察するため、分析の対象になるべきなのは、その影響を受けて（影響を受けるのは受動的・一方的ではない）、またある状況でその影響を部分的に表出する、オーディエンスそのものである。人間の人生のストーリーを分析し、そこで、メディアとメディアから得る情報をどのように編み込んでいるか、それがその他の

情報とどう関係しているか、また、メディアが個人の過去・現在・将来の意識や行動とどう関連しているか、それらに焦点を当てるべきではないか。

また、早期のメディア研究は、主に新聞やテレビ番組の視聴について論じている。メディア技術の発展、メディア産業の連合、メディア利用の目的・方式・行為などの多様化が進展している今日、メディア研究のパラダイムもその変化に合わせて調整されるべきではないか。まさにマックウエル（1997）が指摘しているように、通信革命がもたらす「根本的な変化が進行しており、新しい種類のオーディエンスが成立し、メディア利用の古いかたちが挑戦にさらされている」。それによって、現在の研究者は、変化に直面し、先行研究の成果をどう継承し、発展するか、どのように新しい研究のパラダイムを切り開いていくかを問い続けている（伊藤守，1999）。

しかし、変化しているのは、技術やメディアのみならず、オーディエンスとその背景にある文化や社会的文脈も変容している。それは単に視聴様式の変化¹¹だけではなく、オーディエンスが所属する集団や文化の重層化も進展している。伝統文化とサブカルチャーが共存している場に生きている人や、多様かつ多重な文化圏、文化集団に参加している人は、グローバリゼーションや技術の発展にしたがって増加している。このような文化環境において、複雑になってきたオーディエンスの意識や行動に対して、日々発達しているメディアと増大している情報量は、どのように影響しているのか、という問題を見直す必要がある。

今回の研究は、従来のメディア研究を否定するわけではない、むしろそれらの知見を参考にしながら、今まで見逃されている問題を意識し、個人としてのオーディエンスのライフストーリーに接近して、個人において、メディアとそこから読み出された情報が、どのように存在しているのかを発見しようとしている。

第二節 「マンガ - 読者」論

もう一つ整理しなければならないのは、マンガと読者との関係をめぐる論説である。序論で述べたように、本稿においては、マンガをメディア・文化として重層的に把握する。それを前提にして、本節では、読者によるマンガの受容、マンガが読者に与える影響、マ

¹¹ たとえば、伊藤（1999）が述べているように、テレビ視聴の個性化、視聴者の細分化・分極化、視聴者の能動的チャンネル選択・メディア選択は進展している。

ンガ読者の特性をめぐる、各論者の観点を整理しておこう（統計学に基づく「マンガ有害論」<福島；ショット>への反発はすでに序章において述べたため、次項から、その他の観点を概観する）。

1. 1980年代末～1990年代初頭：オタク論のピーク

前述したように、マンガやオタクの問題化がピークに至ったのは、1980年代末から、1990年代初頭にかけての数年間である。そのきっかけは、宮崎事件であった。事件の直後、数多くの学者や評論家は、さまざまな視点から、マスコミや民間団体の発言に反発しようとしている（たとえば、事件の同年12月に出版された『おたくの本』<『別冊宝島』104、1989年12月>）は、その一部の論説を集約したものである）。

当時の評論家の論説にはいくつかの共通点がある。第一に、オタクの性質、およびオタクの問題化を何らかの社会的文脈、たとえば、当時の経済的状況や、学校化、消費社会の発展、セクシュアリティやジェンダーなどに還元しようとしている（たとえば、上野千鶴子、1989；朝倉喬司、1989）。第二に、オタクという存在と宮崎事件との間に、共通点があると認める。第三に、幻想の世界と「現実」とは、どういう関係であるかについて詳細に論じていないが、オタクが、現実の世界と幻想の世界のどちらに生活しているか、あるいは二つの世界の隙間に存在しているのかといった問題が注目されている。第四に、多くの評論で用いられる「おたく（あるいはオタク）」ということばの意味は、当時認識されていたもの（すなわち、中森明夫の命名によって認識されてきた「おたく」という言葉）である。つまり、それまで、マニアとか熱狂的なファンとかネクラ族とか呼ばれていたマンガやアニメ、SF、コンピュータ、アイドル、鉄道などに没頭する若者の一群である（浅羽、1991）。

20年後の現在という時点に立って考えるならば、上述の観点には、少なくとも、三つの問題がある。第一に、社会的文脈は重要であるが、それを強調しすぎると、個人というレベルの諸要素が見逃される可能性がある。第二に、オタクが好んでいるものは、いったいオタクに対して、強い影響を持っているのか。もし幻想が存在しているなら、それはマンガ創作や、マンガを読むこととの間に、どういう関係があるのか。それらの疑問にたいして、明確な答えがない。第三に、オタクの定義は今日においてあいまいになってきたうえ、マンガと愛好者との関係性を考察する際、オタクという存在より、広義のマンガ愛好者、ないしマンガ読者に視線を広げる必要があるだろう。

2. 社会学的マンガ文化研究

社会学の領域において、マンガ文化・マンガ読者に関する研究の多くは、ある時代的流れ、文化的・社会的変容、およびマンガ界の主流（このような主流が実際に存在しているかどうかについては、また疑問を投ずる余地があるが）に当てはまると思われる現象をめぐって展開されている。

たとえば、1990年代初頭、宮台真司を代表とする何人かの社会学者は、マンガ文化をサブカルチャーとして捉え、質的調査とテキスト分析を行い、マンガというメディアに関するコミュニケーションや読者の受容様式について論じている（宮台・大塚・石原, 1993）。

『サブカルチャー神話解体』という著作において、宮台らは各時代におけるマンガと読者との関係について考察する際、「関係性モデル」という概念を導入している。「関係性モデル」とは、マンガにおいて提示されている「私」や「世界」についての理解の形式であり、そのような形式は読者に学習され、彼・彼女たちの自らの周囲を解釈するための図式、一種のモデルとなっている。

宮台らの論述において、マンガ研究におけるひとつの重要なポイントに光が当たる。すなわち、マンガ研究・評論を概観するならば、キャラクターに焦点をあてたものが多い。確かに、キャラクターはマンガの世界における重要な存在であるが、マンガの世界のなかに、「関係性」というものも存在している。それによって、マンガが読者に呈示しているのは、登場人物やストーリーそのもののみならず、自己と世界との関係性もある。

ただ、こういった関係性がどのように個々の読者に読み出されているか、また、作品や読者によって、読解や関係性についての理解の差異があるのか。このような疑問が残っている。当然、ひとつの時代において、共通性が見られる読解様式や「関係性モデル」の読み出しが存在しているかもしれないし、それを把握することは社会学的に重要な意味を持っている。しかし、それを前提にして、受容・読解を把握しようとするとき、いわゆる時代性から外れる作品（すなわち、学者がある時代に存在するマンガの主流とみなして取り出している作品群）を楽しんでいる個々人（すなわち、異なる人生を歩んできた人々）の受容・読解に関する何かを見逃す可能性はあるだろう。それによって、個人レベルでのマンガを読むことの特徴が研究の外に取り残されるだろう。

また、80年代から90年代にかけての論説の積み重ねを背景にして、オタク文化をポストモダンとして捉える説も登場してきた（東浩紀, 2001）。東はオタク文化の特徴を「動

物化するポストモダン¹²』として捉え、そこから、戦後日本社会の文化的・社会的変容を見通そうとしている。このような視座は、1990年代初頭の評論や宮台らの観点とは異なっているが、その角度、つまり、時代的な特徴からオタク文化・マンガ文化の変容や特徴を捉えることや、オタク・読者の行動からある時代の何かを発見しようとするスタンスは変わらないだろう。

3. 教育研究領域におけるマンガに関する研究

この領域において、マンガを学習教材として子どもの教育に役立てようとする方向性の研究が多く見られる(家島, 2007)。また、マンガ受容に関して、住田・藤井(1992)は、小学校4年生、6年生および中学校2年生を対象とした量的調査(合計回収票数: 1763票)のデータについて分析を行い、少年少女マンガの受容過程における受け手としての子どもの特性と反応について考察している。結果として、19の特性が挙げられている。そのうち、以下の2点は、「マンガの影響」について考える際に参考になると思われる。第一に、年齢段階別に選択されるマンガのタイプは、いわば空想型から現実型へと変化しているが、全体的傾向として年齢が上昇するほど選択されるマンガのタイプは多様化していく方向にある。第二に、少年少女マンガの「理解」は子どものマンガへの接触量により差異が見られ、接触量が多いと理解度が高く、接触量が少ないと理解度が低い。こうした傾向は、特にストーリーの理解に顕著に現れている。

このように、教育領域における一部のマンガ研究も、メディア受容の視点から、マンガ読者の特徴を把握しようとしているが、それらの研究の対象者は主に低年齢層に集中している。

これまで整理してきた論説は、マンガ読者研究に有益な指摘をしているが、そのなかには、個人レベルへの接近は少ない。

個々の読者に、「マンガ」という文化あるいはメディアは、どのように影響しているかという問題は、主に心理学の研究において、問題解決の手がかりがある。

¹² 東はコジューヴが主張している人間と動物との区別(すなわち、人間が欲望を持つということに対し動物が欲求しか持たないという指摘)を引用し、人間の生活の多くが欠乏-満足という回路に特徴づけられる欲求で駆動されることを、動物化であると説明している。彼は、今日のオタク文化に見られる二次創作や、社会における大きな物語の弱体化と高度消費社会の進展に伴う、「感情的な満足をもっとも効率よく達成してくれる萌え要素の方程式を求めろ」オタクたちの消費行動などを、「動物化するポストモダン」として捉えている。

4. 心理学におけるマンガに関する研究

「マンガ心理学」の成立を提唱している家島明彦（2007）は、心理学におけるマンガ研究の今後の方向性を呈示するため、マンガと心理をキーワードに検索して得られる論文（2007年当時）について概観している。その概観は本節のこれまでの整理した先行研究の一部と重なっているが、家島の有益な指摘を参考にするため、重なる部分を略せず、彼が整理している研究を概観しよう。

彼によれば、これまでの論考は三種類に分けることができる。

第一に、「マンガの影響」に関する論考がある。それらの論考において、①マンガの影響のうちネガティブな影響ばかりが偏って取り上げられていたこと、②影響の受け手として子どもにばかり焦点が当てられていたこと、③読書科学と関連して教育心理学的な立場からの論考が多かったことが特徴付けられている。

第二に、心理学的論考について、「日本におけるマンガの影響に関する論考は、臨床心理学の事例に関するものを除き、往々にして一般論化されたものが多く（筆者注：前述のオタク論やマンガ文化論もその例になる）、読者側の個別的な文脈といった視点あまり考慮されてこなかったと思われる」ことによって、読者側からマンガの影響を質的に捉えようとした研究手法（たとえば、大内，1954）は、今後の研究の参考に値すると、家島が主張している。

第三に、心理学論文に関しては、教育心理学領域と認知心理学領域、臨床心理学領域、社会心理学領域において、マンガ研究が行われている。たとえば、認知心理学領域において、倉田（2003）は、マンガを構成要素に分解し、マンガを「記号の集大成としてのマンガ」として捉え、複数人で同一マンガ作品の分解を行ったときに異なる結果が生じる現象について考察している。このような認知に関する研究は、心理学におけるマンガに関する研究の中で、中心的な位置を占めていると、家島が指摘している。

こういった概観に基づいて、家島は今後、心理学におけるマンガに関する研究の方向性を展望している。具体的には、マンガのポジティブな影響に焦点を当てた研究と、読者の自己形成と関連する研究、読者の側からマンガの影響を検討する研究、およびナラティブという視点の導入が期待されている。また、マンガに関する研究に向けて、研究の蓄積と、質の高い研究、および多学問領域の連携を求めている。

そのなかに、少なくとも三つの点が示唆されている。第一に、家島によれば、多くの先行報告は、マンガに登場する人物やマンガに描かれているストーリーが自己形成に影響を

及ぼしている可能性を示している（家島，2006b；齋藤，2003，等）。第二に、「自己」と「マンガ」をともにナラティブ構造を持つもの¹³としたら、マンガからの影響を受けたということは、個人の物語論的視座に影響を受けたということを意味しているだろう。第三に、マンガ研究における横断的な視座が望まれている。

こういった視点から、「個人」へ接近するひとつのスタンスが示唆されている。すなわち、「自己」という存在に着目し、より横断的な視座で、文化/メディアの影響を把握するというスタンスである。文化/メディアが個人に与える影響は、外部に存在する何かが自己に及ぼす影響ではない。それらは自己の内部に侵入して、自己形成の要素として存在し、または他の諸要素と関連していると考えられる。すなわち、自己は文化集団に所属し、メディアを利用していると同時に、文化/メディアも自己の一部となっている。また、文化/メディアの影響は一時的かつ不変なものではなく、それが時間と状況の変化によって生起・変化・退去していくものである。このような自己形成のプロセスや、諸要素とそれらの相互関係、時間的・状況的变化を把握するため、自己/文化/メディアを開放的かつ分散的（たとえば、自己において、文化とメディアが包含される。文化とメディアにおいて、自己も包含される。自己も文化も多様な要素によって形成されている分散的な存在である）に捉えるスタンスが必要である。

以上、メディア・オーディエンス研究の系譜と日本マンガ - 読者をめぐる研究・評論をおおざっぱに概観してきた。そこから、「マンガが読者の自己形成に与える影響」について考察する際の三つの方向性が見られる。第一に、自己と文化、メディアを閉鎖的なものとしてとらえるのではなく、それらを分散的な存在としてとらえる視座が要求されている。第二に、ある時代や、ある文化、ある種の人々（正しくいうと、ある「種」と呼ばれる人々）の全体像を描くのみならず、今後は個人的なレベルにも目を向けるべきであろう。第三に、個人レベルへの接近と社会問題についての読解を同時に捉える際、ひとつの領域に限らず、より学際的な視点が求められている。そうすると、個々人の人生における文化・メディアがどういう存在なのかという問いへの回答が浮上してくるだろう。

次章では、以上の三点に向けて、本論の理論枠組みを構成していく。

¹³ 家島（2007）によれば、現代における人気マンガの大半はストーリーマンガであるのだから、着目するポイントをマンガの「表現形式」から「物語（ナラティブ）」に変えてみると、マンガ研究の物語論的研究の可能性が見えてくる。また、物語論的視点から「自己」を認識しようとすれば、自己は他者に対して自己を物語ることによって産み出される。すなわち、物語論的な立場から考えるならば、「自己」と「マンガ」をともにナラティブ構造を持つものとして理解することができる。

第二章 分散的自己の物語的形成

序論と第一章では、「読者の自己形成におけるマンガの影響」という問題の提起や、この問題を把握するための「恋愛意識の構成」という着目点、そして今までのオーディエンス研究とマンガ研究のおおざっぱな流れ、すなわち本論の研究目的が成り立つため、または分析枠組みの構成のためのいくつかの重要な点について述べた。

ここまでの論述において、研究目的を解明するための一つの手掛かりが浮上している。すなわち、従来のオーディエンス研究やマンガ研究が持つ視座から一步はずして、既存の研究を豊かにしようとする立場に立ち、個々のマンガ読者のライフストーリーに接近し、自己と文化、メディアを閉鎖的なものとしてとらえるのではなく、それらを開放的かつ分散的存在として捉える視座が求められていることである。

自己について論じる際、従来の社会学的自己論は二つの認識を共通の前提としてきた。その二つの認識を命題の形で表現するならば、一つは「自己とは他者との関係である」というものであり、もう一つは「自己とは自分自身との関係である」というものである（浅野，2001）。浅野によれば、こういった関係論的アプローチは、現実のなかで、ある実践的な課題に関わって浮かび上がってくるような種類の困難に出会うことになる。その実践的な課題とは、「自分を変える」ということだ。まず、対他関係を変えようとする場合、人は、「自己を変えるためには関係を変えなければならないが、関係を変えるためには自己を変えなければならない、という奇妙な循環に陥ってしまう」（浅野，2001：147）ということになる。また、対自関係の変化について、浅野は次のように述べている。「そもそも対自関係を変えようとしているこの自分こそが、その対自関係によって生み出され、その上に立って働いているものなのだから、変ろうとしているこの自分がいるかぎり、古い対自関係がゼロになることはありえない」（浅野，2001：152）ということである。すなわち、従来の社会学的自己論に沿って考察するならば、自己変化を捉えることは、循環に陥り、結論に接近できない状態になりがちである。

従来の社会学的自己論に基づき、浅野（2001）は社会学的視座に、臨床心理学の知見を導入し、物語論的アプローチで自己変化を理解しようとし、新たな自己論、すなわち自己物語論を提案している。

前述のように、自己に注目する際、本論は、ある意識や行動を個人の人生の一連の出来事において捉え、または個人に与える文化/メディアの影響を日常生活という文脈で把握

することを求めている。さらに、絶えず変化している環境において、文化/メディアの影響はどう変化していくかという問題を究明したい。それによって、「マンガが読者の自己形成に与える影響」を考察するための理論枠組みを構築する際、本章においては、まず、自己の作り上げと自己変化に関して、新しい示唆を提示している浅野智彦の自己物語論を概観する。また、浅野の議論において詳述されていない、自己形成の内部および自己形成と文化/メディアとの関係性について考察するための手掛かりを提供している文化心理学の知見を導入する。最後は、その二つの理論から得る示唆に基づき、第三章の分析・考察に適用できる「分散的自己の物語的形成」という理論枠組みを構成し、「マンガが読者の自己形成に与える影響」に関する仮説を設定する。

第一節 自己物語論

浅野（2001）は、それまでの社会学的自己論・自我論の論説を整理し、そこに存在しているひとつの問題を発見している。彼は、従来の社会学的自己論の視点を、以下のよう
にまとめている。

これまで社会学は「自己」、「自我」や「私」という現象を他者との相互行為（社会関係）のなかで産み出されてくるものと考えてきた。すなわち「自己」「私」は、単独の孤立した状態で誕生するのではなく、他者とのさまざまなやりとりの中で初めて成り立つものと考えるのである。（中略）互いにやりとりを繰り返す中で他者が返してくる諸々の反応は「私」を映し出す鏡なのであり、これを手がかりにして人は自分が何者であるのか、何者であるべきなのか、また何者であることを望むかを知り、それにしたがって自分自身をコントロールすることを学ぶのだ、というわけである。（浅野,2001,25）

すなわち、このような「関係論的自己論」が指摘しているのは、他者・社会に向けて自己を語るという行為が、他者との相互行為のなかで「自己」を形成していくプロセスであるということである。この視点から考えるならば、自己は他者との関係のなかで生み出されているのだから、他者との関係性を変えるならば、自己も変わるということになるだろう。浅野はそれまでのいくつかの議論を並べて、「これらの議論はみな、多かれ少なかれ関係が変われば自己も変わる、だから自己とは変わりやすいものだ」という主旨の主張をしてきた」と指摘している。

しかし、実際、今日の高度消費社会に見られる多様なサイコセラピーの流行やさまざまな自己啓発マニュアルの流通といった状況から考えれば、自己を変えたいのに簡単に変わらないということを体験している人々は少なくないだろう。そういった現実には、従来の社会学的自己論の主張との間のズレが現れている。

このことを解決するため、浅野は、物語論的アプローチから自己へ接近しようとしている。彼は家族療法の物語論的展開の流れを整理し、「語り得ないもの」というところに物語の書き換えの可能性を求めている臨床療法から得る知見を、社会学的自己論に持ち込もうとしている。

以下は、浅野が提案している自己論を「自己物語論」と呼び、その視点における二つの重要な点について説明する。

1. 自己は自分自身について物語ることを通して産み出される

まず、自己に関して、常識的に、それは自らの多様な行為と体験が帰属させられるある中心のようなものとして考えられる。しかし、このようなまとまりや整合性が決して自然・必然に生まれてくるものではないと、浅野は主張している。自己物語と自己の形成について、浅野は以下のように述べている。

それ（筆者注：自己）は、一定の視角から行為や体験を取捨選択し、かつそれらを一定の筋に沿って配列していくことによってはじめて産み出されるものである。したがって、自己が「中心」であるのは、その人の持つ無数のエピソードが首尾よく選択、配列されている限りにおいてのことであるといえる。実際、自分自身が何者であるのかを説明しようとするなら、人は自分自身の人生のエピソードのあるものだけを選びだし（他のものを捨て）、それをある筋に沿って紡ぎ合わせていくほかあるまい。（浅野,2001,5）

すなわち、物語化の過程を通じて、自己というものが現れてくる。この過程において選択や配列が必要であるため、何かの要素（エピソードや行動など）への偏りや何らかの歪みがときに存在する。この現象について、バイアス（原作者注：すなわち選択・配列過程）そのものが自己そのものであると考えるべきであると、浅野は指摘している。

また、自己物語は、必ずしも明示的に語られたものだけには限定されていない。人間は日常において、常に無意識的に自己イメージを抱き、それに基づいて行動・思考している。

この自己イメージは、自分自身のなかで（または自分自身に向かって）、絶えずに自己物語をかたり続けていることによって維持されている。つまり、「自己とは、絶え間なく続く『心の中のおしゃべり』によって産み出され、支えられているのである」（浅野,2001,7）。

自己物語について考察する際、「物語」という言葉の意味を限定しなければならない。浅野は彼の論稿において明確な「定義」を提示していないが、三つの特徴を抽出することによって、「物語」の含意を示している。A) 物語は、視点を二重化させるような語りである。つまり、語り手の視点のみならず、語られた物語の登場人物が持つもうひとつの視点も、物語る行為を通じて創出されている。その場合、他者に向かって物語る自己が存在している世界と、物語られる世界という二つの世界は並存している。B) 物語は、諸出来事を時間軸に沿って構造化する語りである。しかし、二つの世界にある出来事の流れの構造は、同一なものではない。物語られた世界は、意味と方向性を持った時間的流れを産み出す。それに対し、自分自身についての物語は、その結末部分において今ここにある自分（浅野注:物語を語っている自分）に説得的なやり方で到達する必要がある。したがって、自己が自分自身について物語る際、必ず結末から逆算された形で選択・配列される。それは当然、語られたものがもつ時間的順序とは異なる構造であろう。C) 物語は、本質的に他者に向けられた語りである。浅野によれば、物語は「納得のいく」ものであり、そこに必ず他者の存在が含意されている。他者は、自己物語のさまざまな側面に浸透し、他者なくして自分についての語りに一貫性を与えることは難しくなる。上述の三点によって、「物語」という言葉が特徴付けられている。

さらに、自己物語は二重の正当性を獲得しなければならない。第一に、他者を納得させることによって、語られた自分のはじめて他者との間で共有された現実となり、自己は聞き手と同じ道徳共同体へ所属することになる。第二に、他者に対して、自己物語を語るための権力の正当化が必要である。その際、そういった正当化を提供できる制度的文脈において、人は自分自身について語り、自分自身を共有された現実を作り上げていく。

2. 「語り得なさ」と自己変化

浅野が主張している二つ目の点は、「自己物語は語り得ないものを前提にし、かつそれを隠蔽するものである」ということである。「語り得ない」ものは、自己物語のなかに現れてくるようなものであり、自己物語が達成しようとする一貫性や完結性を内側からつき崩してしまうようなものである。浅野によれば、「どれほど首尾一貫しているように見

える自己物語にも必ずこのような『語り得なさ』がはらまれており、これを隠蔽し、見えなくすることによってはじめて一貫した自己同一性が産み出される」（浅野,2001,15）。

「語り得ないもの」の存在こそは、前述した「自己の変わりやすさ/変わりにくさ」について考える際の手がかりとなっている。物語療法の知見を参照しながら、浅野は自己変化の要因を「語り得ないもの」に求めている。すなわち、自己物語論によれば、自己が自己物語によって産み出されるならば、自己物語を書き換えれば、自己そのものも変化してくるのである。そもそも、自己物語は完全に閉鎖・固定されている存在ではないため、自己物語の書き換えも可能である。その可能性を提供しているのは、自己物語がはらんでい「語り得ないもの」であり、したがって、自己物語を語り直し・書き直して、不確定・未決定なもの（＝語り得ないもの）をあらわにし、活性化させることによって、自己も変化していく。当然、このような語り得なさは通常よく隠蔽されているので、書き換えにくいこともある。つまり、自己変化のカギは、隠蔽の解除にはらまれていていると考えられる。

物語療法の「脱構築」というアプローチの言葉を借りれば、他者あるいは社会の好みに合わせるような形で語られる自己物語は「ドミナント・ストーリー」と呼ばれている。その存在によって、他者・社会の側にとって意味のある出来事や経験のほうに光が当てられ、本人にとって重要な出来事・経験がときに物語の外部に取り残される。この場合、自己物語と「生きられた経験」との間のズレは大きくなってしまい、本人は苦しみを体験することになる。苦痛を解除するため、既存の自己物語を書き換える必要がある。そこで、ドミナント・ストーリーの外部に取り残されたもの（＝語り得ないもの）は、自己物語の書き換えのカギとなっている。脱構築的アプローチは、このような部分に光を当てることでドミナント・ストーリーの一貫性や全体性、包括性に亀裂をいれ、そこを梃子にして物語の変化を引き起こすということを求めている。このような精神療法の知見は、浅野の論説によって一般化されている——「語り得ないもの」を梃子にし、自己物語を語り直し・書き直しすることによって、自己変化が起きるのである。また、そういった「語り得ないもの」の浮上が自己物語の現場に現れていると、浅野は指摘している。

最後に、浅野が彼の論稿に引用したペギー・ペン（1998）が報告している事例を紹介する。この物語療法の事例は、自己変化の特徴をよく表す事例だと思われる。

クライアントの夫婦は、愛し合っているにもかかわらず関係がうまくいかないと悩んでいる。そのことで、彼らはペンのところに訪れた。何度かの面接を通して、その夫婦は二人とも幼い頃に親から虐待されたことがあるとわかってきた。続いてペンは、その虐待体

験についての考えを率直に伝える手紙を親にあてて書いてみるようにアドバイスした(それは実際に投函する手紙ではない)。しかし、妻のほうは、その手紙を書こうと思う際、かつてレイプされた経験がよみがえってきたことによって、体が硬直し、手紙を書くことができなかった。ペンはそのことを聞いて、妻が抱いた自己否定の感覚(「レイプにあったのは自分が悪いのだ、自分に責任があるのだ」という感覚)がレイプされた経験を語り得ないものにしてしまうのではないかと推測した。次の面接に、ペンはそのことに関して、「もしレイプの場面にジョー(夫)がいたとしたら彼はどんなふうに相手(加害者)を退けてくれたらどうか」と尋ねた。その答えを書きとめ、何度も声に出して読み返すことによって、しだいに彼女の身体の硬直は緩和していった。(ペン,1998;浅野,2001)

このケースでは、語り得ないもの(=レイプされた経験)を発見して、手紙や想像的他者(夫や親)への対話(相手が実在する対話ではない)を通して、彼女の自己物語が書き換えられるということが見て取れる。

以上、浅野が論じている自己物語論の二つの要点、すなわち「自己を物語ることによって自己が産み出される」こと、および「自己物語は語り得ないものを前提にし、またそれを隠蔽するものである」ということについて概観してきた。

浅野の理論は、自己形成を物語論的に理解する視座と、自己変化を考察する手掛かりを提供しているが、自己形成を内側から捉える視座、および自己と文化/メディアを開放的かつ分散的に捉える視座を備えていない。自己物語の編成を人生の内部から考察し、または自己と文化との関係性を開放的かつ分散的に把握するため、もう一つの理論を導入する必要がある。

第二節 文化心理学的自己論

自己の意識、行動および生きている環境を考察するための科学としては、心理学がある。現代心理学は、人がいかなる環境にあるとき、いかなる意識をもち、いかに行動するかに関する条件発生的研究を通じ、具体的人間生活についての科学的理解を目指している領域である(甲村, 1990)。人間の「行為 - 関係過程」を対象とする社会学(見田宗介ほか, 1994)に対して、心理学は自己の内部における諸要素と諸関係を考察するための枠組みを提示している。

しかし、こういった枠組みにおいて、自己と文化を開放的に捉える際、困難がある。す

なわち、文化の問題を考える心理学者は従来、心理的プロセスそのものと文化的内容を二分する（筆者注：たとえば、比較文化心理学）ことが常だった（北山忍，1997）。北山によれば、このようなアプローチからすると、基礎的な心のプロセスは、人類に普遍的だが、その現れ方が文化にある刺激に応じて異なっていると考える。つまり、心性普遍性というものが認められている。しかし、こういったアプローチの妥当性は、多文化的事柄が多く見られる今日において疑われつつある。心的プロセスが多文化や多民族により異なるという可能性が見直される現在、文化心理学の学者たちは、自己と文化の二分法を考え直し、心性の普遍性に代わる新たな理論的枠組みの構成を求めている。

文化心理学的アプローチは、自己を作り上げるさまざまな心のプロセスを、人が社会的・集団的場に参加し、そこにかかわることより作り上げられていくものであるとして捉えようとする、北山が指摘している。その見方からすると、「心は、文化に生きることにより成り立ち、さらに、そのような心を持った人がその文化を生きることを可能にしている」（北山，1997，22）。それは、「文化と心とは、相互に取り込み合い、いわばお互いがチューニングしあい、相互に維持し、ある一定の均衡を保ちつつ、同時に、恒常的に矛盾、コンフリクトを内包し、このようにしてともに変容していく」ということを認めている。

このように、文化心理学の見方は、自己/文化の二分法を越え、文化環境における自己形成を究明する開放的視座を示している。しかし、北山たちが提唱している文化心理学の視座には、今日の文化状況に適用できない側面がある。北山の論説を借りるならば、文化心理学では、当該の文化そのものの民族誌的理解に根差した研究が求められている。すなわち、従来の文化心理学者は、「当該文化」、つまり、主にある文化の影響を受けている個人のかたまりとしてのある文化集団を研究対象としている。

多文化的状況が劇的に進展している現在、自己は、多様な文化を多様なかたちで取り込んでいるということが考えられる。マンガ読者の場合も、出身国の文化（たとえば、日本文化、中国文化）や、伝統文化、サブカルチャー（たとえば、マンガ文化）、ある年齢層の文化（たとえば、若者文化）、外国から伝来されている文化など、多様な文化が自己と関わっている。読者たちが利用しているメディアも、本、CD-ROM、テレビ、インターネット、携帯電話などを含んでいる。このような多文化やマルチメディアが発展している状況において、対応できる新たな理論が求められている。

ここでは、フバート J.M.ハーマンズの「対話的自己論」を導入したい。その視点は、

「自己に包含される文化」と「文化に包含される自己」を認める「分散的自己」という視座を提案し、自己と文化を開放的かつ分散的に捉え、自己内部の変動を究明しようとしている。自己/文化の二分法とある文化集団について研究する従来の文化心理学と異なり、ハーマンスは文化心理学が提唱している自己と文化についての非二分法的見方を、グローバリゼーションの進展がもたらす多文化状況に対する研究に持ち込んでいる。

第三節 フバート J.M.ハーマンスの「対話的自己論」¹⁴

物語 - 心理学および物語 - 精神療法といった領域の最先端に立つ研究者として、フバート J.M.ハーマンス (Hermans,1999,2001,2007) は今日におけるグローバリゼーションの劇的な進展に注目し、それを背景とした自己形成の新たな特徴を把握しようとするため、「文化に包含される自己」と「自己に包含される文化」を認める分散的な自己論/文化論を主張し、「対話的自己 (dialogical self)」という概念を提案している。

「対話的自己」を理解するため、ハーマンスのこういった自己論を啓発した、ウィリアム・ジェームズ (1890=1992) の自己論とミハイル・バフチン (1929=1995) の多声的小説論を見ておきたい。

ジェームズは、20 世紀の心理学的自己論の展開にとっての豊かな基礎を提供している (Hermans,2001)。彼は「I」と「Me」を区別し、それらのいずれも「自己」の一部であると述べている。ジェームズの自己論によれば、「I」は「認識する自己 (self-as-knower)」であり、それは連続性 (continuity)、特殊性 (distinctness)、決断力 (volition) によって特徴付けられている。それに対し、「Me」は「認識される自己 (self-as-known)」であり、それが、「自己」に所属していると経験的に判断される諸要素によって形成される。そして、「Me」と「Mine」との間には、次第に移り変わる過程が存在し、経験的な自己が、「彼の…/彼女の…」と呼ばれるすべてのものによって形成されていると、ジェームズは指摘している。つまり、「彼の手」や「彼の精神力」などのみならず、「彼の家」や、「彼の友人」、「彼の敵」までも「彼」の「自己」の一部になる。そういった「自己」に対する認識によって、「自己」という存在の範囲はそれまでの心身二元論によって認識されてきたものを越えて、「自己」の存在している環境までに拡張している。このように、ジェー

¹⁴ 「対話的自己論」は、臨床精神療法にも応用されている。それはハーマンスの理論において重要な部分であるが、本論の展開とは緊密なつながりを持たないため、ここでは、精神療法に関する論述の紹介を割愛する。精神療法に関しては、Hermans,1999 を参照されたい。

ムズは統一のかつ多様な自己に注目し、自己の内的社会性をも重視している。ハーマンスが述べているように、ジェームズのこういった自己論は、「対抗と対立、交渉が分散のかつ多声的自己の一部として存在している (Hermans,2001)」という理論展開の可能性を開いている。

ハーマンスの自己論に貢献しているもうひとつの理論は、バフチンの多声的小説論である。彼は、『ドストエフスキーの詩学』(Bakhtin, 1929=1995) という著作において、ドストエフスキーの小説の特徴について論じている。その論説によれば、ドストエフスキーは一種の新しい芸術的思想、つまり「多声的小説」と呼ばれるものを創出している。ドストエフスキーの小説を構成しているのは、対話的關係性に関わっている登場人物たちであり、それらの人物たちによって、独立のかつお互いに対立している数多くの観点が具象化されている。各人物の認識や行動は、各人の認知様式に従っていると感じられ、それらの人物と彼らの持つ観点が、作者の芸術的視点によって創作された受動的な存在であると思われぬ。すなわち、ひとつの作品において、多様な人物や人物の運命が、作者の個人的な知覚に組織されるひとつの受動的な世界に統合されるのではなく、そこには、複数の知覚や世界が存在している。バフチンは、このような小説の革新が多声音楽と同じ構造を持っていると述べ、多声的小説という概念を提示している。こういった「多声的」な構造において、いくつかの要素が見られる。すなわち、複数の声と、声間の相互関係(対立、対抗、交渉、妥協など)、発声する人物、人物間の立場の空間的差異、および人物間の対話的關係性である。これらの要素の組み合わせは、ハーマンスの「自己」図式の基礎となっている。

上述の二つの知見に啓発され、ハーマンスは、分散的自己と分散的文化という二つの概念に注目し、「対話的自己」という概念を提案している。ハーマンスによれば、自己と文化は数多くの多様な「ポジション」と関わり、それらのポジションの間に、対話的關係性が発展できるという。この観点から考えるならば、従来の本質主義的自己論や文化論とは異なり、「文化に包含される自己」や「自己に包含される文化」や分散的自己/文化などの概念に関連する研究の可能性が示されている。

以下は、「対話的自己論」におけるいくつかの重要な概念や特徴について説明する。

1. 自己空間 (Self Space)

ハーマンスによれば、自己は、相関的かつ自主的「自己ポジションズ (I-positions)」

の活発な多様性に基づいて定義されている。こういった分散的かつ多様な自己ポジションの特徴は、バフチンが提示している多声的小説における登場人物に類似している。すなわち、自己という空間において、複数のポジションが存在し、それらのポジションが、自らの空間的位置を持っている。また、ポジション間には、対話的關係性が存在している。

ここで「自己空間」と呼ばれるものは、実在の空間範囲ではなく、想像的な空間である。そして「自己 (I)」は、自己空間において、あるポジションから、ほかのポジションに移動する能力をもっている。通常、そのような移動は、状況や時間的な変化によって起きるという。たとえば、ある実在の対話や想像の対話において、「私」の「自己」は、「自分のポジション」と「相手 (実在の相手/想像の相手)」との間に動くことができる。このような想像的な対話が生じる場合、「自己」は、想像的に、各ポジションに「声」を付与する能力を持ち、それによって、ポジション間の対話的關係性が成り立っている。当然、対話はバーバル的なものだけではなく、ノン・バーバル的なかたちもある。

また、各ポジションは、ある位置を持っているが、それが不変な位置ではない。状況や時間的な変化に伴って、各ポジションの位置が変化したり、新しいポジションが生成したり、既存のポジションが退去・消滅したりすることも十分あり得る。こういった自己空間とポジションとの関係性は、図 1 で示されている。

ハーマンスは、図 1 を用いて、上述のような自己空間とそこにあるポジションを描き、多声的自己 (A-multivoiced-self) というモデルを提案している。

図 1 多声的自己におけるポジションズ (Hermans, 2001, 253, Figure 1)

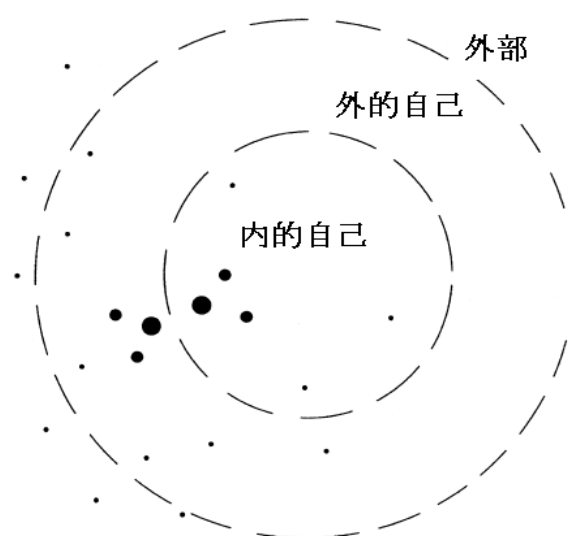


図 1 が示しているように、「自己」は、「内的自己」と「外的自己」によって構成されている。また、自己とその外部は、多様なポジションによって構成されている。内的自己とは、自分の一部と感じられる自己（たとえば、母親としての自己、学生としての自己、あるいは楽観主義者としての自己）である。それに対し、外的自己は、環境の一部と感じられる自己（たとえば、自分の子ども、自分の指導教員、あるいは自分の敵）である。内的自己も、外的自己も、ハーマンズの論説によれば、自己ポジションとみなされ、自己空間の一部として存在している。

図 1 に呈示される空間における二つの同心円は、浸透性を持つ。状況と時間の変化によって、外部のポジションは自己空間に入る可能性があり、外的自己におけるポジションは内的自己の空間に入る可能性も十分ある。また、諸ポジションは孤立的な存在ではなく、個体は、定位の活発な過程に関連し、その過程において、諸ポジションの協働や競争がある具体的な状況において発展するという。

大きな点が示しているのは、ある時点において、一部の内的ポジションと外的ポジションは、活発な対話的過程で相関していることである。たとえば、私はある友人と好きなマンガについて話すとき、彼女<=外的自己>のマンガという趣味に関連する諸ポジション/声と、マンガ愛好者としての私<=内的自己>という空間におけるマンガに関する諸ポジション/声との間には、対話的關係ができ、その対話的過程において、これらのポジションが活発化している。この際、ポジションの活発化している部分は、私の自己空間における、主な動きが発生している部分である。

小さい点が示しているのは、「自己」の一部として、到達可能なポジションである。その他のポジションは、自己空間から離れて存在し、状況や時間の変化が起こらないかぎり、「自己」が簡単に（意識的に）それらのポジションに気付くことができない。しかし、可能なポジションとして、そういうポジションは、ある時点に起こる状況や時間の変化によって、自己空間に入る可能性がある。その際、一連の外的ポジションと内的ポジションは、発展的自己の一部として導入される（たとえば、私は中学校に入って、ある教師の学生になる。その場合、「〇〇先生の学生」という内的ポジションが生成し、同時に、「〇〇先生」というポジションが外的ポジションとして、外部から私の自己空間に入る）。さらに、状況と時間の変化によって、あるポジションの退去、消失、および再侵入が可能であり、新しいポジションの生成も可能である。一言でいうと、図 1 における点は、変動的ポジションである。諸ポジションの変動とそれらの相互作用は、環境の変動によって生じる。

また、多くの場合、新しいポジションは既存のポジションの結合に基づいて生成されている。すなわち、劇的な変化が起こらないかぎり、つまり、ポジションの大規模の退去、侵入が発生していないかぎり、自己空間における諸ポジションの位置はある程度の一貫性をもっている。さらに、「自己」の到達ポジションの範囲（すなわち、「自己」が自己空間における諸ポジションの間に動く範囲）が一定のスペースに非厳密に限られている（詳細：「4 自己定義と対話の排除」）。それによって、ある人の通常の思考や行動には、ある程度の一貫性や連続性が見られる。

もうひとつの重要な点は、個々のポジションがバーバルあるいはノン・バーバルのかたちで対話して、賛否や対立、対抗、妥協、問答などの対話的關係性に関わり、自己空間におけるポジションの総体的な図式を構成しているということである。「自己」は、すなわちこのような空間に動いている。諸ポジションの対話の展開は、「自己」移動の重要な契機や依拠を提供し、または新しいポジションの生成や既存のポジションの退去をもたらすかもしれない。たとえば（以下は筆者が作成する事例）、ある男性はよく出張している会社員（＝内的ポジション）であり、彼には、15歳の息子がいる。これまで、半分以上の時間には、妻は一人で息子の面倒を見ている。しかし、今年、息子が高校生になることによって、勉強上も生活上も、父親としての自分が息子のことをもっとサポートしなければならないと、彼は思っている。また、妻の体が急に弱くなって、一人で息子の面倒を見ることは大変になる。今までのように仕事を続けるか、あるいは家族のために何か変化を求めるか、このような問題に直面して悩んでいるうち、彼の自己において、いくつかのポジションは活発化している。内的ポジションとして、少なくとも「よく出張する会社員としての自分」、「父親としての自分」、「夫としての自分」がある。外的ポジションとして、少なくとも「会社」、「妻」、「高校生になる息子」があり、また「いい父親だったら、子どもをちゃんと育て上げなければならない」、「いい会社員だったら、自分の仕事をちゃんと完成しなければならない」、「いい夫は、妻の辛さを分担しなければならない」といった集団的声（詳細：「3『集団的声』と『個人的声』」）を持つポジションもある。そこで、各ポジションが活発な対話的關係性に関わっている。たとえば、仕事関係に関わる各声は、家庭関係に関わる各声と対立して競争している。「夫としての自分」や「父親としての自分」は、「いい父親だったら、子どもをちゃんと育て上げなければならない」や「いい夫は、妻の辛さを分担しなければならない」といった声に賛成している。結局、彼は両親や妻、会社の先輩に相談して、出張の少ない職位に異動することになっている。すなわち、数多

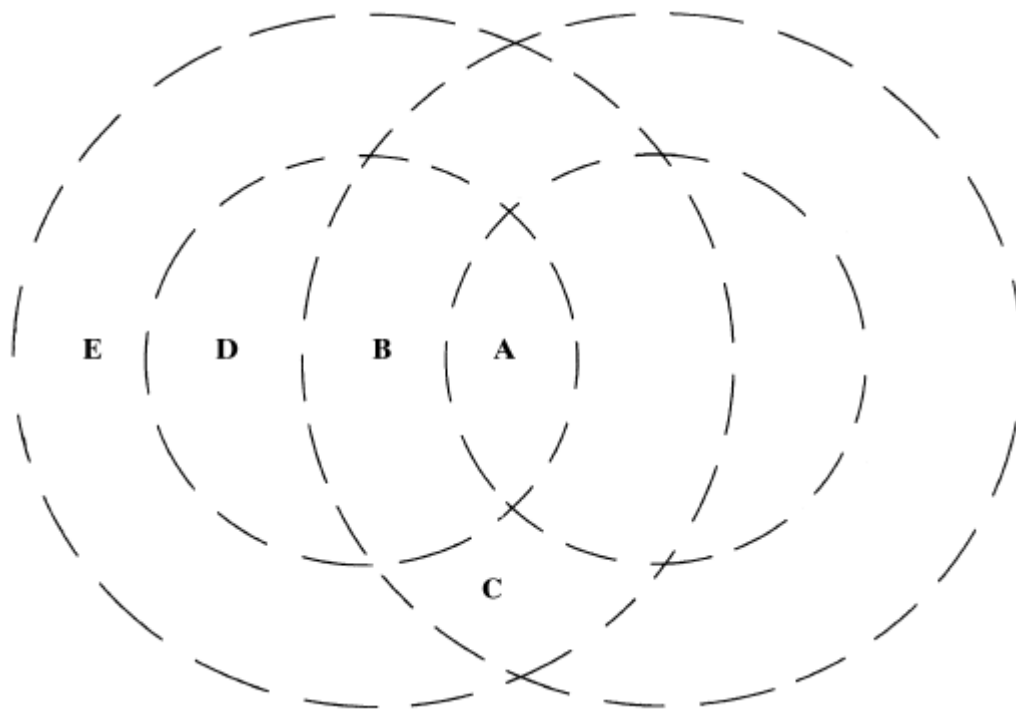
くのポジションが対話して、最後に、ひとつの結論が出され、意見の統合に至っている。言い換えれば、家族状況の変化によって、複数のポジションが活発化することになる。一連の対話的過程に従って、家族関係に関する諸ポジションが優位を占め、「よく出張する会社員としての自分」が自己空間から退去し、「いい父親やいい夫を目指している自分」と「あまり出張しない会社員」という複数の新しいポジションが生成されている。そして「自己」は、結論が出されるまえの過程において、ある具体的な時点や状況に起こる対話によって、数多くのポジションの間に動き、最後に、「よく出張している会社員としての自分」や「失格する父親」などのポジションが、「自己」の移動範囲から退去している（それらがいつか自己空間に再び侵入するかもしれないが、現時点では、「自己」の移動範囲から退去している）。このように、ポジションズの構成が、個々のポジションの作用より、自己における複数の過程（Processes）と関連しているという。

2. 誤解の生起

対話の生成に関しては、相互的-心理的過程と内的-心理的過程が同等に重要であり、その二つの心理的過程がある程度で緊密に関連していると、ハーマンスは述べている。ハーマンスが挙げている事例で説明してみよう。たとえば、私が同僚と議論する場合、議論するまえに、私は独自でその議論のいくつかの部分を練習する（当然、そういった想像的な議論において、同僚が参与しなければならない。すなわち、相手の反応を予期することが必要である）。それによって、私は、自分の観点を支持する新たな要素や論点を得ることができる。実際に同僚と会う際、私はよりよく議論することができる。そこで私が恵まれるのは、事前に予期（想像）した対話から得たものである。

このように、内的対話と外的対話はかなり入り混じっている。そこで、「想像」と「事実」を区別することが必要である。なぜなら、「想像的対話」はいつでも「実在的対話」と一致しているという保証がない。実際、二人がひとつの対話に関わる際、相互作用が起きる二つの自己空間の間には、共有している空間が限られ、共有できない空間が必ず存在している（図2）。それによって、「誤解」が生じやすい。とりわけ、ハーマンスによれば、文化的要素は、対話的誤解と強く関連している。多文化的状況において、対話的誤解が発生する可能性が一層高くなっているという。

図2 対話における実在的な二人 (Hermans, 2001 256, Figure 1)



A : 内的空間の相互共有 (例えば : 私は自分の一部を知り、それはあなたも知っている部分である。あなたはあなた自身の一部を知り、それは私も知っている部分である。そして、そういったことが、私たちに自明である。)

B : 内的空間の一方的共有 (例えば : 私は自分の一部を知り、それはあなたも知っている部分である。)

C : 外的空間の共有 (例えば : あなたと私は、同じ趣味を持つ)

D : 共有していない内的空間 (例えば : 私は自分の一部を知り、それはあなたの知らない部分である。)

E : 共有していない外的空間 (例えば : 私はこの世界のあることを知っているが、あなたはそれを知っていない。)

3. 「集団的声」と「個人的声」

図1に示される自己空間において、「個人」の声のみならず、「集団的声」(「社会的声」)も存在して、状況によって対話に関わることも可能である。前述の「よく出張していた父親」の事例を見れば、「いい父親だったら、子どもをちゃんと育て上げなければならない」や「いい会社員だったら、自分の仕事をちゃんと完成しなければならない」などの一般的な認識のようなものは、ハーマンスがいう「集団的声」に当たる。

集団的声の中心的性質は、それらの声が、対話的關係から生成する意味システムを組織/拘束しているという点にある。その場合、意味システムが、個人の社会的ポジションと

個体的ポジションとの間にある、緊張感が満ちる範囲において、構成されていると、ハーマンスは指摘している。

ここで注意しなければならないのは、このような「集団的声」も、自己空間にあるということである。すなわち、ハーマンスの自己論によれば、「集団的声」も「分散的自己」の一部である。

また、個人が所属している集団や社会の声がその人の自己空間に入れるように、個人が所属している文化/メディアの声も、自己空間に存在し得る。しかし、その場合、外的声がどこまで自己空間に入れるか、自己がその声をどのように読み取って受け入れるのかは、個体によって異なるだろう。言い換えれば、集団的声のみならず、外部から自己空間に入るポジションに、どのような声を付与するかということは、状況や、時間、個体としての歴史によって異なると考えられる。

4. 自己定義と対話の排除

これまでは、ハーマンスが提示している分散的かつ対話的自己の構造に関するいくつかの重要な点を整理してきた。当然、「分散」ということばを用いて「自己」を形容しても、「自己」は決してばらばらなポジションの総体ではない。

ハーマンス（1999）は、「意味構築としての自己物語（self-narrative as meaning construction）」という論文において、対話的自己という概念を、精神療法における物語分析法に導入している。その論文において、ハーマンスは「殺人犯を夢見る」という事例について、分析を行っている。ここでは、結論（詳しい論説：Hermans,1999,1206-1210）における自己形成に関する部分に注目したい（精神療法に関する部分を割愛する）。

まず、特定のポジション、とりわけ自己にとってうといポジションや恐ろしいポジションが自己空間に入るならば、それらのポジションが抑制されたり、自己定義（self definition）から切り離されたりする可能性がある。実際、明確な境界線（それが自衛的な機能を持つかもしれない）は、高度に集中しているあるポジションの周りに描かれている。それによって、ほかのポジションとの対話的相互関係が排除されている。逆に、よりうといポジションを多声的自己の一部であると認めることを通じて、「自己」が拡張されれば、「自己-非自己」の境界線の拡張も、より分散的な性質をもつ多声的自己を認める。

また、自己ポジションそのもの、および自己の位置づけ・再位置づけは、自己における統一性と多様性の共存を認めている。多様な声の一貫性（coherence）と統一性（unity）は、

自己によって示されている。自己は、分散的なポジションの間において、連続性を保持している。さらに、自己は、ポジションの間に移動し、特定のポジション間の対話を認めている。こういった自己による対話的動きがあるからこそ、健康な個体 (healthy individual 筆者注：健康な精神状態を保つ個人) の自己の断片化は排除される。

すなわち、自己の位置づけと動きは、自己定義と関わっている。自己定義のプロセスにおける自己の機能は、個体の一貫性や統一性を保持するため、(主に無意識なレベルで) 対話的關係を管理することにある。特定のポジション間の対話を認可、あるいは排除することによって、分散的ポジションで構築されている自己空間の統一性を維持している。もし、こういった統一性が部分的あるいは完全に潰れるならば、個体の精神状態が混乱のないし不健康な状態になる可能性が十分あるだろう。

5. 不確実性 (Uncertainty) の生起

前述のように、ハーマンスが「対話的自己」という概念を提起する背景には、グローバリゼーションの発展がもたらす多文化的状況の一般化がある。また、「意味メカニズム」としてのメディアは、新たな意味システムの構成を可能にするのみならず、世界中の意味システムの分化をも促している。それによって、文化の複雑化がいつそう加速されている。

こういった多文化的状況の背景にあるグローバリゼーションの加速と技術の進展によって、多くの不確実性の生起が起きている。ハーマンス (2001) は、グローバリゼーションの加速と技術の進展に巻き込まれる人間の特徴が三つあると指摘している。第一に、大量な集団や文化に所属していることによって、自己は、高密度をもつポジションズによって形成されている。第二に、それらのポジションは比較的異質なものである。第三に、そういう状況において、自己は、前例のない大きな“ポジション・リープス (position leaps)¹⁵” をしなければならないという。

このようなポジションの密度と異質性の増加、およびより大きい“ポジション・リープス”をする可能性の増大が、不確実性という経験の原因のひとつとなっていると、ハーマンスは指摘している。

不確実性について、ハーマンスは、それを今後の課題として論じている。彼によれば、不確実性に関して、まだいくつかの問題が残っている。たとえば、どんな状況において、人は不確実性を感じるか。そして彼・彼女たちはどのように対応しているか。これらの問

¹⁵ ポジション・リープスとは、離れたポジションズの間を移動することである。

題について、ハーマンスは明確に答えていないが、ひとつの研究の方向性が提示されている。すなわち、不確実性は本来、文化の中心にあるわけではなく、文化の周辺、文化間の接触区域（contact zones）にあるのである。

これまでは、ハーマンスが提案している「対話的自己」に関する諸概念、諸特徴について説明してきた。彼によれば、このような対話的關係は、個人が誕生したときから始まったという。そして、個々人が生活している現代社会におけるグローバリゼーションの加速や、技術、メディアの発展に従って、多文化の状況や自己における意味システムの形成は、一層複雑になっている。こういった状況にあるからこそ、自己や文化、メディアを開放的かつ分散的に把握する必要があるのではないだろうか。

ハーマンスはわれわれに、このような視座を提供しているが、そこに、また展開の不十分な部分や未解決な問題が残っている。まず、個人は「自己」について物語るとき（すなわち、自己定義を行うとき）、どのような基準でポジションを支持/抑制しているか、どのような基準で対話を認可/排除しているかという問題がある。第二に、どの程度、どのような状況や時間の変化が、ポジションの劇的動きをもたらすか。自己は、自己空間における劇的变化にどう対応するか。第三に、新しいポジションの侵入・生成が起きる場合、自己は、それに対して、どのように声を付与するか。第四に、どのような状況において、不確実性が生起するか。そして個々人は不確実性にどう対応するか。ハーマンスの理論には、少なくとも、この四つの疑問を投ずることができる。これらの疑問を解決するため、新たな理論枠組みの構成が求められている。

次節は、自己物語論と対話的自己論の接点（二つの理論の共通点）に基づき、二つの理論の知見を部分的に組み合わせ、お互いの視点を補充し、新たな理論を抽出することを試みる。

第四節 分散的自己の物語的形成——理論枠組みの構成へ

本節では、「分散的自己」という視座を提供する対話的自己論の図式を、社会学的自己論のひとつの視点、すなわち自己物語論に導入する。その目的は、二つある。第一に、対話的自己論の図式における未解決の問題を自己物語論の示唆で解決しようとする。第二に、現在の自己物語論よりミクロの視点で、自己そのものの構造やそこにおける自己物語の編成を捉えることである。この新たな視点を、「分散的自己の物語的形成」と呼びたい。

1. 新しい視点構成の可能性と必要性

視点を構成するまえに、まずは二つの理論を組み合わせる可能性と必要性を検討しよう。

1) 前述のように、文化心理学的アプローチと社会学的自己論という視座の間には、自己に対する共有な認識がある。文化心理学的アプローチは、文化的自己観、すなわち、ある文化において歴史的に形成され、社会的に共有され自己、あるいは人一般についてのモデル、通念、あるいは、前提に焦点を当てている。その文化的自己観は、社会的表象であり、個人的・認知的表象である必要はない（北山，1997）。その点は浅野が提案している社会学的自己物語論とは、共通な前提がある。つまり、社会学的視座からすると、自己とは、社会的な存在として捉えられ、他者に共有されるものである。そのような自己観も、個人的・認知的表象より、社会的表象に関心を持っているということである。

2) 二つの理論を同時に導入する際、理論間の接点が要求されている。対話的自己論と自己物語論の間に、少なくとも、以下の二つの接点がある。

まず、両者の「自己」に対する基本的な認識の底には、共通する部分がある。ハーマンスによれば、自己は、相関的かつ自主的ポジションズの活発な多様性に基づいて定義されている。それらのポジションは、特定の状況・時点では、対話的關係性に関わることがある。一方、浅野によれば、自己は、自分自身について物語ることを通して生み出されるという。簡単にいうと、対話的自己論も、自己物語論も、語的關係性を通じて、自己が形成されているということを認めている。さらに、浅野は、自己物語がいつでも「語り得ないもの」を前提し、かつそれを隠蔽していると指摘している。すなわち、物語の一貫性と連続性（それが自己の一貫性と連続性でもある）を保持するため、無意識的にいくつかの事物や出来事を、物語から排除している。それに関して、ハーマンスは、一貫性と統一性を

維持するため、自己が対話の排除を行うということについて論じている。つまり、自己物語論が主張している二つの要点（物語による自己形成と「語り得ないもの」の存在）に関しては、対話的自己論がある程度類似している視点を持っている。

また、対話と物語という二つの概念には、共通している部分がある。対話と物語のいずれの前提にも、語的关系性があり、語り手と聞き手（それが実在の相手であるかどうかは不問）が必要である。たとえば、ハーマンス（1999）はサービン（1986）の観点を引用して、ストーリー（物語）の定義について述べている。サービンによれば、ストーリーあるいは物語とは、エピソードや、行動、一連の行動を時間的かつ空間的に組織する方法である。それに加えて、「ストーリーが成立すると、語り手と聞き手の存在が仮定できる。語り手と聞き手との相互作用によって、物語ることがひとつの高度にダイナミックな相互現象となっている。言い換えれば、物語ることが高度な対話的過程になされている」と、ハーマンスは述べている。

ハーマンスの論説から、二つのことを推知することができる。A) 物語が生じる際、語り手と聞き手の間に、対話的關係が存在しないとはいえない。むしろ、他者に向けて物語ることの前提には、対話的關係性がある。B) 物語を創出する際、語り手の自己空間において、語り手の内的ポジションが想像的な相手（=外的ポジション）と対話しながら、相手の反応や考え方を推測して、相手の納得できる物語、または連続性をもつ物語を作り出している。そうすると、対話と物語はそもそも両立できない存在ではない¹⁶。さらに、対話は物語の形成・変化段階においては、不可欠なものだといえるだろう。物語が形成・変化する際、「自己」は、諸ポジション間に移動し、対話を認可・排除することによって、一貫性・統一性を持つ自己を維持し、自己と他者が納得できる一貫性・統一性をもつ自己定義を創出している。すなわち、諸ポジションの対話的關係性と自己の統一性によって、一貫性・統一性をもつ物語が作り出されている。

対話と物語という二つの概念は、論者によってその含意が異なるかもしれない。それによって、これからの論をうまく展開するため、本文に用いたい対話と物語の特徴づけをあらかじめ提示する。対話の特徴に関しては、浅野が物語療法の会話的アプローチの知見からまとめているものを借りたい。すなわち、対話は会話と同じく、二つの側面を持っていると考えられる。一方で、対話とは言葉を用いて意味を産み出すことである。他方で、対

¹⁶ ハーマンス自身も、精神療法の物語分析に、対話的自己という概念を導入している。

話とは他者との相互行為である。また、物語という言葉は、三つの点によって特徴づけられている。つまり「視点の二重化」、「出来事の時間的構造化」および「他者への志向」である（浅野,2001）。

3) 両理論の弁証

まず、対話的自己論の導入によって、現在の自己物語論よりミクロの視点で、自己そのものの構造やそこにおける自己物語の編成を捉えることができる。

一方、個人のライフストーリーを分析する際、自己の内部と外部状況の関係性を考察するならば、質的調査の場で編成される、ナラティブ的（物語的）な性質を持つライフストーリーを理解する物語的なスタンスが必要である。自己物語論こそ、こういった物語的視座を備えている。

さらに、自己物語論の示唆は、対話的自己論の図式における未解決の問題を解決する手がかりを提供している。

対話的自己論の図式における未解決の問題は、①自己がどのような基準で対話を認可/排除しているのか。②どのような状況や時間の変化が、どの程度、ポジションの劇的動きをもたらすか。③新しいポジションの侵入・生成が起きる場合、自己はそれに対してどのように声を付与するか。④どのような状況において不確実性が生起するか。それに対して個々人はどう対応するか。

本研究は、物語論の「語り得なさ」と自己変化の理論を対話的自己論に導入し、この新しい視点から質的調査のデータを考察し（第三章）、上述の問題を究明したい。データの分析は次章に譲るが、ここでは自己物語論から得る問題解決の示唆を説明する。

①に関しては、浅野によれば、どれほど首尾一貫しているように見える自己物語にも必ず「語り得なさ」がはらまれており、これを隠蔽することによってはじめて一貫した自己同一性が産み出される。すなわち、自己を語る際、個人はできる限り「語り得なさ」を隠蔽しなければならない。そうしないと、自己物語が達成しようとする一貫性や完結性は内側からつき崩されてしまう。したがって、自己物語の編成において、編成要素の抑制/排除が必ず伴っている。すなわち、自己がそのように自己内部の諸要素を管理することを理解する際、「語り得なさ」という概念は重要な手掛かりとなる。

②と④に関しては、自己変化の理論を用いてこれらの問題を理解したい。すなわち、ある状況や時間の変化によって、「語り得ないもの」に光が当たるならば、一貫した自己同一性が脅かされることになる。その場合、個人の精神的状態において、不確実性が起こり、

不確実性の緩和が求められる。その際、「語り得ないもの」の浮上を梃子にして、自己物語が再編成されれば、不確実性の緩和が可能になる。不確実性の生起といい、自己物語の再編成といい、それらに伴って、自己空間における対話的關係性が変動し、ポジション/声の劇的動き（たとえば、多くのポジションの侵入・退去・移動など）が起こる。また、一貫した自己同一性が脅かされる範囲が大きいほど¹⁷、ポジションの変動が激しくなるだろう。

③に関しては、自己物語は不変的なものではないが、多くの場合、その一貫性と完結性が維持されている。新しいポジションが自己の一貫性を脅かさない場合、声の付与は既存の一貫した自己物語に基づいて行われる。もし、自己の一貫性を脅かす声（たとえば、自己の趣味を否定する集団的声）が自己空間に入れば、状況が許す限り、自己はその声の対話的關係への参加を抑制・排除する。

以上、二つの理論を組み合わせる可能性、および「文化/メディアが自己に与える影響」を考察する際、二つの理論を導入して新たな視点を構成する必要性を検討してきた。これからは、二つの理論およびその接点に基づき、「分散的自己の物語的形成」という視点を説明する。

¹⁷ たとえば、個人は時に状況の変化によって、ある物語<たとえば、趣味に関する自己物語>の編成を行うが、ある状況において、自己の趣味に関する自己物語、恋愛に関する自己物語、家族に関する自己物語、成長に関する自己物語がすべて「語り得ないもの」の浮上によって脅かされる際、自己は広範囲の自己物語再編成を行う可能性がある。

まず、「自己」という言葉について説明する必要がある。

自己は、自己を物語る¹⁸ことによって産み出されている。こういった「自己」の概念は、ハーマンスが指摘している、自己空間において諸ポジション間に移動し、諸ポジションに声を付与している「自己」と同一概念として理解したい。

また、本文においては、自己形成のプロセスを自己物語の編成のプロセスとして認識している。

こういった「自己」と「自己形成」に対する認識を前提にし、「対話による自己物語の編成」という視点が形成され、自己形成に関する五つの仮説が設定されている。

2. 対話による自己物語の編成

この視点では、ハーマンスが提案している「自己空間」の図式を導入する（第二章・第一節、図1参照）。すなわち、自己とは、一定の想像的空間として認識されている。そこには、内的自己のみならず、外的自己も自己の一部として存在している。そういった空間において、分散的な複数のポジション（I-positions）が存在している。また、自己（それは自己物語によって産み出されるものであり、対話的自己論における統一性を持つ自己でもある）は、諸ポジションに声を付与することができる。それによって、諸ポジション間には、対話的關係性が生じ得る。

当然、自己は、分散的諸ポジションの一貫性・統一性を維持するため、諸ポジション間の対話的關係性を認可、あるいは排除する能力を持っている。それによって、対話は、一定の一貫的かつ統一的な範囲で生成して組み合わせられていく。それによって、自己において、（変化を引き起こす事態が起こらないかぎり）一貫性と連続性を持つ、ひとりの自分自身に関する物語が編成され、語り続けられている。

自己空間において、自己物語を語り続けることによって、自己イメージが維持され、そ

¹⁸ 自己物語というものは、「対他」と「対自」という二つの性質を同時に持っている（浅野が指摘しているように、「自己とは他者との関係である」および「自己とは自分自身との関係である」という二つの認識は、社会学的自己論における共通な認識である）。浅野によれば、対他関係は物語を通して自己を産み出し、また対自関係はパラドックスであり、自己物語はそれを前提にすると同時に隠蔽するという。対自関係のパラドックスというのは、対自関係と自己とは同時にお互いの成立要件となっているという状態である。それによって、自己物語は、それ自身についての判断を含んでしまうゆえに、物語の信頼性が宙吊りにされてしまうことが起こる。結局、他者がその自己物語を受けてくれて、それに信頼性を付与することによって、対自関係のパラドックスが隠蔽されている。これからの論述において、自己が持つ「対自」と「対他」という二つの性質に、考察の重点を置かないが、自己にあるこういったパラドックスを前提として認めるということをおきたい。

して人々は日常の行為のなかで無意識のうちに一定の自己イメージを抱き、それを前提にして振舞い方を選択することができる。

また、他者あるいは社会（それらは自己空間の外的自己とは部分的に重なっているが）に対し、バーバルあるいはノン・バーバルのかたちで、人が自己物語を語ることによって、自己は産み出される。さらに、一貫的かつ連続的な自己物語を対他的に語る際、「私」は他者から自己物語の信頼性を得、自己という存在の正当性を獲得している。

さらに、この視点には、以下の8点を強調したい。

- 1) 自己は自己空間において、移動することができる。想像的対話が発生する場合、自己は諸ポジション間に移動し、それらのポジションに声を付与する能力を持つ。それによって、諸ポジション間の対話的關係性が成立しうる。
- 2) ポジションは不変な存在ではない。環境の変化によって、ポジションの生成、侵入、移動、退去、消滅、および再侵入は可能である。
- 3) 対話の様式に関しては、実在的対話と想像的対話、バーバル的対話とノン・バーバル的対話のいずれも、対話として認められている。
- 4) 自己空間において、内的自己と外的自己が存在するにしたがって、通常、自己に属するもの（たとえば、身体や財産など）のみならず、自己と関わる他者や社会の諸要素も自己の一部になっている。この視点から考えるならば、他者、メディア、および文化も自己の一部として、または自己物語編成の可能素材として、自己空間に存在している。
- 5) 集团的ポジション・社会的ポジションが自己空間に包含されていることによって、社会的声・集团的声は対話的自己の一部としてみなされて、(自己が認可される範囲で) 自己物語の編成に参加している。
- 6) 二つの自己空間の間では、共有できない空間が必ず存在しているゆえ、「想像的対話」が「実在的対話」と一致している保証はない。その場合、「誤解」を招く。
- 7) 自己は分散的自己の統一性と一貫性を維持する能力を持つことによって、通常、自己の一貫性と統一性を破壊するポジションと、自己物語を編成する、自己定義の中心的な位置にしめるポジションとの対話の可能性は排除されている。その場合、「危険性」をもつポジションは、意識されないままに、「語り得ないもの」として存在している。
- 8) 自己物語の内側には、「語り得ないもの」が存在している。分散的自己論的に言えば、それは自己空間に既存するポジションであるが、自己が統一性と一貫性を維持するた

め、そのポジションは対話的關係性から排除され自己物語の編成から排除されているものである。「語り得ないもの」は通常物語ることによって隠蔽されているが、時に物語る場において、それに光が当たることもある。

以上は、新視点の形成というかたちで、対話的自己論と自己物語論をひとつの理論に統合することを試みてきた。このような視点は、「分散的自己」という視座、および個人のナラティブに接近するというスタンスを備えている。

こういった理論的視点に基づき、既存の理論枠組み（対話的自己論と自己物語論）に残されている問題を解決するため、またはマンガ読者の恋愛に関する自己形成を捉えるため、「個人の自己形成における連続性と変化」をめぐるいくつかの仮説を立てる。

3. 「個人の自己形成における連続性と変化」に関する仮説

上述の理論から、諸ポジションの変動とポジション間の相互作用は、状況の変化によって起こるといえることがわかる。さらに、状況の劇的変化によって、自己空間における激しい変動が引き起こされる。では、状況のどのような変化が、自己空間における対話や、対話によって編成・維持される自己物語の変化を引き起こすか。この問いに関しては、自己における「連続性の維持」と「変化」という二つの状況に分けて、仮説を立てる。

1) 「連続性の維持」に関する仮説

多くの場合、新しいポジションは既存のポジションの結合に基づいて生成されていると、ハーマンスは述べている。また、声の付与と対話の認可・排除は、自己の一貫性と統一性に関連していると考えられる。それらの論説に基づいて、以下の二つの点に分かる。

まず、自己は、現時点まで編成・維持されてきた、一貫性と連続性をもつ自己物語に基づいて、対話的關係性に関与するポジションに声を付与し、または自己物語が断片化されないように、自己空間に起こる対話的諸関係を管理する。

また、ひとつの認識・知識の領域（たとえば、政治、制度、教育、楽観主義、恋愛、等）に関するポジションが自己空間に入る場合、そのポジションが自己の一貫性と統一性を脅かさないうえ、それを対話的關係性に関わらせ、ないし自己物語編成に参与させることが十分可能である。ここで、次のように、仮説を提示することができる。

仮説 1：外部から自己空間に侵入する情報についての理解（一般的に多くの人々に共有されている理解）を支える既存のポジション/声（情報・知識・認識など）が存在してい

ないかぎり、そのポジションに付与される声は、「一般的な理解」から外れる可能性が高い。

2) 「自己変化」に関する仮説

自己の変化が起こる事態を捉えるため、「語り得ないもの」と「状況の変化」に焦点を当て、以下の仮説を立てる。

仮説 2 : a)ある状況の変化による新しい対話の発生によって、b)「語り得ないもの」に光が当たる。

仮説 3 : 「語り得ないもの」に光が当たる際、c)不確実性が起きる¹⁹。

また、「語り得ないもの」に光が当たることによって、自己物語が書き直される過程には、少なくとも、ひとつの要件（それが自己変化の正当性を保証することでもある）が要求されている。すなわち：

仮説 4 : d)状況が自己物語の再編成を保証してくれる際、e)自己物語は、「語り得ないもの」の浮上を梃子にして、再編成されていく。それに伴って、f)不確実性が緩和される。

d)に関しては、全く新しい環境（すなわち、自己物語を受けてくれてきた他者がほとんどいない環境）に移住すること、あるいは精神療法を受けること（すなわち、自発的に自己を変えようとする）は、その典型的な例になる。

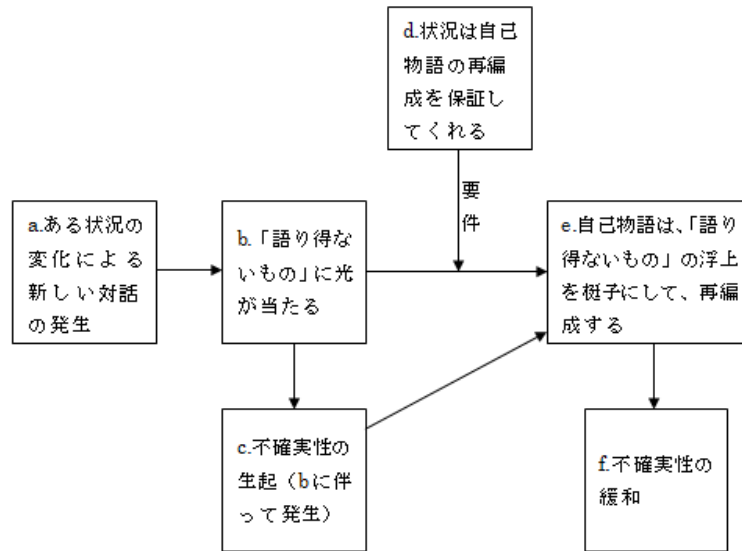
仮説 5 : 最後に、一口に自己物語の編成といっても、それは既存の自己物語を全部消滅させ、完全な新しいものを編成するわけではない。あくまで、それは、自己物語の一部²⁰（たとえば、マンガに関する部分、あるいは恋愛に関する部分<以下は、「自己恋愛物語」と記す>）を書き直すことにすぎない。

図 3 は、上述のような自己変化に関する仮説間の連関を示している。

¹⁹ たとえば、前掲の精神療法の事例に見られる“身体の硬直”、あるいは、新しい文化環境に移動するときの精神的混乱。後者の事例として、外国に移住している人々の事例だけではなく、あるサブカルチャーに所属している人が、そのサブカルチャーに対して否定的な感情が表れている環境に移動する際に感じられる精神的混乱もその事例になる。

²⁰ 浅野の自己物語論によれば、自己物語には、複数の物語が存在している（浅野，2001，14）。

図3 自己変化に関する仮説間の連関



自己変化に関する仮説(仮説2、仮説3、仮説4)間の連関が上図で示されている。すなわち、aはbの前提になり、cはbに伴って引き起こされる。bの生起によってeが起こるという過程において、dという条件が必要となるのである。また、cによって、eが求められている。eの完成によって、fが達成される。

次章では、マンガが読者の恋愛に関する自己形成に与える影響を明らかにするため、質的調査のデータ分析をする際、「分散的自己の物語的形成」という視点を導入する。また、分析と考察をふまえ、仮説の検証を行う。

第三章 マンガと恋愛に関わるライフストーリーに関する質的調査

第一節 調査概要

マンガ読者の個々人の人生に接近し、それらの「自己」に、マンガという文化・メディアがどのように恋愛に関わる自己形成（物語論的に言えば、それは自己物語の編成でもある）に影響しているかを把握するため、2010年12月から2011年10月まで、半構造的聞き取り調査を行った。質問項目は主に対象者のマンガ利用史と恋愛史を中心にして設定されている。

調査データを豊富にするため、調査は日本のみならず、中国においても行った。海外マンガ文化の状況を研究することは、マンガ文化研究全体にとって示唆に富むものである（たとえば、イー・ヒョンソク、2004）。他国の事例をも考察し、日本人以外の読者たちの特徴を明らかにすることは、日本文化論的な意味をもつうえ、マンガという文化・メディアそのものについて客観的に捉える契機を与えるものである。

調査は雪玉式サンプリング法を用いて、35人の対象者（対象者一覧：表1・表2）に対して聞き取り調査を行ってきた。内訳は、日本人11名、中国人24名である。日本人の場合、男性2名、女性9名である。青森県在住者10名、群馬県在住者1名であり、20代7名、30代3名、50代1名である。全員マンガ愛読者である。中国人の場合、男性7名、女性14名である。四川省在住者14名、広東省在住者6名、福建省在住者1名、遼寧省在住者2名、湖北省在住者1名であり、20代20名、30代2名、50代2名である。その中には、動漫²¹を好んでいる/好んでいた対象者が18名である。動漫を愛好している人たちの特徴を客観的に把握するため、動漫を愛好していない6人をも対象者にしていく。ただ、35人のなかで、マンガとアニメに完全に接触していない対象者はいない。

また、マンガの利用状況を考えるならば、マンガとアニメ、ゲームに関わる要素がかなり混在していることによって、読者のマンガ利用史から、アニメとゲームに関わる要素をむりやり排除することをしない。分析においては、アニメとゲームに関わる要素が含まれている場合、それらをできるかぎり明記する。

²¹ 動漫：中国（大陸）の場合、現代漫画が輸入されたのは、1990年代初期であった。日本マンガの影響を受けて、中国内で現代漫画を創作するマンガ家は、2000年代に入って脚光を浴びるようになった。現在、日本マンガの輸入とローカル作家の創作は政府の支援によって進行している。こうして発展してきた産業は、中国における「動漫産業」である。すなわち、中国において、マンガとアニメを分けて考えるより、マンガ（漫画）とアニメ（動画）を合わせて「動漫」と名づけている。中国人の日本マンガ愛読者は、同時に日本アニメを愛好する人が多い。マンガを好んでいる人たちは、自分たちのことを「マンガ愛好者」より、「動漫愛好者」と認識している人が少なくない。

表1 日本人対象者一覧表*

対象者	年齢	性別	出身地	現住地	職業	婚姻状況	恋愛経験 (付き合 う経験)	日本マン ガ愛読者 であるか	マンガへ の没入度 **
A	21	女	青森県	弘前市	学生	未婚	恋愛中	○	高
B	32	女	青森県	弘前市	マンガ家	未婚	恋愛中	○	高
C	24	女	青森県	青森市	学生	未婚	恋愛中	○	中
D	22	女	青森県	弘前市	学生	未婚	経験ない	○	中
E	25	女	秋田県	弘前市	営業	未婚	経験ない	○	高
F	32	男	青森県	おいらせ町	公務員	既婚	—	○	高
G	23	女	秋田県	弘前市	学生	未婚	経験ない	○	中
H	30	女	群馬県	弘前市	サービス業	既婚	—	○	中
I	55	女	群馬県	高崎市	主婦	既婚	—	○	低
J	29	女	東京都	弘前市	サービス業	未婚	経験ある	○	中
K	24	男	青森県	藤崎町	学生	未婚	恋愛中	○	中

* 本一覧表は、対象者氏名のアルファベット順によって制作される。

**没入度の分類基準（以下同じ）：

低：対象者はマンガを愛読しているが、対象者にとって、マンガを読むことは単純な娯楽である。

中：マンガは対象者の重要な愛好になっているが、それが唯一の愛好あるいは一番重要な愛好ではない。

高：マンガは対象者にとって、人生の重要な一部になる。対象者はマンガのためにかかる精神力や時間が多い。対象者は、マンガとマンガ文化について、ある程度の研究をしている、あるいは自分から発信している。ほかの対象者より、マンガ事情を詳しく知っている。

表2 中国人対象者一覧表*

対象者	年齢	性別	現住地	職業	婚姻状況	恋愛経験	日本語能力**	日本動漫愛好者であるか	動漫への没入度
A'	23	女	遼寧省	学生	未婚	恋愛中	中級	○	低
B'	22	男	四川省	学生	未婚	経験ない	高級	○	高
C'	27	男	広東省	出版	未婚	恋愛中	高級	○	中
D'	51	男	四川省	建築	既婚	—	—	×	—
E'	28	女	四川省	司法	未婚	経験ない	—	○	低
F'	29	男	四川省	建築	既婚	—	—	×	—
G'	27	男	広東省	出版	未婚	経験ない	高級	○	中
H'	25	女	四川省	学生	未婚	経験ない	初級	○	低
I'	34	女	広東省	出版	未婚	恋愛中	高級	○	高
J'	29	女	四川省	司法	既婚	—	—	○	低
K'	23	女	四川省	学生	未婚	経験ない	高級	○	中
L'	26	男	広東省	出版	未婚	恋愛中	高級	○	中
M'	53	女	四川省	建築	既婚	—	中級	×	—
N'	25	男	四川省	通信	未婚	経験ある	—	×	—
O'	25	女	湖北省	工業	未婚	恋愛中	—	○	中
P'	26	女	四川省	印刷	未婚	経験ない	初級	○	中
Q'	25	女	四川省	葬儀	未婚	経験ない	初級	○	中
R'	25	女	福建省	出版	未婚	経験ない	中級	○	中
S'	25	女	広東省	出版	未婚	恋愛中	中級	○	中
T'	26	女	四川省	教育	既婚	—	—	×	—
U'	25	女	四川省	金融	未婚	経験ある	初級	○	中
V'	27	女	遼寧省	金融	未婚	恋愛中	高級	○	中
W'	30	女	広東省	出版	未婚	経験ある	中級	○	中
X'	22	女	四川省	学生	未婚	経験ない	—	×	—

* 本一覧表は、対象者氏名のピン音のアルファベット順によって制作される。

**日本語能力：

高級：国際日本語能力試験 1 級合格者、及び 1 級と同様の日本語能力を持つ者

中級：国際日本語能力試験 2 級合格者、及び 2 級と同様の日本語能力を持つ者

初級：国際日本語能力試験 3・4 級合格者、及び 3・4 級と同様の日本語能力を持つ者

表 1 と表 2 が示しているように、本調査のデータには、性別と世代の偏りが見られる。すなわち、協力している対象者には、女性と 20 代が著しく多い。とくに日本人対象者のなかには、男性は 2 名しかいない。世代から見れば、20 代と 30 代の若者が多く、40 代の対象者がおらず、50 代が 3 名いる。つまり、今回のデータから、性別と世代による自己形成の差異を読み取ることは困難である。さらに、対象者数が少ないため、データの妥当性が疑われるだろう。しかし、性別間と世代間の差異を把握できない、または大量なデータを用いて分析できないが、ライフストーリー法では個々の対象者の人生そのものに接近することができる。調査は対象者のライフストーリーに焦点を当てるため、個々人のマンガ愛好史と恋愛史をより全体的かつ詳細的に捉えることができ、対象者の各人生段階における多様な出来事間の関係性をより横断的に読み取られるだろう。

また、現時点（2010 年～2011 年）で収集したデータから得る示唆を用いて、以前のマンガ事情を理解することができるという保証はないが、それが現在のマンガ読者および他のマンガ事情を把握する際に意義がある。

第二節では、データ分析を行い、マンガが恋愛に関する自己形成に与える影響を考察し、第二章に設定されている仮説を検証する。データを理解しようとする際、自己を開放的かつ分散的に捉えるというスタンスおよび物語論的アプローチを取る。すなわち、自己は文化やメディアの一部となっている同時に、文化やメディアは分散的自己の一部として存在している。また、文化とメディアに関わる諸要素は、ほかの要素との対話的相互作用を通じて、自己物語編成のプロセスに参加している（当然、抑制・排除される可能性もある）。そして、他者に対して自己物語ることによって、自己というものが産み出されるということである。

第二節 マンガと自己恋愛物語の編成

聞き取り調査のデータから、マンガと恋愛とのいくつかの関わりが見てとれる。本節は、対象者の恋愛意識・恋愛行動に影響を及ぼす要因、マンガが自己恋愛物語の編成に与える影響とその影響に関連する諸要素、および自己変化の生起について考察しながら、第二章において設定された仮説、すなわち、外部から自己空間に侵入する情報についての理解が自己空間における既存のポジションの差異によって異なるという仮説（仮説 1）と、自己変化のプロセスと変化が起こる状況に関する仮説（仮説 2~5）の検証を行う。

本調査では、中国と日本の二国のデータを利用する。当初、国家間比較を念頭にデータ収集を行ったが、分析（第三章）の結論を先どりするならば、二国のデータの間、際立った差異が見られなかった。それによって、以下の分析には、比較分析を行わない。ただ、データから、対象者の自己恋愛物語編成の国家間差異が見られる。たとえば、中国人女性の対象者は、一定の年齢（20 代後半）になるならば、より「現実性」をもつ条件（たとえば、「顔が普通」「安定した仕事を持つ人」「本人が優しい」「相手の両親が優しい」などの条件）を持って恋愛・結婚の相手を選択する人が多い。一方、日本人女性の対象者は相手を選択する基準について語る際、「二人の関係の平等性」や「お互いに支え合う関係性」といった二人の関係性について語る傾向がある。しかし、本研究の重点は「マンガが自己恋愛物語の編成に与える影響」に置いているため、全体的な自己恋愛物語編成における二国間の比較分析を取り上げない。それによって、以下のデータ分析を行う際、データの国別分析は行わないこととする。

1. 恋愛意識・恋愛行動に影響を及ぼす要因²²

対象者が物語った内容から、自身の恋愛意識・恋愛行動に影響を与えるいくつかの要素（表 3）が読み取られる。

²² 本文が注目しているのは要因の多様性、およびマンガに関わる要因と他の要因との関係性であるため、他の要因とそれらの間の関係性を詳しく論じない。

表3 対象者の恋愛意識・恋愛行動に影響を及ぼした要因*

対象者	年齢	性別	マンガ・ 動漫への 没入度	マンガにおけ る恋愛要素へ の関心を持つ /持ったか	恋愛意識・恋愛行動に影響を及ぼした要因 (左→右：影響を初めて及ぼす時間順)
A	21	女	高	○	マンガ 親関係 恋愛経験
B	32	女	高	○	マンガ 高校入学+マンガ 恋愛経験
C	24	女	中	○	恋愛経験
D	22	女	中	×	自分の性格 知人**
E	25	女	高	×	母親 小説+マンガ 親関係 卒業
F	32	男	高	○	親関係
G	23	女	中	○	マンガ 高校入学 同じクラスの男性 家族関係+マンガ 友人
H	30	女	中	×	人間関係 家族関係
I	55	女	低	○	マンガ 恋愛経験 夫婦生活
J	29	女	中	○	マンガ 同級生 卒業 友人
K	24	男	中	×	知人 自分の人生観 恋愛経験
A'	23	女	低	○	片思い経験 知人 教育環境 恋愛経験
B'	22	男	高	○(ゲーム)	ゲーム 「好き」という経験 他人の経験
C'	27	男	中	×	恋愛経験
D'	51	男	—	—	夫婦生活
E'	28	女	低	○	(対象者は語っていない)
F'	29	男	—	—	恋愛経験
G'	27	男	中	×	あまり恋愛について考えない 「好き」という経験
H'	25	女	低	×	家族の性格 家族の婚姻経験 趣味(マンガ+アイ ドル)
I'	34	女	高	×	恋愛経験
J'	29	女	低	○	マンガ 恋愛経験 父親 成長

対象者	年齢	性別	マンガ・ 動漫への 没入度	マンガにおけ る恋愛要素へ の関心を持つ /持ったか	恋愛意識・恋愛行動に影響を及ぼした要因 (左→右：影響を初めて及ぼす時間順)
L'	26	男	中	×	恋愛経験
M'	53	女	—	—	ドラマ+映画 年齢
N'	25	男	—	—	人生経験 親関係
O'	25	女	中	○	親関係 知人
P'	26	女	中	○	家族の性格 自由が欲しいという考え
Q'	25	女	中	○	マンガ 知人 親関係 年齢
R'	25	女	中	○	マンガ 父親の死亡 卒業
S'	25	女	中	○	自分の性格 恋愛経験
T'	26	女	—	—	韓国ドラマ 結婚対象との出会う
U'	25	女	中	○	マンガ 父親 両親の離婚 知人 マンガ 成長
V'	27	女	中	○	マンガ 成長 家族の希望 恋愛経験
W'	30	女	中	×	恋愛経験
X'	22	女	—	—	人間関係 古典文学+人生経験+親関係

*本表は対象者の語りから抽出したキーワードによって制作されている。

**「知人」、「友人」と記入する場合、知人や友人の恋愛経験や恋愛に関する発言を指す。

表 3 が示しているように、対象者が自分の恋愛史を整理する際、恋愛意識・恋愛行動に影響を及ぼす要因として、多様な要素が呈示されている。それらの要素において、マンガのほかに、環境の変化や、年齢の変化、自分の恋愛経験・その他の人生経験、他人の恋愛経験・意見、家族（たとえば、家族の性格、特定の家族成員への憧れ、家族成員の恋愛経験、家族関係、等）、および他のメディア・趣味の影響などの要素が多く見られる。

高校入学以前、マンガが恋愛に関わる自己形成に与える影響

35 人の対象者（マンガ愛読者 29 名）のなかに、高校入学するまえに、マンガの影響を

受けたのは10人（女性10人、男性0人）である。事例を見るならば、10代前半に少女マンガを読んで、そこから、恋愛の雰囲気、恋愛をしている人々の行動や趣を分かってきたと語っている対象者がいる。また、一部の女性の対象者によれば、彼女たちは小学校の頃に少女マンガをたくさん読んで、「かっこいい男性」や「いい相手」を判断する基準が影響を受けた。それによって、周りの男子を見ると、「かっこよくない」「性格よくない」「そんな人を好きになれない」と思い、長い間恋愛経験がないという状況に至ったと、彼女たちが語っている。さらに、Q'さん（女性、25歳、葬儀業）は、中学生の頃に、マンガを読むことに馴染んで、「実際好きな子に告白してから、やっぱり距離感（筆者注：マンガを読む際、読者としての自分が主人公との間に、距離感が感じられることと同じように、Q'さんが好きな人との距離感を享受していた）がなくなって、恋心の面白さもなくなって、がっかりした…やっぱり、人を好きなモデルもマンガに影響されたかな」と語っている。

ただ、一部の対象者は、小さい頃に、マンガに描かれている恋愛物語やかっこいい男性の主人公に憧れたと語っているが、マンガに描写された物語や人物を基準にして好きな人を決めるという語りはない。

要するに、低年齢段階で読んだマンガは、対象者に「少女の恋愛の世界」を見せている。恋愛に関する実体験がないため、一部の対象者は将来起こりそうな美しい恋愛と完璧な彼氏に憧れていた（その点に関しては、マンガではなく、ドラマや映画やゲームなども類似の影響を果たしている）。一部の対象者はマンガの世界から、恋愛の雰囲気・趣を学習していた。

高校入学以降、マンガが恋愛に関わる自己形成に与える影響

しかし、上述のような「憧れ」や「マンガによって形成した相手を選択する基準」は不変なものではない。事例を見るならば、高校入学してから、「マンガに描かれた恋愛物語はうそだ」と意識して、「がっかりした」経験について語っている人がいる。彼女たちが読んだ少女マンガの設定には、主人公が高校生であることが多い。このような物語を読んで、「高校生の恋愛が美しい」と思い込み、実際に高校生になると、高校生活とマンガに描写されているものが「全然違う」ことを発見して、高校生恋愛についての認識を修正した。

人生経験の積み重ね（たとえば、家族事情、卒業、成長、年齢の増加など）、とりわけ自分と他者の恋愛経験・婚姻経験の積み重ねによって、対象者たちの恋愛意識・恋愛行動様式が変わってきた。「憧れ」を抱いた対象者のほぼ全員は、自身の成長に伴って、より現実的な考え方ができ、「憧れ」の気持ちがどんどんなくなってきた。今でも、昔の少女マンガを読み返し、そこで描写した恋愛物語を読んでドキドキしている事例が見られるが、彼女たちは「現実とは現実、理想とは理想」と語り、その際、少年少女のドキドキする恋愛への「憧れ」がただの記号消費になってきた。

また、「マンガによって形成した相手を選択する基準」を持った対象者は、一定の年齢になって、「またそんな男子がいいと思うと、いけない/結婚できない」と考え始め、より現実性のある恋愛意識を持つことになっている。「距離感を享受していた」Q'さんも、卒業してから、見合いに参加し、好きな相手に積極的に連絡を取っている。

高校入学以降、マンガが恋愛意識・恋愛行動に与える影響を見れば、五つの事例がある（以下の事例は対象者の完全な恋愛史ではなく、中学校以降の、マンガと関わる恋愛史のみである）。

・Eさん（女性、25歳、営業職）の事例：

Eさんは小さい頃から、自分の母親と周りの女性を見て、彼女たちが「誰々ちゃんのお母さん」としか見做されていないと思った。しかし、自分の母親は出産する前に、銀行員として働いた経験がある。少女マンガに描かれた「戦う女性」という女性像に憧れ、「どうして結婚してから自分の戦いをやめるか」という疑問を持ち、その後、仕事する女性像を描写している小説とマンガを読んで、「結婚しても、働き続けられる」こと、および「結婚しても、ふたりは対等な立場に立つことができる」といったことを発見し、現在の恋愛意識に至った。すなわち、結婚しても、仕事を続け、結婚するなら、対等な関係性があるという恋愛意識である。実際、現在、Eさんが好きな男性がいるが、彼女は恋愛を求めるより、自分の仕事のために頑張っている。

・Gさん（女性、23歳、学生）の事例：

高校時代から大学時代にかけて、Gさんの妹が夜遊びやタバコ、お酒にはまることによって、親子関係が緊張した。それから、Gさんは穏やかな家族が欲しくなってきた。当時、彼女は『夏目友人帳』というマンガと出会い、そこで描写されている家族関係が自分の理想的な家族関係だと分かった。また、大学に入って、Gさんは友人の恋愛経験を聞き、それが疲れる経験であると思い、「二人が一緒の部屋にいて、お互いに別々のことをしても、負担にはならない」という恋愛関係性を求めることになった。自

分の家族関係を見て、それが反面教師だと思い、マンガに描写される家族関係に憧れ、「自分は恋愛経験より、穏やかな夫婦関係が欲しい」という恋愛意識に至った。

・U'さん（女性，25歳，金融業）の事例：

U'さんは自分の父親のような男性に憧れ、強固な心を持つ人、愛情に対して一心な人、頭のいい人を求めている。しかし、U'さんの両親は結局離婚した。周りの知り合いの夫婦も離婚したことが多かった。そのとき、U'さんは『天は赤い川のほとり』を読むことによって、愛情に対して一心であり、お互いを信頼し、強固な心を持ち、お互いに頑張るといような恋愛関係も存在するということを知り、「私はこのような恋愛が欲しい」という恋愛意識に至った。

以上の3つの事例のいずれにおいても、対象者がマンガを読むことによって、自分の既存の意識が明確にされるということが示されている。すなわち、マンガは対象者の現在の恋愛意識が形成されるプロセスにおける中心的な要素ではなく、むしろそれが既存の諸要素を解釈し、既存の意識そのものを明確化させる機能を果たしている。

また、他の事例を見れば、マンガおよびほかの趣味（アイドルやお笑い）を愛好することによって、「恋愛以外の世界が鮮やかだ」と思っている対象者がいる。それによって、彼女たちは、恋愛より、趣味のほうを求め、恋愛に対する意欲が低い。この場合、マンガは恋愛意識を形成する中心的な要素ではなく、対象者の精神力や時間の分配に影響を与える一つの要素となっている。

「分散的自己の物語的形成」という視点から考えるならば、対象者は聞き取り調査の場において、今までの恋愛意識・恋愛行動様式の形成を物語っている。それによって、対象者の恋愛に関わる自己がその場において産み出されている。対象者の自己物語によれば、彼・彼女たちの恋愛意識・恋愛行動様式の形成に影響を及ぼしたのは多様な要素である。すなわち、人生において、多様な声/ポジションが自己空間に侵入している。一部の対象者は、実際に恋愛を体験するまえ、マンガに描写した恋愛物語に惹かれたり、そこで描かれた恋愛の雰囲気・趣を学習したりしていた。彼女たちにとって、自己空間にはじめて入った恋愛に関する声（たとえば、理想的な相手がやさしいかつっこいい男性である。自分が成長していくと、美しい恋愛を体験できる。あるいは、恋人同士はこんな風に付き合っている）は、マンガから読み出されたものである。

その後、対象者自身の成長や環境の変化に従って、ほかの恋愛に関わる声/ポジション

も自己空間に入ってきた。それらの声/ポジションにおいて、とくに恋愛認識・恋愛行動に影響しているのは、実体験であると考えられる。たとえば、マンガっぽい恋愛が高校生活で起こらないということが発見されると、マンガから得る認識が否定されることがある。また、恋愛経験などの人生経験の積み重ねに伴って、「友人」、「家族」、「恋人」、「配偶者」などのポジションが外的自己空間に入り、「その人の友人」、「両親の子ども」、「その人の恋人」、「その人の配偶者」などのポジションが内的自己空間に入り、友人の声、家族の声、恋人の声、配偶者の声、メディアの声、社会的声などの多様な声が自己空間に対話しながら、同意や否定、競争などの対話的關係性の発展によって、恋愛意識・恋愛行動様式が形成される。対象者の現在の恋愛意識・恋愛行動様式を見れば、メディア（マンガを含む）の声より、実体験によって生起・侵入する声は競争の優位にある。すなわち、実体験に関わる声によって、マンガに関わる声（たとえば、高校生の美しい恋愛）が対話的關係から抑制ないし排除されることもある。現在の恋愛認識・恋愛行動に至るプロセスにおいて、マンガから読み出される要素は中心的な地位を占めていない。対象者は主に、恋愛に関する実体験によって生起・侵入する声を用いて、過去の恋愛認識を修正したり補完したりしてきた。

このような対話的關係性が進展することによって、自己は絶えず、対他的あるいは対自的に、バーバル（たとえば、友人との対話、聞き取りの場での語り）とノン・バーバル（たとえば、自己空間における対話を通じて、メディアに関する声が抑制され、実体験に関する声が強化され既存の自己物語に加えられる）のかたちで、自己物語を語っている。それによって、自己が産み出され続ける。

以上、自己空間における対話的關係性や自己物語の編成に関わる声は多様であるが、通常、恋愛に関わる対話的關係性や自己物語の編成において、マンガから読み出される要素は中心的な位置を占めていない（しかし、個人の恋愛実体験がマンガと関わるならば、マンガから読み出される要素は自己の恋愛物語の編成において、中心的な位置を占める可能性もあると考えられる）。むしろ実体験に関わる声に比して、マンガに関わる声はより周辺的な位置にある。この点を前提にして、次は、マンガが自己恋愛物語の編成に与える影響とその影響に関連する諸要素について考察する。

2. マンガが自己恋愛物語の編成に与える影響とその影響に関連する諸要素

前述のように、マンガが対象者の恋愛意識・恋愛行動に与える影響は、主に以下の三つに要約されることができる（しかし、三つの影響がすべての対象者に及ぼされているのではない）。

第一に、マンガは恋愛の世界を対象者に見せている。つまり、対象者の自己空間における恋愛に関するポジション/声が稀である際、マンガによって、少年少女の美しい恋愛や、恋愛の雰囲気・趣に関するポジション/声は対象者の自己空間に侵入している。対象者の実体験の積み重ねによって、前者が自己の恋愛物語編成の周辺に退去していく（あるいは、記号消費になっていく）が、恋愛の雰囲気・趣は対象者の後日の恋愛経験においても、影響を与えている。たとえば、Vさん（女性、27歳、金融業）の語りによれば、彼女は成長して、はじめて好きな人と付き合った頃、マンガに描かれたデートのシーンや特定の状況の対応を参照したということである。しかし、注意しなければならないのは、「恋愛世界」を個人に見せているのは、マンガのみならず、ドラマやゲームも類似している影響を及ぼしているということである。また、Bさん（男性、22歳、学生）は小学校の頃から、ゲームを好んでいる。実際に異性と会う際、どの状況においてどのような振る舞いが適切なのか、どのように対応すれば面目を失わないのか、といったことを考えるとき、ゲームに出ているシーンを参照している。ただ、こういった影響の及ぼす時期がある程度限定されている。さらに、マンガに見せられている「世界」は、恋愛に限らない。

第二に、マンガは、対象者の自己空間における既存の諸要素を解釈し、既存の意識を明確化させる機能を果たしている。すなわち、一部の対象者は、さまざまな実体験（たとえば、環境の変化、恋愛経験の積み重ね、他者との対話など）によって、ある意識を編成してきた。マンガの物語によって、対象者は、「これが私の欲しい恋愛/結婚だ」と思い、既存の意識が解釈され、明確にされている。そのことは、宮台真司らが提案している「関係性モデル」という概念に類似している。つまり、マンガが提供している「私」や「世界」に関する諸要素が、読者の自己物語編成のプロセスに吸収され、自己を理解するための図式・モデルになっている。

第三に、自己空間における諸ポジションは、同じ地位に存在しているのではない。全体的な自己空間において、個人趣味に関わるポジションがより中心的地位にあり、それらのポジション間の対話的關係性がより頻繁に活発化するならば、個人は、自分の精神力、時

間などのより多くの分を趣味のためにかけることになる。その際、恋愛のためにかける精神力や時間などが少なくなり、恋愛への関心が低くなるかもしれない。

さらに、マンガが自己恋愛物語の編成に与える影響は、恋愛意識・恋愛行動に与える影響に限らない。マンガは、対象者と相手の知り合いの契機、あるいは二人の共通話題の一つ（ただ、それが一番重要な話題ではないように語られている）になっている。言い換えれば、マンガは、自分と相手の自己空間が部分的に共有し始める契機になりうる（空間の共有に関しては、第二章第一節図2参照）。そのうえ、マンガという共通話題を持つ対象者にとって、マンガは自分と相手の自己空間の間の対話的關係が活発化する契機になり、二つの自己空間の共有できる部分を拡大する契機になる。

また、一部の対象者は、恋愛・結婚の相手を選択する際の、「自分のマンガという趣味を認める」という条件について語っている。つまり、彼女たちにとって、マンガは自己恋愛物語の展開に関わる非常に重要な要素となっている（恋愛・結婚する際にも、マンガという趣味を放棄しないということについての考察は、「3.自己変化に関する事例分析」参照）。

マンガが恋愛に関わる自己形成に与える五つの影響の内容を論じたうえで、これからは、そういった影響に関係するいくつかのことについて考察する。

聞き取り調査のデータから、①マンガにおける恋愛要素への関心の差と、②マンガにおける恋愛物語への理解の差、③理想と現実への認識の差、④既存の恋愛意識、⑤マンガへの没入度などの、マンガが恋愛に関わる自己形成に与える影響に関連している要素が見られる。

①マンガにおける恋愛要素への関心

表3が示しているように、対象者のなかに、低年齢段階から、マンガにおける恋愛要素へ関心を持つ人と持たない人がいる。つまり、さまざまな要因²³の複合的影響によって、人々が持つ恋愛物語への関心が異なっている。関心を持つ点の差異によって、マンガから読み出されるものも異なっているだろう。表3によれば、高校入学前にマンガに描かれた恋愛物語に影響された対象者のすべては、当時読んだマンガにおける恋愛要素へ関心を持った人である。マンガにおける恋愛要素への関心が低い人のほうが、マンガが自己の恋

²³ たとえば、恋愛心理の発達、成長環境、教育などの多様な要因があると考えられるが、ここでは、それらの要因に議論の重点を置いてないため、その点について論述しない。

愛物語の編成に与える影響は少ない。マンガにおける恋愛要素への関心が低いため、マンガから読み出されるものにおいて、恋愛に関わる声はより少なく、より周辺的な位置に存在する。そのため、マンガを読むことによって自己空間に生起・侵入する恋愛に関わるポジション/声がより少数であり、またはより周辺的な位置に存在し、あまり自己物語編成に関与しない状態にある。

②マンガにおける恋愛物語への理解

マンガから読み出されるものは、必ずしもマンガ作者が伝えたいもの、あるいは多くの読者が読み出しているものと一致していない。なぜなら、人によって、ある物語やある感情への理解は異なる。明確に、「小さい頃には、恋愛ものをよくわかっていなかった」と語った対象者がいる。そのうち、一部の対象者はマンガを読む経験における、「大きくなってから、昔読んだマンガをもう一度読んだら、こういう話だったかと分かった」という体験について語っている。たとえば、Aさん（女性、21歳、学生）とBさん（女性、32歳、マンガ家）によれば、彼女たちは、昔読んだ作品（恋愛を主題とするマンガ）をもう一度読むと、以前気づいていなかったものを発見し、その物語の意味深さを理解してきた。また、Cさん（女性、24歳、学生）によれば、彼女は小学校の頃には、恋愛の実体験がなかったため、少女マンガを読んで、それが面白いと思ったが、そこまではまっていなかった。「もし、いま同じ作品読めば、好きになるかも」と、彼女が語っている。Iさん（女性、55歳、主婦）とVさんの場合、彼女たちは、小学校時代に少女マンガを読んで、それを好きになったが、後に恋愛についての認識が積み重ねられたことで、恋愛への理解の増加に従って、マンガにおける恋愛物語の面白さをどんどん理解してきた。

Kさん（男性、24歳、学生）はマンガを読み始めるまえ、小学校時代に、ゲーム好きになった。彼が恋愛というものを理解するまえに、ゲームをする際、そのなかの恋愛関係をすべて他の人間関係と同じものとして認識し、恋愛に関するシーンを恋愛場面としてプレーしたことがなかった。

典型的な事例として、ここではBさんの事例を紹介したい。Bさんは現在、少女マンガ家として活躍している。彼女は、自分の経験のみならず、読者からの手紙から分かることについても語っている。

Bさん（女性，32歳，マンガ家）の事例：

（以下の内容はインタビューより取られている。筆者：陳；対象者：B）

B：読者さんの手紙とかは、結構な子供な手紙が来るので、例えばこのまえの話とかでも、ネコが出てくる、タイプなんですけど、「すごい応援しています、うちの猫を見てください」みたいな、あんまり関係ないみたいな、手紙が来るので、その写真たくさん来るみたいな、嬉しいけど、ありがとうみたいな。

……

陳：年下の読者が理解している物語と、Bさんが描いているものとは、一緒ですか。

B：まだ、あんまり、そんなに深くは捉えて頂けていないかもと思ったのはあるんですけど。自分も、小さいときに、マンガ読んでいて、なんとなく楽しいなと思ったものを、年いってから読み返すと、こんな深い話だったみたいなことがあるんで、そんな感じで、大事にしてもらえればいいなと思う。

陳：高校生とか、中学生とか、そのとき、読んだ作品における人間関係とか、ちょっと深い話を完全に理解することができないですかね。

B：そうですね、そのときは。

対象者たちの語りから考えるならば、マンガにおける恋愛要素がそのまま自己空間に入るのではなく、それが読者自身の読解によって「読み出される恋愛要素」というかたちで自己空間に侵入している。読者の「読み出す」という行為にとって必要な既存のポジション/声（恋愛に関する知識・情報・認識など）、すなわち、恋愛についての理解（一般的に多くの人々に共有している理解）を支えられる既存のポジション/声が欠ける場合、自己が自己空間に入るポジション（＝恋愛要素）に付与する声が一般的な理解から外れる可能性がある（＝仮説1）。また、人のさまざまな経験の積み重ねによって、自己空間における恋愛に関わるポジション/声が増加し、自分自身の恋愛物語が編成される過程において、恋愛要素への理解も一般的な理解へ接近していくと考えられる。

以上の考察によって、仮説1が検証されている。そこから、対象者が低年齢段階で読んだ恋愛物語は、現在われわれが理解しているものとは一致している保証がないということが分かる。マンガに描かれた恋愛物語が一見「恋愛もの」であるが、子どもたちは、それが「恋愛もの」であるか、また「恋愛もの」の含意が何かということについては、われわれのように理解していないかもしれない。人がある事物についての認識において過程があるように、恋愛についての理解もそうである。

③理想と現実への認識の差異

ほぼすべての対象者は、自分にとって、「マンガの世界はマンガの世界、現実の世界は現実の世界」であると述べている。ここでは、分散的自己という概念と用いて、その点を理解したい。約半数の対象者の語りから、彼・彼女たちのマンガを読むときの好みと現実における恋愛の希望が異なっているということが読み取られる。たとえば、Iさんの場合、彼女は結婚した後、あるマンガ（対象者がそのマンガのタイトルを正しく覚えていない）を読んで、そこに書かれたホストを仕事としている主人公に惹かれ、さまざまな女性と付き合っている男性が本気に好きな女性、つまりその人の「唯一」かつ「特別」な存在になりたいと思った。しかし、マンガを読み終わってから、彼女は現実世界の主婦生活に戻って、家族のために努力してきた。

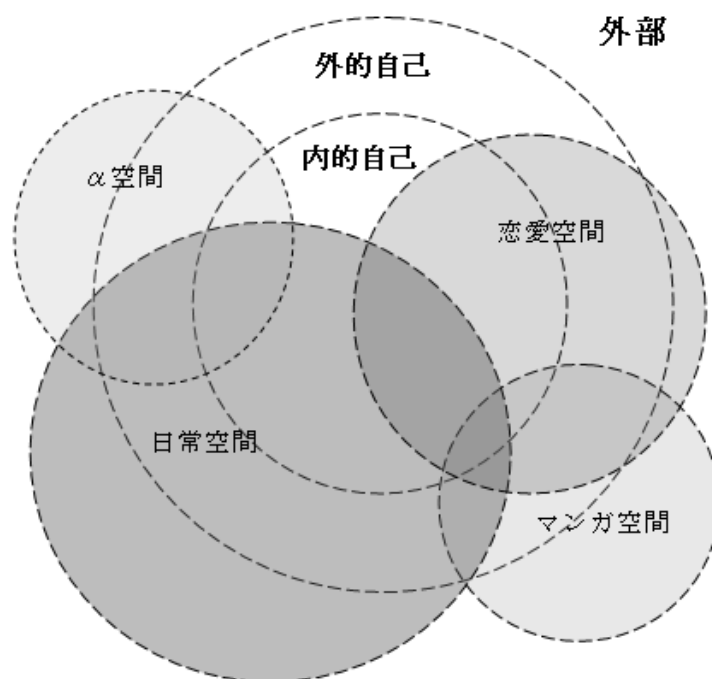
Iさん（女性、34歳、出版業）の場合、彼女は現実世界において、同性の人を恋愛対象としている。マンガやアニメを見る際、彼女も女性のキャラクターにより注目しているが、彼女が交際している相手のタイプ（顔、性格、振る舞いなど）と、彼女がマンガ世界に好んでいるタイプとは、異なるタイプであることが分かっている。また、Bさんによれば、彼にとって「ゲームやアニメのなかの、やっぱりすごく外向的、すごく内向的な人が面白い。けれど、実際に付き合うと、そういう人、無理です」。

さらに、小学校の頃に、マンガに描かれた男性に憧れていたが、そのような男性と完全に異なるタイプの男子を好きになった経験についての語りも見られる。

上述の事例から、以下のことが考えられる。マンガに描かれた恋愛物語や人物を理想的な存在だと認識して憧れたり、あるいはそれらを記号として消費したりする対象者がいる。彼・彼女たちの自己空間において、「マンガから読み出される要素が存在しているサブ空間」（以下は「マンガ空間」と記す）があると仮定できる（図4）。その空間は対象者の日常生活（＝実体験）の諸要素が動いているサブ空間（以下は「日常空間」と記す）とは、完全に関連しないとはいえないが、対象者が日常生活に恋愛を体験する際、マンガ空間における諸ポジション/声は日常空間に起きる対話に多く参与していない。逆に、個人がマンガのことや、マンガに基づいて形成された理想的な恋愛について考える際、対話は主にマンガ空間における声によって進行される。このような自己空間の構造や対話の進展にしたがって、少なくとも二つの自己の恋愛物語が編み出されている。一つは、マンガを読むことによって形成された理想的な恋愛物語であり、もう一つは、日常生活に編成されている恋愛物語である。マンガに関わる恋愛物語が編成されている際、日常空間における声が

どう参与しているかということはデータから読み取れないが、前述のように、日常の自己恋愛物語が編成される際、マンガに関わる声がより周辺の位置にあるということが分かっている。

図4 自己空間におけるサブ空間の仮定*



*サブ空間の構造を明確に示すために、ポジションの表示が省略されている。

上図では、ハーマンスが提供している自己空間の構造において、「サブ空間」の存在が仮定されている。つまり、ある主題に関するポジションが主に存在/移動/活発化する範囲を、その主題に関するサブ空間としてとらえている。自己空間と同じように、各サブ空間において、外部と外的自己、内的自己という三つの部分がある。さらに、各サブ空間の間に、共有している部分が存在しうる。

では、なぜ対象者自身は「マンガの世界はマンガの世界、現実の世界は現実の世界」であると実感しているのか。それは、異なる状況において、対象者が異なるポジションへ移動するからである。マンガのことや、マンガに基づいて形成された理想的な恋愛について考える際、対象者の自己がマンガ空間における「読者」、「第三者」、「マンガ物語の外に立つ人」（今回のデータから、対象者は「主人公」としてマンガを享受しているという語りが無い）などのポジションに移動することに対し、日常的な恋愛を体験する際、あるいは、日常的恋愛について語る際、自己が日常空間におけるポジションに移動する。

さらに、対象者が自分の恋愛史について語る際、主に日常生活の恋愛について語っているということから、対象者の自己恋愛物語の編成において、日常（＝実体験）の自己恋愛物語が中心的位置にあり、マンガなどに基づいて形成されている理想的な自己恋愛物語がより周辺的な位置にあるということが明らかになる。

④既存の恋愛意識

もし、マンガが提供している恋愛に関する情報が、個人の自己空間に既存している恋愛意識と矛盾しているならば、個人はどうするのか。分析できる事例が二つある。

X'さん（女性，22歳，学生）の事例：

X'さんは、小学校の頃からいじめられ、人間関係がつかった経験がある。当時の彼女にとって、恋愛は考えられないことであった。そのとき、彼女は、少年少女の美しい恋愛を題材としている日本マンガを読んで怒り、なぜ自分だけがそんなにひどい目に遭うのかという疑問を抱いて、マンガに描かれたものがうそだと考え、マンガを嫌いになった。当時から現在まで、X'さんは二度と日本少女マンガを読んだことがない。

X'さんの語りから、マンガへの強い反感が読み取れる。聞き取り調査が行われたときも、X'さんの表情から、当時読んだ少女マンガへの抵抗感が感じられる。この事例を見れば、X'さんは少女マンガを読むまえに、人間関係のつらさを経験し、他者への不信を抱いた。恋愛をすることとは、当時の彼女にとっては希望できないものにすぎない。ちょうどその際、少女マンガによって、美しい恋愛の世界がX'さんに見せられた。それは、彼女の自己恋愛物語における「自分にとって、恋愛は考えられないことだ」という既存の声と矛盾した。その場合、彼女の自己空間において、「マンガに関わる理想的自己恋愛物語」と「日常的自己恋愛物語」の両方が編成されているのではなく、マンガから得た心理的衝撃が大きすぎるため、彼女はマンガに関わる要素を一切排除しようとしてきた。

つまり、マンガの声は、彼女の既存の自己物語をかなり脅かしていた。むしろ、マンガによって、彼女自身のつらい状態が反映されていた。さらに、「恋愛は美しい。私はこんな美しいものへの憧れを抱いている」という「語り得ないもの」が浮上してきた。彼女は人間関係のつらい状況において、すでに「自分にとって恋愛が考えられない」という自己物語を編成してきたが、「実は、私もこのような恋愛に憧れている」という「語り得ないもの」に光が当たることによって、彼女は心理的不確実性（たとえば、「これは不公平な

世界だ。私はどうしたらいいのか。私がいったいどう考えているのか」という不確実感を緩和するため、新しい自己物語を編成した。すなわち、少女マンガに描かれたものがうそである。自分がそういうリアルではないものを読まない。「私」は自分なりに生きていく、といったものである。自己物語の再編成をする際、X'さんはマンガに関わる要素を排除しようとするが、「排除」そのものをも自己物語に編み込んでいる（自己物語の再編成＝自己変化に関しては、後述する）。

上述の X'さんの事例は、マンガに関わる恋愛物語を徹底的に否定する事例であり、次は、マンガが提供しているいくつかの恋愛語りを否定する事例である。

E'さん（女性、28歳、法務職）の事例：

13歳のとき、E'さんは『花音』というマンガを読み、近親間の恋愛をはじめて知って、それを受け取れなかったため、『花音』のマンガを他人にゆずった。その後、彼女は『火王』という台湾マンガを好んだが、そこに描かれた同性愛に関するシーンを受け取れなかった。自分の成長に伴って、E'さんは、「恋愛感情が、むりやりさせられるものではない。好きになったら、人は自分のことを決める権利を持っているのではないか」という認識に至った。「このことを思えば、同性愛のことをなんとか理解できるようになってきた」と、彼女が語っている。

E'さんは最初『花音』を読んだ頃には、近親間の恋愛について知らなかった。しかし、それが日常生活に見られる恋愛関係や夫婦関係、家族関係とは異なるため、彼女はそういう恋愛のあり方を受け取れなかったということが推定される。彼女は近親間の恋愛について理解していなかったが、自己物語に参加してきたほかの恋愛関係、夫婦関係、家族関係に参照して、近親間の恋愛を異質的なものであると判断して、それを否定していた。

また、彼女は同性愛のシーンを読んだとき、既存の同性愛への認識（その認識において、自己物語に参加してきたほかの関係性への参照や自己空間に侵入した社会的声があると考えられる）に基づいて、同性愛を否定した。現在、彼女が同性愛を理解できるのは、実体験によって恋愛のあり方を理解してきたからである。

上述の二つの事例のいずれにおいても、マンガが提供している恋愛に関する情報が、個人の自己空間に既存している恋愛意識と矛盾している場合、対象者は積極的にマンガから読み出されるものを否定したのである。すなわち、マンガから読み出される要素をどのように受け取るのかは、自己空間に既存している声、厳密に言うと、語られてきた自己物語

によって決められる。E'さんは、マンガから近親間の恋愛を読み出したが、それをそのまま自己空間に存在させるのではなく、「否定」という声を付け加えてそれを自己空間に存在させるということである。X'さんの場合も同じく、マンガそのものではなく、「マンガに対する排除意識」を付け加えて、それを自己物語編成に関与させているのである。

一方、いくつかの事例から、同じマンガあるいはマンガの登場人物をどう受け取っているかということは、主に対象者の既存の自己物語に基づくということが分かる。それによって、対象者の自己空間に既存の自己物語が異なる場合、彼・彼女たちが同じ作品/人物から受け取っているものも異なるだろう。この点について、『名探偵コナン』における「江戸川コナン」という人物についての認識を語っているU'さんとV'さんの事例を参照する。

U'さん（女性，25歳，金融業）の事例：

U'さんは自分の父親のような男性に憧れ、強固な心を持つ人、愛情に対して一心な人、頭のいい人を求めている。また、彼女は「一番好きな登場人物があるか」と聞かれる際、筆者に対して自分の一番好きな「江戸川コナン」という人物について次のように語っている。つまり、その人物は、「勇気を持つ人、愛情に対して一心な人、頭のいい人」という。『名探偵コナン』における主人公の「江戸川コナン」/「工藤新一」²⁴について語る際、彼女はその「二人」を同一人物として考えているということも分かっている。

V'さん（女性，27歳，金融業）の事例：

以前、V'さんの両親は、自分たちの娘が年上の男性と交際/結婚することを望んでいた。相手の人が年上の人であるならば、その人が彼女の心的、または経験的不成熟を許すかもしれないと、V'さん自身と彼女の両親は思っていた。しかし、後日、実際に知り合った年上の男性の多くは、自分との間に、世代間のずれがあると、彼女は発見してきた。それによって、V'さんは現在の恋愛意識を編み出してきた。すなわち、「私の理想的な相手は、見た目が若く、心が成熟した人である」ということである。現在、彼女の恋人は、そのような人である。

一番好きなマンガ人物について語る際、彼女も「江戸川コナン」を提示している。彼女によれば、その人物の特徴は自分の理想的な男性と一致している。「工藤新一」ではなく、「江戸川コナン」という人物こそが、「見た目が若く、心が成熟した人である」と、彼女が考えている。ここでは、V'さんは「江

²⁴ 『名探偵コナン』の設定によれば、工藤新一は高校生探偵であり、彼はある事件によって身体を縮小する薬を飲んで、小学生の様子になった。その後、彼は多くの場合、小学生のような身体と高校生の頭脳を持ち、江戸川コナンという名前を用い、学校生活や事件解決に絡まれているということである。

戸川コナン」と「工藤新一」を異なる人物と認識している。

この二つの事例を見れば、二人の対象者の「江戸川コナン」という人物についての認識は、自分の既存の自己物語に基づくものであるということが分かる。二人の既存の恋愛意識が異なるため、その人物に対する認識も異なる。さらに、その人物（＝ポジション）を各自の自己物語に基づいて声を付与することによって、人物そのもの（＝ポジション）も、各自の自己恋愛物語に編み込んでいるのである。場合によっては、このようなポジションが自己恋愛物語に編み込まれることによって、自己の既存の意識が明確化されることもある。

⑤マンガへの没入度

一口に「マンガへの没入度」といっても、それは「マンガへの没入度が高いほど、マンガが対象者の自己形成に与える影響が大きい」とは意味していない。典型的な事例が二つある。B'さんと Q'さんはほかの対象者に比して、マンガに深く没入した経験を持つ人であり、恋愛経験を持たない人である（注：B'さんは動漫愛好者であるが、これから紹介するB'さんの事例は主にゲームに関わっている）。また、この二人はマンガ（あるいはゲーム）に没入する時期に、自己の恋愛意識形成の過程において、マンガ（あるいはゲーム）から読み出される要素を多く参照するということが分かる。

B'さん（男性，22歳，学生）の事例：

B'さんは幼稚園のころから、日本アニメ、マンガを好んできた。中学に入ると、彼は全寮制の学校に入り、ルームメートと一緒に、アニメの研究を始めた。高校になると、動漫産業に興味をもち、多くのイベントに参加することになった。また、彼は高校において、動漫のサークルを成立した。当時のB'さんの出身都市において、動漫サークルが少なかったため、B'さんたちの活動を報道した新聞記事もあったらしい。大学に入り、IT技術関係の専門を選択したことによって、日中の動漫産業の情報をより容易に入手することができた。その後、彼は中国国内における動漫産業の発展を観察し続ける一方、日本への留学を準備して、日本のマンガ・アニメ事情に注目している。現在、B'さんは日本の大学院に入学し、アニメの音楽監督になるため勉強している。また、ゲームに関しては、彼は小学校のころから、ゲームを好んできた。成人したあと、ギャルゲー²⁵をプレーすることになった。大学時代に、ゲームの創作に参加した経験もある。

²⁵ ギャルゲー：美少女ゲームのことである（窪田，2004）。

B'さんは今まで、恋愛経験がない。「女性と付き合うと、動漫やゲームを参照するかもしれない…たとえば、どのように問題を処理すればいいのか。でも、自分が参照するのは、現実性を持つものだけだ」と、彼が語っている。B'さんによれば、彼は「ふさわしい相手」と会ったことがない。むしろ、彼は「ふさわしい相手」の定義が分からない。好きな人がいても、自分の抱く感情が「愛」といえるかどうか分からない、いきなり「付き合ってください」といったら失礼だと思い、告白をしなかった。「愛」についての理解はゲームを参照できないと、彼が語っている。「ゲームの設定がとても奥深いものだ。二人は一緒にいろいろ経験して困難を乗り越えて、恋人関係になる。私の周りには、そういうことがないため、ゲームを参照できない」と、彼が語っている。彼は、自分が恋愛を展開することに必要なのは、「ひとつの契機、ひとつの転換の点」であると思っている。その契機/転換の点によって、自分の感情の変化が呼び起こされるということを彼は期待している。

Q'さん（女性、25歳、葬儀業）の事例：

Q'さんは中学校時代において、校門の隣にあるマンガ屋・マンガ露天商を利用して、多くのマンガを読んだ。彼女はほかの対象者と異なり、余暇のみならず、授業を受ける時間や宿題をする時間をもマンガのためにかけた。そのため、「すべての時間をマンガにかけることをやめなさい。それは無意味で幼稚なことだ」と、彼女は親や先生によく言われていた。当時、彼女は、周りの人が醜すぎると思い、特に好きになれる人がいないと思った。あるとき、彼女は同じクラスのある男子に片思いしたが、告白したから、「距離感がなくなって、恋心の面白さがなくなって、がっかりし」て、「好き」な気持ちをあきらめた。「やっぱり、人を好きなモデルもマンガに影響された」と、彼女は考えている。

上述の二つの事例を見れば、B'さんの生活・勉強においては、ゲームがかなり浸透している。Q'さんの中学校時代には、マンガが彼女の日常生活にかなり関与している。さらに、ふたりとも、ゲーム/アニメに描かれた恋愛シーンへ、関心を持っている/持っていた。自分の恋愛意識を形成する際、二人は、恋愛経験がないため、ゲーム/マンガをよく参照している/参照していた。彼・彼女の恋愛意識において、ゲーム/マンガの影響がよく見られる。ただ、Q'さんは高校生になると、少女マンガへの熱が低下してきた。現在、彼女が理想的であるとする異性は、「普通の男性」になり、自分の「考え方が現実的になった。もう26歳だから、このままじゃ結婚できなくなるかも」と、彼女は語っている。見合いに参加する際、彼女も「距離感を取る」ことより、好きな相手に積極的連絡を取ることをしている。一方、B'さんは今でもゲームを好んでいる。これからの恋愛を想像する場合、

ゲームから読み出した情報をよく参照しているということが分かっている。

すなわち、マンガ/ゲームに深く没入する場合、マンガ/ゲームに関わるポジションが自己空間に多く存在し、それらが同じくマンガ/ゲームに関わるポジションのみならず、ほかのポジション（たとえば、勉強や仕事、その他の生活の側面などに関わるポジション）との間にも対話的關係性の活発化が頻繁であるならば、マンガ/ゲームから得る要素は個人の生活の多くの側面と関連し、それが複数の自己物語（たとえば、恋愛に関する自己物語、仕事に関する自己物語、余暇に関する自己物語など）にも関与する可能性が高い。総体的に見れば、ゲーム/マンガに関する要素が、総体的な自己物語編成のより中心的な位置にあることもあり得る。

自己恋愛物語の編成のプロセスには、とりわけ実体験から参照できる声が少ない（その理由には、恋愛経験の無さがある一方、自己空間において、マンガ/ゲームが占める空間が相対的に多いため、参照できるほかの要素が相対的に少ないということもあると考えられる。）ため、自己空間を多く占めているマンガ/ゲームに関わる声から、恋愛に関わる声を参照することになるということが考えられるだろう。

すなわち、「没入度」がもたらすのは、自己空間においてマンガ（あるいはゲームなどのほかの要素）に関わるポジションが大量になることである。人によって、それらのポジションが多くの対話的關係に関与し、自己空間の多くの位置に浸透することがある。その場合、個人が自己恋愛物語を編成するプロセスにおいて参照できる実体験に関わる恋愛の声が少ないならば、マンガ/ゲームから得る声は自己恋愛物語の編成に関与すること、ないしその編成プロセスのより中心的位置を占めることが十分にあり得るということである。

一方、マンガへの没入度が高いが、それは個人の自己恋愛物語の編成とのつながりが弱いという事例も見られる。たとえば、Fさん（男性、32歳、公務員）は幼稚園のころから、マンガを読んでいる。彼はほぼすべてのジャンルのマンガを好んでいる。マンガの描写されている物語より、彼はマンガという表現の形式を好きなのである。Fさんはマンガへの没入度の高い人であり、マンガという表現形式およびマンガ史について詳しく知って、マンガに描かれた世界や物語を自分なりに研究している人である。しかし、自分の恋愛史を語る際、Fさんは「マンガ」という要素について語っていない。さらに、マンガと恋愛との関連性について、「私は、けっこう、マンガと現実を分けて考えている。（中略）理想とする恋愛……マンガの中だから、それがいいなって思うんだけど、実際、ちょっと

マンガの世界って特殊っていうか、一歩離れたところにあるイメージなんですね」と、彼が語っている。Fさんがマンガの物語から距離を取ってマンガを閲覧・研究しているということは、彼の語りから分かる。彼の自己物語編成のプロセスにおいて、マンガの影響があまり見られない。

要するに、高い没入度は、自己空間において、マンガに関わるポジションが大量に存在するということを意味している。人によって、マンガから得る声は自己恋愛物語の編成に関与すること、ないしその編成プロセスのより中心的位置を占めることが十分にあり得る。しかし、「マンガへの没入度が高いほど、マンガが対象者の自己形成に与える影響が大きい」ということが言い難い。この両者の関連性を考える際、自己空間における他ポジションおよび諸ポジションの関係性をも考察対象にする必要があるということである。

これまでは、自己恋愛物語の編成に、マンガが与える影響と関係する五つの要素について考察してきた。それらの要素の影響で、マンガの影響は人によって、または時間/状況の変化によって、小さかったり大きかったりする。

3. 自己変化に関する事例分析（自己変化に関する仮説の検証）

今までの考察は主に、対象者の既存の一貫した、連続性を持つ自己物語を編成し続ける事例を見てきた。しかし、自己変化（＝自己物語の変化）に関する事例（たとえば、Xさんの事例）もある。それは、対象者が、それまでの自己（行動や意識など）を部分的に否定し、新しい要素を導入して自己物語に変化を起こす事例である。

自己変化のプロセスを詳しく考察するため、6人の対象者の事例²⁶を紹介したい。そのなかに、AさんとHさんの事例は、状況の変化によってマンガを読み始めた経験に関する事例である。Aさん（Aさんの事例①）、Cさん、Uさん、Xさんの事例は、マンガを読むことをやめた経験に関する事例である。さらに、自己変化にとって必要な「一定の状況」を考察するため、「不変」に関する事例（Aさんの事例②、Cさんの事例）を対照的な事例として参照する。

まずは、マンガを読み始めた事例を見よう。

Aさん（女性，23歳，学生）の事例：

大学に入学するまえに、Aさんは内向的な性格の人であり、自分に対して自信を持っていない人であった。大学に入って、彼女の性格は変わった。その理由について、「環境が変わった。周りの人は、みな優しくなったから」と、彼女が語っている。そのとき、大学のクラスメート（中国の大学の各専攻において、クラスが設置されている）の紹介で動漫を好きになった。「性格が明るくなったから、機嫌もよくなった。そのため、動漫を好きになった。動漫を楽しむ心をもつことになったから」と、彼女が語っている。

この事例において、「動漫を好きになった」という変化を引き起こしたのは、大学に進学するという状況の変化であった。その新たな環境において、それまで「自信を持たない」自分に親切にしてくれる他者が多くなった。それらの「他者」の出現は、自己変化をもたらしたと考えられる。しかし、このような自己変化の契機は、浅野が提示している「語り

²⁶ 以下の事例分析は、主に対象者のマンガ・ライフストーリーにおける変化に注目している。調査データから、それらの変化が対象者の恋愛意識・恋愛行動の変化に明確に関連しているということを読みとれないかもしれないが、マンガに対する意識・態度の変化は、「マンガが読者の恋愛にかかわる自己形成に与える影響」に関係していると考えられる。すなわち、状況の変化に伴って、自己におけるマンガに関わるポジション/声が変動し、マンガの影響も変化していくということである。一部の事例において、こういった影響の変化を考察することができないが、個人マンガ史の変化と連動して、マンガの影響も変化するということを言っておきたい。

得ないもの」の浮上とは異なる。A'さんの場合、「他者」の出現に伴って、複数の新たなポジションが彼女の自己空間に侵入した。その際、彼女の自己空間において、「自信のない自己」というポジションは、「周りの人に親切にされる自己」というポジションとの間に、対話が生じる。ふたつのポジションは対立的な声をもつため、一時的に、A'さんの自己空間において、不確実性が生起するが、新しい状況に応じて彼女がこれまでの自己物語を再編成した（すなわち、「自信のない自己」に関わる既存の自己物語を「他人に親切にされる自己」に関わる自己物語に書き直した）ことによって、一時的な不確実性が消滅し、自己物語のスムーズな変化が達成された。

この自己変化が起こった際、一定の状況が見られる。すなわち、大学に入学することによって、自己の古い物語を承認する他者がいなくなり、新たな自己物語を認めてくれる他者が現れるという状況である。さらに、このような状況の変化は持続的であり、一時的なものではないということが分かる。

また、A'さんの場合、自己変化を引き起こす「外部から侵入するポジション」がA'さんの既存の自己物語における「不快」を取り除くことができるため、自己はそのポジションを対話的關係性から排除する必要がない。さらに、そのポジションは一時的に既存の自己物語とは対峙したが、既存の自己物語を承認する他者の不在によって、既存の自己物語を維持するため、新たなポジションを否定する必要もない。

H'さん（女性，25歳，学生）の事例：

大学2年生のとき、H'さんは親友（対象者P'さん，女性，26歳，印刷業）と知り合った。P'さんとの出会いは、H'さんのそれまでの友情意識を変えた。当時まで、H'さんが友人としての誰かと深く付き合ったことがないため、友人という存在は自分にとってあまり重要ではないと、彼女が思った。しかし、P'さんと出会ったことによって、彼女は友人の重要さを分かった。また、P'さんの影響で、彼女は動漫を好きになった。動漫を好きになるまえに、彼女は恋愛にあまり関心を持っていなかったが、動漫を好きになったあと、「恋愛なんか必要ない。恋愛以外の生活も楽しい」と、彼女は思った。

この事例において、P'さんは外部からH'さんの自己空間に侵入することによって、H'さんの既存の自己物語（すなわち、友人は重要ではないという物語）と新たな声（すなわち、友人が大切であるという声）との間に、対時的な対話的關係性が形成された。ふたつの声の対峙によって、自己空間において、不確実性が生じるが、A'さんの事例と同じく、

環境の変化に応じて、H'さんの自己物語が再編成されたことによって、一時的な不確実性は消滅した。

P'さんが H'さんの外的自己になると同時に、P'さんに関わる一連のポジション/声（動漫に関するポジション/声を含んでいる）も H'さんの自己空間に入った。趣味としての動漫というポジションの侵入によって、H'さんの自己恋愛物語は、新たな要素、すなわち「恋愛は必要ない。恋愛以外の生活も楽しい」という声を編み込むことになった。

A'さんの場合と同じく、上述の一連の自己変化が発生する状況も、古い自己物語を承認する他者の不在と、新しい自己物語を承認する他者の出現によって特徴づけることができる。また、変化をもたらした状況は持続的であるため、自己変化を引き起こす、外部から自己に侵入するポジションは、自己に排除・否定される必要がないということが分かった。

要するに、新しい要素が自己物語に編み込まれる事例から、「状況の変化→外部のポジションの侵入→不確実性の生起」と「外部のポジションを梃子にして、自己物語を再編成する→不確実性の緩和」という自己変化のプロセスが見取られる。また、変化する状況および変化を起こす外部ポジションに関しては、いくつかの特徴が見られる。すなわち、自己変化が起こる際、その状況には、①古い自己物語を承認する他者の減少・不在と、②再編成された自己物語を承認する他者の存在、③こういった状況の持続性が見られる。さらに、「外部から侵入するポジション」は、対話的關係性に排除・否定される必要がないということによって特徴づけられるのである。

では、マンガという要素を古い自己物語の一部として否定する事例から、どのような自己変化のプロセスを見取られるのか。この問いを解くため、次は、マンガを読むことをやめる事例を考察する。

U'さん（女性，25歳，金融業）の事例：

（以下の内容はインタビューより取られている。筆者：陳；対象者：U'）

陳：どうして高校生になってから、動漫という愛好をやめましたか。

U'：うん。まあ、高校に入って、忙しくなったから。あと、中国で日本動漫を好きならば、いろいろな工夫が必要でしょう。ネット上でアニメを見ても、字幕が付いていなかったの、意味分からなかった。ちょうどそのとき、新しい趣味（筆者注：韓国人アイドル）もできて、動漫を一時的にやめた。実はね、高校から、大学にかけて、私が成長してきて、価値観などももっと現実的になってきた。幻の世界はもう私にはふさわしくないものになって、そっちにはまることがいけないと自分が

思ったりする。自分の世界についての正しい認識が動漫に影響されるかもしれない。たとえば、私はずっと動漫が好きだったから、人の顔をすごく重視して、周りの人全部気に入らなかった。そのままじゃいけないかなと、私が思った。

上述の事例を見ると、Uさんは高校に入って、いままで「気付いていなかったこと」について考え始めた。すなわち、「自分の相手を判断する基準が理想的すぎる。通常、その基準は現実世界においては適用できない」ということである。ここでは推定できるのは、高校入学する前に、Uさんが自分の理想的な相手がマンガにおいてしか存在しなかったということである。しかし、彼女は、実際にそれを恋愛の実体験と関連して考えたことがなく、それを「私はマンガ主人公のようなカッコいい男性が好きだ」という物語によって隠蔽したと考えられる。おそらく、彼女が高校に入ってから、周りに恋愛する人が増加し、それらの人々の様子を見ながら、自分の恋愛意識の非現実性に直面しなければならないということである。すなわち、対象者が高校に入って、状況の変化によって、「マンガを読むことで形成されてきた恋愛対象を判断する基準は、現実世界においては適用できない」という、それまでの自己物語における「語り得ないもの」に光が当たった。その際、これから、「私」が恋愛できるかどうか、あるいは、このような非現実的な恋愛意識を持って、どうなるのか、「私」の考え方が間違っているのか、といった不確実性が生じる。つまり、自己空間において、多くの声が対話的關係によってお互いの声を賛成/否定したり、競争したりしていた。こういった対話において、自己の恋愛意識の統合が求められる。結局、Uさんの自己は、「語り得ないもの」の浮上を梃子にして、「今まで読んできたマンガは幻を描写したものだ。私はこれから、現実世界に生きていくため、現実世界に適用できない恋愛意識を持つことがいけない。これから、私は動漫に接触することをやめて、もっと現実世界を見る」という新たな自己恋愛物語を編成（自己物語を再編成）したということである。自己物語の編成に伴って、不確実性の緩和も達成されることになった。

この自己変化が起こる状況を見るならば、第一に、高校において、彼女の既存の自己物語（すなわち、「私はマンガ好きである。私はマンガ主人公のようなカッコいい男性が好きだ」という自己物語）を承認してくれる他者が少なくなった。第二に、高校時代の友人において、恋愛に対してかなり関心を持つ人が多かったことによって、彼女の再編成された自己物語（すなわち「私は動漫に接触することをやめて、もっと現実世界を見る」という自己物語）を承認する他者が多くなった。第三に、自己変化の梃子となる「語り得ない

もの」の浮上をもたらす状況は、一時的に存在するわけではない。日常の学校生活において、現実性をもつ恋愛に関する他者の発言や行動は常に存在することによって、それらの声を自己における対話的關係性から排除することが困難である。第四に、当時の U さんにとって、現実における恋愛体験は、マンガという趣味より重要である。つまり、U さんの自己物語において、現実恋愛に関わるポジションはマンガに関わるポジションより、中心的な位置を占めている。第五に、自己変化を促す要素が単一ではない。

「語り得ないもの」を梃子にして自己物語の再編成を達成する事例として、X'さんの事例も紹介されている（前節参照）。前節に分析したように、彼女は「美しい恋愛物語」を描写する少女マンガを読むことによって、つらい人間関係をもつ自分でも「美しい恋愛に憧れている」という「語り得ないもの」に気づいたのである。したがって、彼女は「語り得ないもの」の浮上をもたらす不確実性を緩和するため、「マンガへの排除」を含む自己物語を再編成した。

この自己変化が発生する状況を考察すると、第一に、彼女の「美しい恋愛に憧れる」という自己物語を承認する他者は少ないということがある。むしろ、彼女の周りに、彼女の存在をある程度否定している人たちが多かった。第二に、美しい恋愛を描写するマンガそのものを否定し、それまでの自己（すなわち、人間関係のつらい自己、恋愛を考えない自己）を認めることによって、X'さんの自己物語を承認する他者（＝周りの人々）を獲得しうる。第三に、X'さんにとって、マンガは重要な存在ではない。したがって、マンガに関わるポジション/声を否定することは困難ではない。第四に、マンガを読むことをやめたことによって、自己変化をもたらした「マンガの声」が抑制される。それによって、自己変化が起こる状況は、持続的に生じなくなる。

一方、A'さんと H'さんの事例が示しているように、今回の調査データを見るならば、「語り得ないもの」の浮上を梃子にして自己物語を再編成する事例のほかに、「外部のポジションの侵入」によって、自己変化が起こる事例も見られる。次は、A さんの事例と C さんの事例を見る。

Aさん（女性，21歳，学生）の事例①：

（以下の内容はインタビューより取られている。筆者：陳；対象者：A）

陳：今まで、（筆者注：趣味を）隠したことがないですか。

A：隠したことがありますね。中学校に入ったときに、中学校2年生のとき、恥ずかしくなっちゃって、マンガ好きっていうか、絵描くのが恥ずかしくなって、あんまり上手じゃないのに、すごい描いていたので、自分の過去が恥ずかしくなって。人の前で絵を描くのをしなくなって、高校に入っても、まず、絵を描かなくなって、うん。別に隠したことがなかったんですけど…中学校2年から高校にかけて、人の前に、マンガ好きということ言わずという感じでした。

陳：絵を描かなくなったことは、マンガを読まなくなることは、何の関係がありますか。

A：マンガ好きな人は、絵描くのが結構好きっていうか、なんか結構関連があるっていうか。絵を描かなくなったら、マンガも読まなくなって、みたいな感じだと思うんですけど。

……

陳：その時期にマンガを読まなかった。

A：そうですね。忙しかったのがあるんですけど、ぜんぜん読んでませんでした。

陳：絵以外の理由ないですか。

A：その、マンガを読まなくなったことですか。うん…部活が結構忙しくて、マンガ読んでも暇がなくてですね。

陳：小学校のとき、マンガの面白さを分かって、なんでそれを諦めることができるんですか。

A：確かに。どうでしょう。ぜんぜん覚えていないですかね。あっ、そうですね、マンガを描くことよりも、普通に友だちとどっかに遊んだりとか、するのがあったかもしれないですね。そっちのほうが楽しくなってるかもしれないです。

……

陳：何で大学の漫研に入らなかったのですか。

A：中学校のころになって、まわりにすごい絵うまいひとが多くて、私マンガ家になりたかったんですよ、小学校の頃に、けど、まわりに、すごい絵上手な人がいるので、自分がマンガ家になれないなと思って。

陳：それはマンガを読まなくなる原因のひとつか。

A：ですかね。私、絵描くのがそんなに強い人じゃないと、中学校のころ分かって。なので、絵描かなくなって、今も、自分絵描かないと思いますので、漫研に入らなかったんです。描くのが恥ずかしいし、あんまりうまくはないので。

陳：他人に言われたことがあるか？

A：言われたことはないですけど。小学校のときから、すごい後輩とかから、「マンガ描いて」とか「絵描いて」とか、すごい言われて、中学校になると、絵欲しいという人もあんまりなくなるし、絵描くのが楽しくないなという。周りの人の絵がうまいし、怖いし、とは思って。太刀打ちできないですよ。恥ずかしくて。

陳：マンガも読まなくなって。

A：マンガも読まなくなりましたね。

Aさんの場合は、彼女が小学校の頃からマンガ好きになって、マンガ家になることを希望していたが、中学校2年生になると、周りの子には、絵が上手な人が多く存在し、自分の絵がその人たちの絵に比して、駄目なものであり、自分がマンガ家になれないと、彼女は失望した。また、小学校の頃には、自分の絵を望んだ後輩が多かったが、中学校では、自分の絵を望んだ人がなかった。こういう環境の変化によって、Aさんのそれまでの自己物語（すなわち、「自分がマンガ好きであり、自分の絵が望まれ、自分はマンガ家になる」という自己物語）が衝撃を受けた。「私はマンガ家になれない。私の絵が上手ではない」ということが意識された。ここに注意しなければならないのは、「私はマンガ家になれない。私の絵が上手ではない」という声は、「語り得ないもの」とはいえない。「語り得ないもの」は自己物語の内側にあるものであるが、「私はマンガ家になれない。私の絵が上手ではない」という認識は恐らくAさんの自己物語の外部にあるポジションの侵入によって生起する声である。外部のポジションの侵入によって、それまでの自己物語の一貫性が脅かされたということである。

この事例における「外部から侵入するポジション」の特徴を見れば、そのポジションは、まずAさんの実体験と関わっている。それによって、Aさんの自己空間におけるほかの声はそのポジションが持つ声を否定することができない。また、そのポジションは一時的に侵入したものではない。日常の学校生活において、その声が繰り返され、強化されることによって、Aさんはそのポジションを対話的關係性から排除することが困難である。

当時、自己変化が起こる状況を見るならば、第一に、中学校において、彼女の既存の自己物語を承認する他者が少なくなったことによって、既存の自己物語を維持することが難しくなっていた。第二に、周りの人たちは、再編成された自己物語を承認することができる。第三に、自己変化を促したことには、マンガに関するもののみならず、他の時間的・

状況的理由もあるということが分かっている。第四に、Aさんの事例②(後述)に比して、当時のAさんの自己において、マンガが自己物語における重要性/中心性は弱いということが分かる。

こういった外部から特定のポジションが侵入する際、環境の変化に従う自己空間における動き/衝突に伴って、不確実性が感じられる。最後に、Aさんは同一的な自己物語を編成するため、「自分がマンガ好きであり、自分がマンガ家になる」という既存の物語を、「自分がマンガ好きだった。これからはマンガ好きではないため、マンガ家にならなくてもいい」という自己物語の編成によって、「現在/将来の私とはあまり影響しない、過去の出来事」として書き直された。それによって、自己物語の一貫性と連続性が保証され、不確実性が緩和された。

同じく外部のポジションの侵入によって起こる自己変化の事例として、Cさんの事例も見られる。

Cさん(女性, 24歳, 学生)の事例:

Cさんは中学生になったとき、最初に入ったクラスにおいて、マンガ好きが多かった。当時、彼女はマンガ、同人誌をたくさん読み、マンガの話題について友人と頻繁に交流した。中学校2年生になった際、彼女は別のクラスに入った。新しいクラスメートに、マンガの話をしたことがあるが、相手に「え?マンガ?」と言われ、彼女は「自分の趣味がおかしい」と思うことになった。しかし、当時の彼女は1年生のときに知り合ったマンガ好きのクラスメートと友人関係を保ったことによって、マンガを読むことを続けた。

高校生になる際、Cさんはマンガを読まなくなった。その理由について、彼女は「オタクっぽいついて感じが当時あって、オタクっぽいと、あんまり、クラスでも馴染めないの、オタクっぽさをなくしてしまおうと思って、(筆者:自分で?)自分で。やめちゃいました」と語っている。

この事例において、周りの人の発言によって、Cさんははじめて「マンガ好きがおかしい」と思った。すなわち、「マンガ好きを理解してくれないクラスメート」というポジションがCさんの自己空間に入り、また、「オタクっぽいと、クラスで馴染めない」という経験に関わるポジションもCさんの自己空間に侵入した。それによって、「クラスで馴染めない」ことを恐れるCさんは、不確実性をもつことになった。このような不確実な状況を変えるため、Cさんは高校生になることを契機にして、自己物語を再編成した。すな

わち、「私はオタクではない。ちゃんとクラスに馴染むことができる」ということになってきた。自己物語の再編成に伴って、Cさんはマンガを読むことをやめた。

こういった自己変化にも、前述したUさんとAさん、Xさんの事例に見られる「一定の状況」を備えている。すなわち、高校生になってから、「マンガ好き」としての自己の物語を認めてくれる他者（＝中学校時代の友人）は存在しなくなった。また、高校の友人は、Cさんの再編成された自己物語を承認してくれる。第三に、当時のCさんにとって、自己物語の編成において、クラスに馴染むことは、マンガという趣味を維持することより、重要である。第四に、「高校」という状況は、一時的ではなく、ある程度持続するのである。

また、この事例における「外部から侵入するポジション」の特徴は、Aさんの事例に見られる「外部ポジション」の特徴と一致している。つまり、侵入するポジションは実体験と関わること、およびそのポジションを自己における対話的關係性から排除することが困難だということである。

以上はマンガという趣味をやめる事例を分析し、自己変化のプロセス、および自己変化が起こる状況を考察してきた。要するに、これらの事例を通じて、「状況の変化→『語り得ないもの』の浮上/外部のポジションの侵入→不確実性の生起」と『語り得ないもの』の浮上/外部のポジションを梃子にして、自己物語を再編成する→不確実性の緩和」という自己変化のプロセスが見取られる。また、上述の事例を見るならば、状況の変化には、いくつかの共通な特徴がある。①古い自己物語を承認する他者の減少ないし不在と、②再編成される自己物語を承認する他者の存在、③自己物語の再編成によって否定される古い自己物語におけるポジションは、自己において、中心的な位置を占めていない。④変化が起こる状況の持続性である。

しかし、このような「一定の状況」は、自己変化にとって要件であるか。この問題を解明するため、次は、不変（すなわち、状況は変化したが、マンガという趣味を続けたということ）に関する事例を見よう。

まずはCさんの事例を再び考察したい。「変化」ではなく、「不変」に注目するならば、Cさんの事例におけるある重要なポイントが浮かび上がっている。つまり、Cさんは中学校2年生のとき、自分の趣味がおかしいと考え始めたが、実際にマンガという趣味を放棄したのは、高校に入学した後であったのである。なぜこのような「滞り」が現れたか。

それは、中学校2年生のとき、Cさんの古い自己物語を承認する他者がいたからである。逆に、Cさんのマンガ好きとしての自己物語を承認する友人が多かったことによって、それらの友人は、Cさんのマンガを放棄する自己物語を承認してくれないということがある。

このような「マンガという趣味を維持する」ことについて詳細に語った対象者は、Aさんである。以下はAさんの事例②を考察する。

Aさんの事例②：

(以下の内容はインタビューより取られている。筆者：陳；対象者：A)

陳：いやな（筆者注：彼氏の）タイプがいますか。

A：私の話を聞いてくれない人がいやです。（略）

陳：なんでいやですか。

A：意見とか、私の話を聞いてくれないっていうのは、なんか、私のこと認めてくれないというか。否定される気分になっちゃうので。

……

陳：もし、相手がコナン好きな人を認めていないなら、どう思いますか。

A：好きなひとですか。それが冗談だったら別にいいですけど、本気にコナン好きなのはおかしいといわれたら、無理っていうか。

陳：そうですね。どこかまずいですか。

A：まず、知っていないと、言っていないと…私がコナン好き好きっていうのを知っていない人はいるんですが、知らない人たまにいて。そういう人を好きになったことがあります。でも、私はコナン好きなことを知らないから、付き合いえないなという意味、思っちゃいます。

陳：もし、付き合いと、やばいと思いますか。

A：やばいですね。付き合いってから、コナン好きなことがばれるじゃないですか。それを認めてくれればいいんですけど、それを認めてくれなかったら、悲しいので。

この事例において、Aさんは、彼女が『名探偵コナン』を好きであるということを知らなかった男性を、好きになった経験について語っている。それまで、彼女の既存の自己恋愛物語（の一部）は、「私の話を聞かない人、私を認めない人が嫌だ」ということであった。その男性を好きになった際、「私の趣味を認めてくれない人がいるかもしれない」という「語り得ないもの」が浮上してきた。もし、彼と付き合いってから、『名探偵コナン』

という趣味に気付かれ、さらにその趣味を彼が認めてくれないなら、自分がどうしたらいいのかと、Aさんは考えていた。さらに、その際、Aさんの恋愛関係において、Aさんの既存の自己物語における重要な部分を承認しうる人が欠如するということが生じる恐れがあった。それによって、Aさんの自己空間において、不確実感が生じたのである。

Aさんは、自分の生活は勉強と『名探偵コナン』しかないと思い、もしそれを認めてくれないなら、自分が悲惨すぎるではないかと考え、結局、悲惨な状況（想像的対話において生起している状況）を回避するため、Aさんは自己物語を再編成した。言い換えれば、既存の自己物語が脅かされる際、Aさんの自己空間における複数のポジションが対話的關係性に関わって、その一連の対話の結果のまとめとして、「私は、自分の『名探偵コナン』という趣味を分かっていない人とは付き合わない」という自己物語が語られている。それによって、Aさんの想像的対話に発生した悲惨な状況が回避され、不確実性が緩和された。

この事例と前述の自己変化に関わる事例との間に、明確な差異がある。すなわち、Uさんの事例とAさんの事例①において、対象者はマンガという趣味の放棄を自己物語の再編成に加えたことに対し、Aさんの事例②において、対象者が好きな男性より、趣味のほうを求めている。Aさんは悲惨な状況を回避するため、趣味の放棄を選択することもあり得るが、なぜ彼女がそれをできなかったのか。そのような差異を、「状況の差異」でとらえたい。すなわち、上述の自己変化が起きる状況と見れば、そこには差異があるということである。

Aさんの事例①において、彼女が新しい環境、つまり、「自分がマンガ好きであり、自分の絵が望まれ、自分がマンガ家になる」という既存の自己物語を承認してくれる人が少ない環境に入って、自己変化を遂げたのである。また、当時の彼女にとって、マンガが自分の愛好であったが、それは後日の自分の『名探偵コナン』への愛好とは異なる次元のものである。

Aさんは高校三年の頃、『名探偵コナン』を好きになったのである。それ以来、彼女は『名探偵コナン』とその関係作品以外のマンガ・アニメ作品には一切接触していない。原作を読むのみならず、彼女は作品に関わる情報を大量に収集し、同人作品を愛読し、マンガやテレビアニメないし劇場版アニメを繰り返して享受している。すなわち、中学校の頃より、現在の彼女のマンガへの没入度が高い。彼女の日常生活において、マンガ（『名探偵コナン』限定）がかなり浸透している。彼女にとって、『名探偵コナン』という作品は非常に重要な存在である。言い換えれば、彼女の自己空間において、『名探偵コナン』に

関するポジションが多く生起・侵入していて、ほかのポジションとの間の対話的關係がより頻繁に活発化している。さらに、彼女の現在の自己物語には、『名探偵コナン』に関する声はかなり重要な位置を占めているということがわかる。

また、現在の A さんにとって、周りの人々はほとんど彼女の趣味を知り、その人々は長い間に彼女の『名探偵コナン』に関する自己物語を承認してくれてきた他者である。逆に、現在の彼女の周りに、『名探偵コナン』という趣味を否定する A さん」という物語を承認する他者は少ない。さらに、このような状況は長期間に持続するということが分かる。

上述の四つの状況（既存の自己物語を承認する他者の不変、新たな自己物語<それは実際に編成されていないが>を承認する他者の欠乏、状況の持続性、および自己物語における『名探偵コナン』に関わる声の重要性）によって、彼女は、「自分が『名探偵コナン』好きだ」という自己物語を書き換えることができなかったということが考えられる。つまり、自己物語の再編成にとっては、一定の状況が必要である。それが存在しないと、ある自己物語の再編成がうまく行われない。

自己変化に関して、事例から分かるもう一つのことは、自己物語とは複数の自己物語と見做されることができ、そのなかの一つの自己物語の再編成は、ほかの自己物語の変化ないし全体的な自己物語の大規模の変化を意味していないということである。

以上は、典型的な事例を通して、図 3（第二章第四節）に提示される「自己変化に関する仮説間の連関」を部分的に検証した。しかし、事例についての考察から、状況の変化によって、変化の契機として個人に意識されるのが、自己の内部における「語り得ないもの」のみならず、外部から自己に侵入する何らかのポジションでもありえるということが分かっている。それは野家（2003）が指摘しているように、「物語りのネットワークは境界条件としての外部に絶えず圍繞されているのであり、そこから越境してくる異他的なるものの到来と遭遇を通じて、われわれは物語りを語り直し、更新するダイナミズムのなかへ身を投ずる」（野家，2003：65）ということである。

それによって、自己変化に関する仮説を部分的に書き直す必要がある。

仮説 2：a)ある状況の変化による新しい対話の発生（たとえば、実在の対話や自己における想像的対話など）によって、b)「語り得ないもの」に光が当たり、あるいは c)外部のポジションが侵入する。

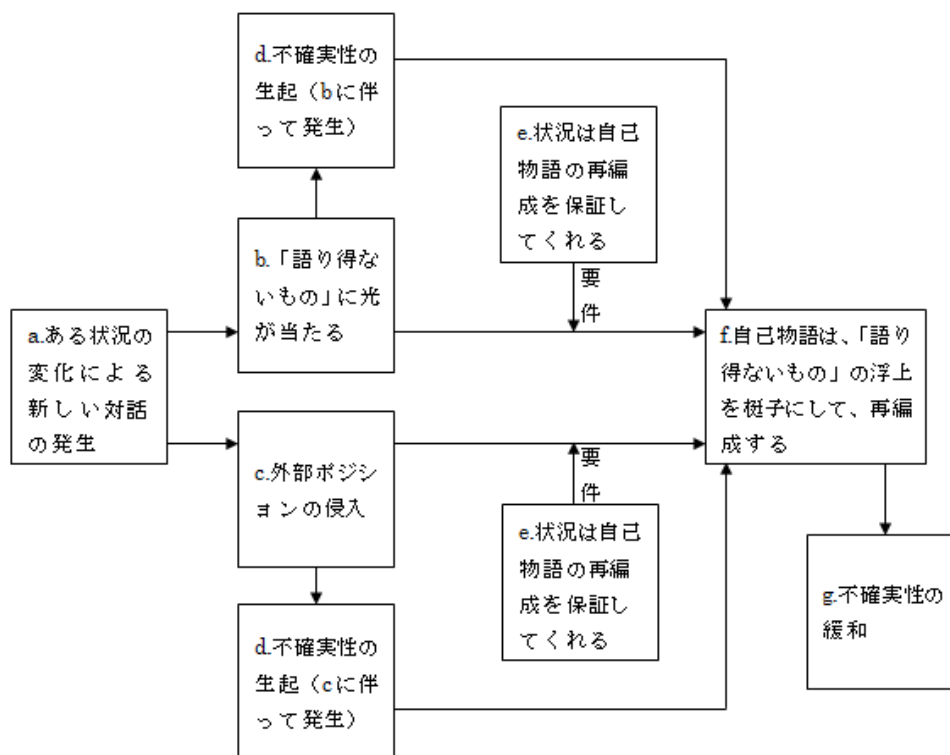
仮説 3 : b) 「語り得ないもの」に光が当たる際、あるいは c) 外部のポジションが侵入する際、d) 自己には不確実性が生起する。

仮説 4 : e) 状況が自己物語の再編成を保証してくれる際、f) 自己物語は、「語り得ないもの」の浮上や外部のポジションの侵入を梃子にして、再編成されていく。それに伴って、g) 不確実性が緩和される。

仮説 5 : 自己物語の編成は、既存の自己物語を全部消滅させ、完全な新しいものを編成するわけではない。あくまで、それは複数の自己物語のひとつあるいはいくつかを書き直すことにすぎない。

仮説の書き換えによって、図 5 が制作される。

図 5 自己変化に関する仮説間の連関 (修正後)



自己変化に関する仮説(仮説 2、仮説 3、仮説 4)間の連関が上図で示されている。すなわち、a は b と c の前提になり、b あるいは c に伴って d が引き起こされる。B あるいは c の生起によって f が起こるという過程において、e という条件が必要となるのである。また、d によって、f が求められている。f の完成によって、g が達成される。

第三節 本章のまとめ

聞き取り調査のデータに基づいて、データ分析と事例考察を行った。本節においては、考察から分かることをまとめる。

データ分析から、まず、自己空間における対話的關係性や自己物語の編成に関わる声が多様であるということが分かった。ただ、自己恋愛物語の編成には、マンガから読み出される要素がより周辺的な位置を占めている。それに対し、実体験に関わる声がより中心的な位置にある。

しかし、マンガに関わる要素が、対象者の自己恋愛物語の編成に影響しているということ否定できない。その影響に関しては、主に以下の五つに要約することができる。第一に、マンガは対象者に、恋愛の世界（それが現実性を持つかどうかは不問）を見せている。第二に、マンガは、対象者の自己空間における既存の諸要素を解釈し、既存の意識を明確化させる機能を果たしている。第三に、マンガは、個人の精神力や時間などの分配に影響するということである。第四に、マンガは、自分と相手の自己空間の間の対話的關係を活発化する契機になり、さらに、それが二つの自己空間の共有できる部分を拡大する契機ないし二つの自己空間が重なり始める契機になる場合もある。第五に、マンガは、自己恋愛物語の展開に関わる非常に重要な要素となりうる。「マンガ好きとしての自分」というポジションの保証は、一部の対象者の恋愛・結婚相手を選択する際の重要な条件になる。

また、マンガが自己恋愛物語の編成に与える影響に関連している要素は、五つある。すなわち、①マンガにおける恋愛要素への関心の差と、②マンガにおける恋愛物語への理解の差、③理想と現実への認識の差、④既存の恋愛意識、⑤マンガへの没入度といった五つの要素である。

②について考察する際、恋愛についての理解（一般的に多くの人々に共有されている理解）を支える既存のポジション/声が欠けるならば、自己が自己空間に入るポジション（＝恋愛要素）に付与する声が一般的な理解から外れるということが明らかにされた。それによって、仮説1が検証されている。

また、③を考察するため、ハーマンスが提供している自己空間の構造において、「サブ空間」の存在を仮定した。つまり、ある主題に関するポジションが主に存在/移動/活発化する範囲を、その主題に関するサブ空間としてとらえている（図4参照）。各サブ空間が

重なったり、離れたりしているが、それらが完全に一致することはない。各主題に関する自己物語の編成は、主にその主題に関するサブ空間におけるポジション/声によって完成されている。実体験とマンガの両方が恋愛に関わることによって、二つのサブ空間において、二つの自己物語が編成されている。ただ、日常の自己恋愛物語が編成される際、マンガに関わる声がより周縁的な位置にあるということがデータから分かっている。逆に、マンガに関わる恋愛物語が編成されている際、日常空間における声がどう参与しているかということはデータから読み取れていない。さらに、通常(少なくとも、対象者全員の場合)、対象者の総体的な自己恋愛物語の編成において、日常(=実体験)の自己恋愛物語が中心的位置にあり、マンガなどに基づいて形成されている理想的な自己恋愛物語がより周縁的な位置にあるということが理解されている。

自己変化について考察する際、6人の対象者の事例が紹介されている。事例の対比によって、自己変化のプロセスがある程度明らかにされている。しかし、それが第二章第四節に立てられている仮説とは一致していない。すなわち、状況の変化によって、変化の契機として個人に意識されるのが、自己の内部における「語り得ないもの」のみならず、外部から自己に侵入する何らかのポジションでもありえるということである。したがって、本章では、考察に基づいて、自己変化に関する仮説を書き直した。その四つの仮説の関連性は、図5で示されている。要するに、ある状況の変化によって、「語り得ないもの」(それは自己空間に既存するポジションであるが、自己が統一性と一貫性を維持するため、そのポジションは対話的關係性から排除され自己物語の編成から排除されている)に光が当たり、あるいは、外部のポジションが自己空間に侵入する。それに伴って、不確実性が自己において生起する。もし当時の状況が自己物語の再編成を保証できるならば、自己物語は、「語り得ないもの」や外部のポジションの侵入を梃子にして、再編成されていく。ここで注意しなければならないのは、通常、再編成された自己物語は総体的自己物語の一部となっている。部分的な再編成は自己物語の全体的な書き直しではない。

ここでは、「自己空間に侵入する外部のポジション」と「再編成を保証してくれる一定の状況」に説明を付ける必要がある。

データから、「自己空間に侵入する外部のポジション」が自己変化の契機となることには、二つの条件がある。第一に、自己は、そのポジションを対話的關係性から完全に排除する必要がない、あるいはそれを排除することができない。第二に、自己空間におけるほかの声は、そのポジションが持つ声を完全に否定することができない。

また、「再編成を保証してくれる一定の状況」に関しては、四つのことが分かっている。第一に、既存の自己物語を承認してくれる他者が少なくなるないし不在になるということである。第二に、再編成される自己物語を承認してくれる他者が多く存在するという事である。第三に、変化した状況は持続することである。また、自己空間の内部的状況に関して、第四に、もし、自己物語の再編成によって、あるポジション/声が否定されると、その否定されるポジション/声は、既存の自己物語の中心的な位置を占めるものではないということである。否定されるポジション/声が、自己空間にかなり浸透/活発化するならば、再編成を遂げることが困難であるということが分かった。

第四章 結論

本研究は以下のようにまとめる。

序章では、戦後日本マンガが問題化された歴史を背景にして、「マンガが読者の恋愛に関わる自己形成にどう影響しているのか」という問題を提起している。

さらに、第一章は、先行研究の概観を通して、上述の問題を究明するための視座、すなわち、個々の対象者のライフストーリーに接近し、自己/文化を開放的かつ分散的な存在と看做している視座の適切性と必要性について検討してきた。

こういった視座を構成するため、文化心理学領域におけるハーマンズの分散的自己論、および社会学自己論における浅野智彦の自己物語論を参照し、「分散的自己の物語的形成」という理論枠組みを提案している（第二章）。この枠組みの形成は、ハーマンズの理論に残されたいくつかの問題を解明し、または自己物語論に詳述されていない自己内部における動きを把握することができる。

また、この枠組みに基づいて、マンガが自己に与える影響に関わる五つの仮説が設定されている。問題を究明するため、または仮説を検証するため、筆者が2010年から2011年にかけて行った聞き取り調査（対象者35人）のデータが分析対象になっている（第三章）。

データの分析をふまえ、「マンガが読者の恋愛に関わる自己形成に与える影響」及びその影響に関連する要素・状況を考察した。考察の結果に従って、仮説1は検証された。つまり、恋愛についての一般的な理解（一般的に多くの人々に共有されている理解）を支える既存のポジション/声が欠けるならば、自己が自己空間に入るポジション（＝恋愛要素）に付与する声が一般的な理解から外れるということが明らかにされた。さらに、自己変化に関する仮説2～5は修正された。すなわち、状況の変化によって、「語り得ないもの」に光が当たるのみならず、外部のポジションが自己空間に侵入することもありえる。そして、「語り得ないもの」の浮上あるいは外部のポジションの侵入に伴って、不確実性が自己において生起する。もし当時の状況が自己物語の再編成を保證できるならば、自己物語は、「語り得ないもの」や外部のポジションの侵入を梃子にして、再編成されていく。ただ、通常、再編成された自己物語は総体的自己物語の一部にすぎないということが分かった。

本章では、第二章に構成された「分散的自己の物語的形成」という理論枠組みを書き直

す。さらに、第二章第四節に提起した対話的自己論の図式における問題を乗り越え、最後に考察の結果をふまえて今後の研究の可能性を検討する。

1. 「分散的自己の物語的形成」という視点の再構成

まずは、本論の理論枠組みを再構成したい。

第二章において、自己形成のプロセスを理解するため、ハーマンズの対話的自己論と浅野の自己物語論が導入され、「分散的自己の物語的形成」という理論枠組みが形成されてきたが、調査データの考察を通じて、そういった枠組みを書き直す必要がある。

ハーマンズが提案している「自己空間」の図式が示すように（第二章・第一節，図 1 参照）、自己とは、一定の想像的空間として認識されている。そこには、内的自己のみならず、外的自己も自己の一部として存在している。そういった空間において、分散的な複数のポジション（I-positions）が存在している。また、自己（それは自己物語によって産み出されるものであり、対話的自己論における統一性を持つ自己でもある）は、諸ポジションに声を付与することができる（ただ、個人の既存の自己物語が異なることによって、付与される声も異なる可能性がある）。それによって、諸ポジション間には、対話的關係性が生じ得る。

こういった自己空間において（または自己物語において）、各ポジションが占めている位置には、差異がある。すなわち、より中心的な位置にあるポジションとより周辺的な位置にあるポジションがある。このような差異を把握するため、ハーマンズが提供している自己空間において、「サブ空間」の存在が仮定されている。各主題に関する自己物語の編成は、主にその主題に関するサブ空間におけるポジション/声によって完成されている。また、このように編成される複数の自己物語は、総体的な自己物語において、中心 - 周辺という位置の差も存在している。

また、自己は、分散的諸ポジションの一貫性・統一性を維持するため、諸ポジション間の対話的關係性を認可、あるいは排除する能力を持っている。したがって、対話は、一定の一貫的かつ統一的な範囲で生成して組み合わせられていく。それによって、自己において、（変化を引き起こす事態が起こらないかぎり）一貫性と連続性を持つ、ひとりの自分自身に関する物語が編成され、語り続けられている。

自己空間において、自己物語を語り続けることによって、自己イメージが維持され、そ

して人々は日常の行為のなかで無意識のうちに一定の自己イメージを抱き、それを前提にして振舞い方を選択することができる。

そして、他者あるいは社会（それらは自己空間の外的自己とは部分的に重なっているが）に対し、バーバルあるいはノン・バーバルのかたちで、人が自己物語を語ることによって、自己は産み出される。さらに、一貫的かつ連続的な自己物語を対他的に語る際、「私」は他者から自己物語の信頼性を得、自己という存在の正当性を獲得している。

対自・対他に自己について物語ることによって生み出される自己は、不変な存在ではない。ある状況の変化によって、「語り得ないもの」に光が当たり、あるいは、外部のポジションが自己空間に侵入しうる。それに伴って、不確実性が自己において生起する。もし当時の状況が自己物語の再編成を保証できるならば、自己物語は、「語り得ないもの」や外部のポジションの侵入を梃子にして、再編成され、不確実性が緩和されることになる。

以上は調査データから得る示唆を持ち込み、本論が提案する「分散的自己の物語的形成」という自己を把握するための理論モデルを書き直してきた。

2. 対話的自己物語論における問題点

これからは、対話的自己論の図式における問題点とその解決について論じておこう。

問題は、①自己がどのような基準で対話を認可/排除しているのか。②どのような状況や時間の変化が、どの程度、ポジションの劇的動きをもたらすか。③新しいポジションの侵入・生成が起きる場合、自己はそれに対してどのように声を付与するか。④どのような状況において不確実性が生起するか。それに対して個々人はどう対応するかという4つにまとめられる。

前章の考察から、以下のことが分かった。

①自己は対話を認可/排除する際、すなわち、自己物語の一貫性と完結性を達成しようとする際、「語り得なさ」を隠蔽しなければならない。前章で考察された事例から、「語り得なさ」の隠蔽と他者の声（集団的声を含む）の関係性が見られる。他者に対して語ることによってはじめて「語り得なさ」を隠蔽することができる。逆に、「語り得ないもの」の浮上をもたらす状況において、ある他者の声が長期的に持続する場合には、それらの声を対話的關係性から排除することが困難である。したがって、自己物語の一貫性と完結性を保つため、「語り得ないもの」を「語り得るもの」にして自己物語を再編成することが

求められる。要するに、自己は対話を認可/排除する基準は、他者がいかに一貫性と完結性をもつ自己物語を承認すること、および自己が他者の声を排除する可能性である。

②と④は自己変化についての考察で説明できる。状況や時間の変化が自己変化をもたらさない場合には、自己空間におけるポジションの劇的動きは見られない。一方、状況や時間の変化によって、「語り得ないもの」が浮上してくるあるいは特定の外部ポジションが侵入する可能性もある。その際、自己は不確実性を感じがちである。不確実性を緩和するため、自己変化が求められている。その場合、既存の自己物語を承認する他者が減少ないし不在になるならば、「語り得ないもの」や「外部のポジション」を梃子にして他者の承認を得られる新たな自己物語の編成が達成される。自己物語が再編成される際、ポジションの劇的動き、つまり既存のポジションの排除、新たなポジションの侵入、およびポジション間の関係性の変化は起こりやすい。

③新しいポジションの侵入・生成が起こる場合、自己は既存の自己物語に基づいてそのポジションに声を付与する。しかし、新しいポジションが自己物語の一貫性と完結性を脅かす場合、もしそのポジションが排除可能であれば、ポジションの排除も起こり得るということである。

以上は、「分散的自己の物語的形成」という視点を用いて、語りの分析をふまえてハーマンズの理論に残される問題を考察してきた。最後は、今後の課題を展望する。

3. 今後の課題

第三章の考察から、マンガは読者の恋愛に関わる自己形成に影響を与える多様な要因の一つに過ぎず、マンガが与える影響が実体験の影響より弱いということが分かった。さらに、マンガの影響が限られ、自己内部と外部の諸要素・状況の差異によって、その影響は人によって異なる。また、そういった要素と状況の変化によって、影響は変化することもあり得る。

従来のメディア研究やマンガ読者研究と異なり、本論はメディア/文化としてのマンガと自己を、開放性と分散性を持つ存在として捉えている。さらに、こういった視座を用いて物語論的アプローチから人のライフストーリーに接近して個人の恋愛に関わる自己形成のプロセスを考察してきた。得られた知見は、メディア/文化が個人に与える影響が孤立的なものではないということである。それはそれまで自己形成に参加してきた多様な要

素と諸要素間の相互関係と緊密に関わっている。そして、諸要素とそれらの相互関係に基づいて形成されている自己は、オーディエンスがある情報に対する理解や態度を形成する基盤となっている。そもそも、メディアや文化の場に身を投じているのは、自己そのものである。生まれてから絶えず形成されていく「自己」を論外とするならば、自己形成の時間的系列や自己形成に関わる多様な要素とそれらの相互関係、および自己内部の変化を無視して、ある断片、ある点としての行為や意識について認識することにすぎないだろう。多様な要素を包含している「自己」そのものを通してはじめて、ある文化集団に所属している人や、あるメディアを利用しているオーディエンスの個人をまるごと捉えることができる。今後、このような個人を対象とする質的調査が積み重ねられるならば、メディア・オーディエンスについての認識は豊富になり、研究対象が集団としてのオーディエンスから個々人の受容図式まで広がるだろう。

また、前章の考察の結果をふまえて、序章に提起した「マンガの読者に与える影響」ということを再考したい。

序章で述べているように、マンガ有害論の中心になるのは、マンガが本当に読者（とりわけ青少年たち）に、強い影響（とくに悪影響）を与えるのかということである。「悪影響」というものは、二層の意味を含んでいる。一つは、悪質な情報の提供である。もう一つは、読者を実在世界から疎外させることである。

今回の恋愛をテーマとする質的調査のデータから見ると、「マンガは読者に悪影響を与える」という論説を支持する事例が見当たらない。

第一に、対象者の現時点の自己恋愛物語を見るならば、「マンガ」の影響はより弱い。多くの対象者はマンガにおける恋愛物語に関心を持っていないが、それに関心を持つ/持った対象者だとしても、恋愛意識・恋愛行動がマンガから強い影響を受けたとは言えないということが分かった。彼・彼女たちは、十代前半までに読んだ恋愛物語に憧れ、そこに描写された恋愛の雰囲気・趣を学習したかもしれないが、憧れの気持ちは、実体験の積み重ねにともなって自己恋愛物語の周辺に移してきた。一方、マンガから学習したもの（たとえば、デートのやり方など）は、後日の実体験において参考されていることがあるが、逆に、実体験によって、以前読んだ恋愛シーンを理解してきたこともある。また、表 3 が示しているように、憧れの対象や恋愛学習対象となっているのは、マンガのみならず、他のメディア（たとえば、テレビドラマ、映画など）も類似の影響を与えることが分かった。

マンガを通して、自分の恋愛意識が明確化される事例もあるが、それはマンガにおける恋愛物語が個人の恋愛意識形成に参与して新しい声を提供することではなく、既存の意識がマンガによって強化・具象化されるのみである。

第二に、そういう影響は「悪」とは言えるだろうか。「少年少女の美しい恋愛」や「恋愛の雰囲気・趣」、「既存の自己恋愛物語を明確化すること」などは、悪質な情報とは言えない。さらに、調査データにおいて、実在世界から疎外される人はいないということが分かっている。対象者たちはマンガを享受していると同時に、自分の生活・仕事・恋愛をも積極的に展開している。「マンガ世界はマンガ世界、現実世界は現実世界」であることは、対象者たちの共通の認識である。

第三に、われわれ成人がマンガから読み出すものが、子ども・少年たちがマンガから読み出しているものとは一致していない可能性がある。われわれにとって、「恋愛もの」としてマンガやゲームに描かれたものは、子ども・少年たちにとっては、「恋愛もの」ではないということもあり得る。また、「恋愛もの」を読んでも、それを全体的な物語を構成する一部として読んでいる人も少なくない。

第四に、自己形成の過程の差異（＝既存の自己物語の差異）によって、マンガにおける恋愛物語の読解はかなり多様なものである。マンガは自己形成に影響を与えるが、その影響は、人のそれまでの人生における多様な要素・状況と関わると考えられる。マンガの影響は「悪」と「良」のどちらに当たっても、それはマンガに描かれた物語や場面そのものの単独の影響ではない（むしろ、マンガの影響は他要因より弱い）ということである。

要するに、本研究の結果、「マンガの悪影響」は支持できないと結論づけることができる。しかし、「マンガ有害論」などの論説に反論するため、以上の考察のみでは足りない。なぜなら、今回で用いたデータは、対象者が現時点で編成した自己物語である。それは、対象者が現時点に立って自分の過去を振り返って、聞き取り調査の場において聞き手に向かって語っているものである。その際、過去のある時点の自己物語編成に関与したマンガの影響は、後日の状況や時間の変化によって、自己物語から退去した可能性がある。すなわち、本研究は、現時点で編成されている自己物語から、「マンガの影響」を物語的時間系列²⁷において考察するものである。今後、青少年の「現時点」の自己物語を分析する研

²⁷ 物語に存在する時間的系列は出来事が実際に起こる時間的系列とは異なっている。浅野によれば、自分自身について語る物語は、その結末部分において今ここにある自分に説得的なやり方で到達する必要がある。だから語られる出来事はみな、今の自分をどのようなものとするかにかたがた、またその結末を納得の行くものとするように、配置されることになるのである（浅野，2001：9-10）。

究が行われるならば、青少年に対するマンガの影響を捉えることができるだろう。その際、本研究は、成人の自己物語に対するマンガの影響についての研究として、青少年を対象とする研究とつながり、マンガの影響が個人のレベルにおける全体像を捉える一環となり、異なる時点で編成される自己物語におけるマンガの影響の比較研究のデータにもなりうる。

それに、本文の分析対象となる事例は限りがあるため、今後の研究を期待している。これから、もっと豊富なデータ（たとえば、18禁オリジナルマンガや同人誌の創作に没頭する人、二次元のキャラクターと結婚することを希望している人のライフストーリー）を収集することができるならば、読者の恋愛に関わる自己形成に対する理解はより全面的になるだろう。

また、今回のデータ分析から、比較文化論的知見が得られなかった。日中の対象者の恋愛に関わる自己形成のプロセスの間に、類似性がかかなり高い。とくに、マンガが対象者の自己形成に与える影響を見るならば、日中対象者の間に、大きな差がない。事例を見れば、差異を見当たるところは一つのみである。すなわち、日本人の事例には、小さい頃、マンガを読んだことによって、「かっこいい相手」を判断する基準が形成されてきたという事例がないが、中国人の場合、そういった対象者が3人いる。その差異は、サンプリングの偏りによって起きる可能性がある一方、日中の対象者の恋愛に関わる自己形成の間に差があるという可能性もある。今回の調査から、その点を明らかにすることが困難であるため、今後の比較研究を期待している。

最後に、恋愛のみならず、「マンガが読者の自己に与える影響」を人生の他の出来事にリンクして研究することも有意である。今回のデータから、マンガと読者の人生設定との関係性や、マンガと読者の世界観との関係性などに関わる語りが読み取られるが、考察の重点を恋愛というデータに置いているため、ほかのデータを用いて分析することを割愛した。今後、それらの方向性に沿って研究を展開するならば、各側面からマンガと読者との関係性の全体像を把握することができるのではないだろうか。

参考文献・参考 URL

参考文献

- 「悪書追放——出版界、自粛へ動く：近く倫理化に実行委」『朝日新聞』1955年4月27日，3版。
- 浅羽通明，1991，『天使の王国；「おたく」の倫理のために』JICC 出版局。
- 朝倉喬司，1989，「おたくの事件簿」『おたくの本』JICC 出版局。
- 浅野智彦，2001，『自己への物語論的接近—家族療法から社会学へ』勁草書房。
- 東浩紀，2001，『動物化するポストモダン—オタクから見た日本社会』講談社現代新書。
- 「エログロ出版は致しません：出版団体連合会業界浄化に乗出す」『朝日新聞』1955年4月3日号，12版。
- 「ひど過ぎる児童雑誌」『朝日新聞』1955年4月21日号，12版。
- 福島章，1992，『マンガと日本人——“有害”コミック亡国論を斬る』日本文芸社。
- フレデリック L. ショット著，樋口あやこ訳，1996=1998，『ニッポンマンガ論——日本マンガにはまったアメリカ人の熱血マンガ論』マール社。
- 「五月に保護育成運動：青少年問題協議会で」『朝日新聞』1955年1月20日号12版。
- Hall, S., 1980, 'EnCoding/decoding' in Hall, S., Hobson, D. Lowe, A. & Willis, P., (ed.), Culture, media, Language, Hutchinson univ. Library: 128-138.
- Hermans, Hubert J.M., 1999, 'Self-Narrative as Meaning Construction: The Dynamics of Self-Investigation' Journal of Clinical Psychology, Vol. 55(10):1193-1121.
- Hermans, Hubert J.M., 2001, 'The Dialogical Self: Toward a Theory of Personal and Cultural Positioning' Culture and Psychology, Vol. 7(3):243-281.
- Hermans, Hubert J.M., Giancarlo Dimaggio, 2007, 'Self, Identity, and Globalization in Times of Uncertainty: A Dialogical Analysis' Review of General Psychology, Vol. 11(1):31-61
- 家島明彦，2006a，「人がマンガから受ける影響についての探索的検討：インターネット上のコミュニティにおける書き込みの分析」『日本社会心理学会第47回大会発表論文集』194-195。
- 家島明彦，2006b，「理想・生き方に影響を与えた人物モデル」『京都大学大学院教育学研

- 究科紀要』52号, 280-292.
- 家島明彦, 2007, 「心理学におけるマンガに関する研究の概観と展望」『京都大学大学院教育学研究科紀要』No.53, 166-180.
- 家島明彦, 2008, 「マンガを介した青年の自己支援プログラム作成に向けて」, 『京都大学大学院教育学研究科紀要』No.54: 98-111.
- 井原圭子・高田圭子・三ツ松千佐子, 1995, 「麻原教祖の虚像と実像——オウム真理教を開いた男, サリンとオウム」『AERA』1995年4月10日号: 13.
- 井原圭子, 1995, 「共通語はSFアニメだ——オウム真理教式発想のカギ」『AERA』1995年4月24日号: 19.
- 伊藤守, 1999, 「オーディエンスの変容を<記述>する視点と方法: オーディエンス・スタディーズとメディア消費の空間論」『マス・コミュニケーション研究』No.55: 110-130.
- 伊藤遊, 2008, 「世界に広がる日本のマンガ」『国際人流』21(11), 2-7.
- イー・ヒョンソク, 2004, 「韓日マンガシステム比較——週刊マンガ雑誌と、作家たちの世代論」宮台真司・鈴木弘輝, 『21世紀の現実—社会学の挑戦—』, ミネルヴァ書房.
- 北山忍, 1997, 「文化心理学とは何か」柏木恵子・北山忍・東洋, 『文化心理学: 理論と実証』, 東京大学出版会.
- 甲村和三, 1990, 「心理学のアウトライン」増田末雄・甲村和三・他, 『心理学——人間行動の基礎的理解』, 福村出版.
- 窪田光純, 2004, 『同人用語辞典』秀和システム.
- 倉田敬子, 2003, 「マンガの読みに見る心的機構—文字と画像の融合的知覚と物語生成」『慶応義塾大学 21世紀 COE プログラム「心の解明に向けての統合的方法構築」平成14年度成果報告書』157-162.
- Lystra, K., 1989. "Searching the heart: Women, men, and romantic love in nineteenth-century America" Oxford University Press.
- McQuail, D. 1997, "Audience analysis", SAGE. 引用される部分は、伊藤守による訳文である.
- バフチン・ミハイル著, 望月哲男・鈴木淳一訳, 1929=1995, 『ドストエフスキーの詩学』ちくま学芸文庫.
- 見田宗介・栗原彬・田中義久編, 1994, 『社会学事典』, 弘文堂.
- 宮台真司・石原英樹・大塚明子, 1993, 『サブカルチャー神話解体——少女・音楽・マン

- ガ・性の30年とコミュニケーションの現在』アクロス・ブックス.
- 宮原浩二郎・荻野昌弘編, 2001, 『マンガの社会学』世界思想社.
- Morley, D., 1980, "The Nationwide Audience: Structure and Decoding" British Film Institute.
- 中島梓, 1991, 『コミュニケーション不全症候群』筑摩書房.
- 中森明夫, 1983, 『『おたく』の研究①』『漫画ブリッコ』1983(6).
- 成沢大輔・ほか, 1989, 『おたくの本』, 別冊宝島104, JICC 出版局.
- 滑川道夫, 1955, 「青少年読物を健やかに—出版界への警告と民間勢力結集の提案—」『朝日新聞』1955年2月11日号, 12版.
- 野家啓一, 2003, 「物語り行為による世界制作」『思想』No.954: 54-72.
- Penn, P. 1998, 'Rape flashback: constructing a new narrative', Family Process: 37-3.
- 出版科学研究所, 2009, 『出版指標年報2009』, 出版科学研究所.
- 大内茂男, 1954, 「漫画ファンの分析」『児童心理』8(8): 64-73.
- Sarbin, T.R. 1986, 'The narrative as a root metaphor for psychology.' T.R.Sarbin(Ed.), Narrative psychology: The storied nature of human conduct, Praeger: 3-21.
- 齋藤孝, 2003, 『スポーツマンガの身体』文芸春秋.
- 住田正樹・藤井美保, 1992, 「少年少女漫画の受容過程分析——受け手の特性と反応」『九州大学教育学部紀要』教育学部門(38): 61-106.
- ヘンドリック・スーザン.S.・ヘンドリック・クライド著, 斉藤勇監訳, 1992=2000, 『「恋愛学」講義』金子書房.
- 竹内郁郎, 1998, 「マスメディアの利用と効果」竹内郁郎・児島和人・橋元良明編著『メディア・コミュニケーション論』, 北樹出版, 159-195.
- 竹内オサム, 1995, 『戦後マンガ50年』筑摩書房.
- 上野千鶴子, 1989, 「ロリコンとやおい族に未来はあるか!？」『おたくの本』JICC 出版局.
- ジェームズ.W 著, 今田寛訳, 1980=1992, 『心理学』岩波文庫.
- やまだようこ, 2007, 「ライフストーリー・インタビュー」やまだようこ編『質的心理学の方法』, 新曜社: 124-143.
- 吉見俊哉, 2001, 「メディア論の系譜Ⅰ・Ⅱ」吉見俊哉・水越伸, 『メディア論』, 放送大学教育振興会, 84-104.

参考 URL

文化庁，国際文化交流懇談会（中間報告），2003

http://www.bunka.go.jp/1kokusai/kokusai_kouryuuhokoku1.html

最終アクセス：2011/11/12 13:52

国立図書館，「情報通信ソフト懇談会」最終報告書，2003

http://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/235321/www.soumu.go.jp/s-news/2003/031225_8a.html

最終アクセス：2011/11/12 13:55

2次元キャラクター結婚認定協会（2.D.C.M.A）

<http://www.eonet.ne.jp/~2dcmaa/>

最終アクセス：2011/11/12 14:07

「二次元キャラとの結婚を法的に認めて下さい」

<http://www.shomei.tv/project-213.html>

最終アクセス：2011/11/12 14:10